
境振背鳴の救世主

雑草 浅葱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

境振背鳴の救世主

【Nコード】

N4517U

【作者名】

雑草 浅葱

【あらすじ】

10年前、ムーンライトブリッジの交通事故。その場に2人の少女がいた。

機械の乙女・アイギスが黒い化け物・デスを封印した瞬間、世界がズレた…。

違う運命を宿し、しかし同じ道を行く旅路の果てに光はあるのか…。

10年前

××月××日 深夜

ムーンライトブリッジ。

完成して間もない美しい橋の上は地獄と化していた。

景色が緑色に染まる中、轟々と燃える数台の車。窓から出ている腕はぐったりと脱力し、既に生きていない事を示している。

さっきまで僕が乗っていた車だ。

今日は家族で少し遠くまで出掛けていた。その帰りにムーンライトブリッジを通りかかった。

そこまでは何もなかったのに。

周りが一瞬で緑に染まり、乗っていた車は対向車に激突した。

何が起きたのか分からなかった。

大きな衝撃とともに視界が回転し、身体は外へと投げ出されていた。

これは夢じゃないのか？

痛みが全身を支配する中、ただ漠然と思った。

あまりの展開についていけない。

痺れた頭ではただ目の前の光景を見ているしかなかった。

黒い化け物と白い少女が戦っている。
黒い化け物にむけて銃を乱射する少女。
まるでアニメや映画の世界だった。

入寮（前書き）

主人公の一人称は基本俺です。

入寮

“新都市交通” あねはづる” 車内

窓で頭を打った衝撃と痛みで目が覚めた。

うっかり立ったまま寝ていたらしい。

耳にしていたイヤホンからは曲がずっと流れていた。

窓には青く長い前髪で右目が隠れている自分の顔が写っている。

『本日は、ポイント故障のためダイヤが大幅に乱れ、お急ぎのお客様には大変ご迷惑をおかけ致しました。』

時刻はもう0時近い。

『次は、巖戸台…。』

ようやく目的地だ。

しかし、懐かしい夢を見た。

もう10年になるんだな。

あの事故から…。

あねはづるが目的の駅に着いた。

『巖戸台、巖戸台です。』

元々乗っていた人数が少ない事もあり、人はすぐに掃けていく。

気にする事なく改札口を通過する。

…遅くなってしまった。

ふと見ると駅の時計がちょうど0時をさした。

電源の落ちるような音と共に世界が緑に染まり、所々血液を連想させるような赤い液体が溜まっている。機械が全て停止し、もちろん

聴いていた音楽も勝手に停止した。

…駅に着いただけでもいいか。

この時間を体験するのは初めてではなく、今更何とも思わない。

…寮に急ぐ。

溜息を一つはき、寮までの地図を片手に歩きだした。

駅を出る。

人気の無い街には幾つもの棺のようなオブジェが並んでいる。

気付いたらそこにあった景色。オブジェが何であるのかなど気にしたこともないし、どうでもいい。

空には巨大な月。

蛍光色の黄色で塗り潰したかのような月は周りの緑と相まって不気味さに拍車をかける。

月光館学園 巖戸台分寮

1時間近く歩いてようやく寮を見つけた。

途中で道に迷いそうになった時はどうなるかと思っただが、何とか着いた。

入学案内書にかかれていた寮は古い洋館のようだった。

このままホラー映画に出しても全く違和感はないだろう。そんな印象を持った。

ゆっくりと寮の扉を開く。

「ようこそ。」

声がすぐそばで聞こえた。どこかで聞いたような声だ。そばには10歳ほどの蒼い目の少年がいた。

上下共に白と黒のストライプだ。囚人服を連想した。

というか、子供がこんな時間まで起きていたら駄目だろ。

「遅かったね。長い間、君を待っていたよ。」

もう0時だしな。

そう思ってみたが、少年の言っている意味は少し違う気がした。

少年の手には一枚のカードがあった。

「この先へ進むなら、ここに署名して。一応、”契約”だからね。」
契約しないと寮に入れないのか？

「怖がらなくていいよ。」
別に怖くない。

「ここからは、自分の決めた事に責任を取って貰うっただけだから。」

差し出されたカードには”我、自ら選び取りし、いかなる結末も受け入れん”と記してある。

当たり前的事を。

しかし、書面で書くことによってより責任感を持たせようということだろうか。

受け取ったカードの署名の欄に”有里 湊”と記入する。

「…確かに。」

少年はカードを再び手にする。

「時は、誰にでも結末を運んでくるよ。たとえ、耳と目を塞いでいてもね。」

まるで死ぬかのような言い方だ。

…さっきの署名、自分はいつ死んでもいい、という意図も含まれて

いたのか？

…そんな訳無いか。

少年は自分の行動に責任を持ってもらう、と言っていた。

個々の身勝手な行動で団体行動を乱すな、ということだろう。寮の中で団体としての行動が多いのかどうかは知らないが。

どうでもいいが、契約というならこんな小さな子供一人に任せるな。

「…さあ、始まるよ。」

何が、と問う前に少年は闇に溶けるようにスウツと消えていった。

…幽霊、だったのか？

「…誰!？」

知らない少女の緊張したような声が響いた。

…いや、寮生一人も知らないが。

初めてこの時間内に動く人を見た。

…人いたんだ。どうでもいいけど。

茶色のくせ毛にピンクのカーディガンを着た少女は、驚いた顔をしている。

腕には赤い腕章。…S・E…何だ？

「この時間に…どうして…」

やはり0時というのは遅すぎるか。

「まさか…」

少女は何か気付いたらしく、驚きから敵意に変わる。…何で!？
彼女は少し迷いつかのように手を足につけられたホルスターのあたりでとめていたが、ゆっくりと銃のグリップのようなものを握る。
だが俺は見知らぬ人に銃を向けられるような事をした覚えはない!

「待て!」

いつでも逃げられるように構えた時、彼女の後ろから別の人が現れる。
軽いウェーブの掛かった紅い髪をした凜々しい人だ。彼女も同じ腕章をしている。

「……!!」

寮の明かりが付く。イヤホンから音楽が洩れてきた。停止させる。

「明かりが……」

少しホツとしたように茶色の少女が呟く。

あの時間が過ぎたのだ。

それだけ警戒すべき”何か”があその時間内にあっただろうか？

紅い人に勧められ、ラウンジにあるソファアに座った。

「到着が遅れたようだね。私は桐条美鶴。この寮に住んでいる者だ。」

紅い髪の人が名乗る。

「……誰ですか？」

怖ず怖ずと茶色の彼女が尋ねる。

敬語つてことは先輩にあたるのか。

「彼は転入生だ。ここへの入寮が急にきまってね……。いずれ男子寮への割り当てが正式にされるだろう。」

「……いいんですか？」

「……さあな。」

……小声で話していても丸聞こえだ。こここの寮は何か訳ありなのか？
……とりあえず女子寮でしたとかいうオチはなしで頼む。そんなゲームの要素はいらない。

「彼女は岳羽ゆかり。この春から2年生だから、君と同じだな。」

「……岳羽です。」

不感オーラ出し過ぎだろ。

「俺は有里湊。よろしく。」

とりあえず笑って挨拶をしておく。人間関係のごたごたは面倒臭い。笑顔は何とかの潤滑油らしいし。

「あ、はい…。こちらこそ、よろしく…」

毒気を抜かれたって表情だ。

「…ところで、此処は女子寮ですか？」

「そういう訳じゃないですけど…何ていうか…」

岳羽さんが言いにくそうにしているとなつかさず桐条先輩がフォローに入る。

「此処だけ例外なんだ。他の寮は男子と女子に別れている。事情は、機会があれば話そう。」

…あるんだ、話せないような事情。…あの時間が関係しているとか？

「今日はもう遅い。部屋は2階の一番奥に用意してある。荷物も届いているはずだ。すぐに休むといい。」

それは良かった。そろそろ睡魔が襲ってきていたんだ。

「あ、じゃ、案内するんでついて来て下さい。」

先輩に礼をした後、岳羽さんに案内されて寮の奥の階段から2階へ移動した。

2階の一番奥

「この部屋だね。一番奥だから覚えやすいでしょ？」

…確かに。

ついでだが敬語が無くなったな。

「えっと、何か聞きたい事ある？」

数秒間考える。

「あの署名はなに？」

「え、署名？…何の事？」

岳羽さんは何も知らないのか。まあ、幽霊だし。

「後、足につけているそれって護身用？」

岳羽がさっきまで持っていた銃の収まっているホルスターを指差す。

「ああ、うん…。そんなところ。」

護身用にしては物騒だな。…どうでもいいか。

「あの…ちよつと聞きたいんだけど。…駅からここまで来る間、ずっと平気だったの？」

「どういう意味？」

何時もと変わらなかつたが。

「どういう意味って…。」

少し考えるような顔をしていたが、ふつと何かが抜ける。安心した、とでもいうのだろうか。

「その様子だと、本当に平気みたいだね…。…ならいいんだ。ごめん、気にしないで。」

そういわれると気になるんだが。

「じゃあ、私は行くね。」

俺も早く寝たい。

廊下を歩いて行った岳羽は途中で振り返る。

行くんじゃないのか？

「あのさ…。」

…まだ何かあるのか。頼むから寝かせて。

「色々と分からない事があると思うけど、それはまた、今度ね…。」
一体何について言っているのか分からないが、一応頷く。

「おやすみなさい。」

今度こそ岳羽は立ち止まらずに階段を下りて行った。

姿が見えなくなった事を確認した後、自室のドアを開けた。

自室

段ボールが部屋の隅に数個置いてある。

親戚を転々としていたため、荷物はさほど多くない。

ベッドや絨毯が青で統一され、窓側に勉強机、ドアのすぐ横に洗面台がある。

手に持っていた荷物を机の上に置き、音楽プレイヤーを充電器に接続した後即座にベッドへダイブする。

お風呂に入っていないことを思い出したがもう動きたくない。睡魔に抗う事なく眠りについた。

転入

4月7日

コンコンという軽いノックの後に声がした。

「岳羽ですけど、起きてますかー？」

しかし昨日は疲れて夜遅くに寝た俺はまだ惰眠を貪りたい。
布団の中で寝返りをうつ。

「お願い、出てくれないと困るのー。」

…今日は寝かせて欲しいのに。

仕方ない。緩慢な動きでドアを開けた。

「おはよう。眠れた？」

何で朝から元気なんですか岳羽さん。

「あのね、先輩に案内しろって頼まれちゃって。もう出られる？」

「別に案内しなくていい。」

そんなに俺に関わるな。

放っておいてくれ。眠いから。

「あ、断るかな、ふつう…。」

俺は断る。本気で眠い。

「てか、お互い、初日から遅刻って訳にもいかないでしょ？はい、支度、支度！」

「…少し待って。」

ドアを閉めてため息をつく。どうしても行かなければならぬらしい。

仕方なく顔を洗い、制服に着替える。うん、少しだけ頭が起きたな。

…制服は多分、これでいいはず。

初日だからあまり道具はいらないだろう。鞆に筆記具とメモ帳、財布と携帯を入れ、左手に黒の手袋をつける。

ラウンジに降りると岳羽さんが待っていた。

「ほら、早く行くよ！」

岳羽さんはまだ眠い俺の右手を掴むと小走りで寮を出た。

新都市交通“はねはづる”車内

「通学には、これ使うの、モノレール。珍しいでしょ？」

まさかモノレールで通学することになるとは思わなかった。

窓から見える景色は海の青と等間隔に配置された鉄柱のみの単調なものでこれがちょうどいい眠気を誘う。

悪いとは思ったが、岳羽さんの話は半分以上俺の上を通過していった。

モノレールを降りると同じ制服を着た人を多く見かけるようになった。

歩いて数分で学校が見えてくる。

「おはよー！」

女学生の挨拶に岳羽さんが元気に挨拶を返す。

周りの、特に男子の視線がきつい。理由はだいたい予想出来るが、俺はそういう目で見られる謂れはないぞ。

やがて校門にたどり着いた。

「さ、着いたよ。ここが月光館学園の高等部。よろしくね。」

昨日とは打って変わって太陽のような笑顔だ。

眠い俺にはどうでもいいが。

学校は白が基調の建物だ。高さは3階程だろうか。建てられてあまり年月がたってないのかとても綺麗だ。

昇降口につき、靴を適当に空いている場所に入れる。

「此処からは一人で大丈夫だよね。」

…多分。

「職員室はこの先を左に入ってすぐだから。詳しいことはそこでね。」

…以上、ナビでした。何か、分からない事とかある？」

「別がない。」

詳しいことは先生に聞くからな。

「ってかずっと気になってたんだけど、その手袋何？」

「気にしないで。」

説明出来ないから。

岳羽さんは疑いの眼差しをこっちに向けていたが、気にしないことにしたらしい。

…そろそろ職員室に行こうかな。

「あのさ…」

…何で岳羽さんって後から一言ついてくるんだよ。

「昨日の夜、その…色々見たでしょ？あれ、他の人には言わないでね。」

俺ってそんなにべらべら喋る人間に見えるのか…。言ったってどうせ馬鹿にされて終わるのに。

「…じゃあね。」

岳羽さんはそのまま掲示板の人込みの中に入っていった。俺には無理だな。人込みは苦手だ。

職員室

入るとすぐ近くにいた女性教師が俺に気付く。

「おっと、転入生君よね。」

はーい、転入生君ですよ。

「…“有里湊”。2年生で間違いないわよね…」
間違いないです。

女性教師が手元の資料をめくっているのが見える。

何となく嫌な予感。

「ふうん…結構、転々としてきてんのねえ…」

…うん？

「えー、ご両親は、10年前の…あッ…ああ、ごめん…バタバタしてて、詳しく読んでなくってさ。」

だからといって人の過去をほいほいと話さないで下さい。

「ええと、私は国語科主任の鳥海です。よろしくね。」

「…どうも。」

「クラス分けもう見た？君は私の担当する“F組”よ。」
まじですか。

担任がこうだとこれからが不安だ…。

「でもこの後すぐ始業式だから、先に講堂ね。案内するわ、ついてきて。」

講堂はまるでホールのようだった。客席のように椅子が並び、ステージも本格的だ。流石桐条グループといったところだろうか。

舞台上ではふくよかな体型の校長が長話をしている。

絶好のおやすみタイムだ。

「ねえ、ねえって。」

誰だ俺の安眠を妨害するやつは。永眠させるぞ。

…声のした方を向くと、後ろの席の男子生徒だった。多分あの視線のうちの一人だろうな。

「あのさ、今朝岳羽さんと一緒に登校してたのって、君だよね？」

そうですが。

「見てたぜ。仲良さげだったじゃん？」

ビンゴか。見ていたなら聞くな。後仲良くなってない。

「君ってさ、岳羽さんとどーゆー知り合い？つーか岳羽さんって彼氏いの？その辺誰も知らなくてさ。」

…転校初日のやつに聞くな！

「知らん。」

つかどうでもいい。寝させる。

「そっか。いや、一緒に学校に来たって言うから、知ってっかなと思ってるさ。」

会ってすぐに聞く内容ではないだろ。

「…ってか君はどういう関係なワケ？」

しつこいっ！

他人の事にずかずかと踏み込んでくんない！

…いつその事、障ってやろうか。

「おやあ？なんか話し声がしましたねえ？鳥海先生のクラスの辺りですかあ？」

後ろのやつがさっと身を引いた。流石先生。

でも語尾延ばすな。

「…ったく、静かにしてよ！怒られんの私なんだから！！」

…なんとという自己中…。

校長の話はその後20分程続き、ぐっすり寝る事ができた。話長くてありがとっ。

放課後

なんとも適当なホームルームが終わった。

本当にあれでいいのか担任…。

席は右から3列目、前から2番目の先生のよく見える席だ。これは

寝づらい席だな…。

なにはともあれ睡眠はとれた。後は寮に帰って部屋を…

「よう、転校生！」

考え事に没頭していたら隣の席の男子が話しかけて来た。野球少年のかぶりそうな帽子と顎に少し生えている髭が印象的な、人の良さそうな人だ。

「なあんだよ、そんなマジビックリした顔すんなって！」
「じゃあもう少し相手の事情とか考えてから話し掛ける。」

「…何か用？」

邪魔されたせいもあって対応も冷たいものになる。

「おいおい、自己紹介くらいさしてくれよ。」

少しシヨックだったらしい。よく顔に出るな。

「オレは伊織順平。ジュンペーでいいぜ。実はオレも、中2ん時、転校でここ来てさ。転校生って、色々と1人じゃ分かんねえじゃん？オレが最初に声かけなきゃってな。へへッ、イイ奴だろ？」
確かに最後のが無ければイイ奴だろうな。

岳羽さんがこっちに来る。

「お、ゆかりツチじゃん！またおんなじクラスになれちゃうとは、思わなかったぜ。」

前のクラスでも一緒だったからか、仲がよさ気に見えないこともない。いい。

「まったく、相変わらずだね…。誰彼かまわず、馴れ馴れしくしてさ。ちよつとは、相手のメーワクとか、考えた方がいいよ？」

岳羽さんは呆れ顔だ。

「な、なんだよ。ただ親切にしてるだけだつて。」

だからそれは言ったら駄目だろ。

「ふうん、なら、いいんだけど。」

いいのか…。

…岳羽さん、順平を見ていた時とこっちを見たときの表情が違う気がする。

「なんか…偶然だよな。同じクラスになるなんてさ…。」

「ただの偶然だ。」

これって運命？みたいに言うな。

「それはそうだけど…でも、驚いたよ…。」

「おいおい、オレだって同じクラスだぜ？なんか扱い違わねーか！

「？」

「そうだな。」

「ってか実際聞きたいことあんだけどさ。お二人さん、仲良く一緒に登校したんだって？」

「あー…まだそのネタやってたんだ。鬱陶しい。」

「順平の目がきらきらしている。」

「詳しく聞かしてくれよー。」

「ある意味勇者。…やっぱりただの馬鹿。」

「え、ちよつと、やめてよ！」

「強く否定するんだな…。」

「逆に怪しくなるぞ。」

「彼とはたまたま寮が一緒ってだけ。何でもそういう話に結び付けすぎだつての。」

「ごもつとも。」

「てかそもそもウワサになるの早すぎ…不安だな…そういうの。」

「岳羽さんが少し顔を近付けて小声になる。」

「…ちよつといい？あの事とか…言っていないよね？」

「…あの事？」

「つてどの事？」

「ちよつと！昨日の今日でしょ？」

「ああ、朝に言っていた…。というか岳羽さん声がでかい…。隣の髭が聞き耳をたてるぞ。」

「昨日の夜の事…ホント言わないでよ…？」

「……………」

「髭が…じゃない順平がこつちを驚いたような顔で見てくる。これは聞こえたな。岳羽さんが順平の様子に気付く。」

「な、なに？」

「き、昨日の夜って…え？」

「完全に勘違いした。いや、男としては健全なのか？」

「ちよつ…なんか誤解してない？」

おいおい…。自分で撒いた種に肥料をやるなよ。
誤解とか言ったら余計に食いつくぞ。

「とにかく！彼とは昨日会ったばかりでホント何でもないの。」
これできつと噂に尾鱈がついて変な話になっていくんだろな。

「まったくもう…。じゃあ私、弓道部の用事あるから行くけど、変な
ウワサ広めないでよ…。？」

岳羽さんは自分の荷物を持つと順平を睨みつつ教室を後にした。半分くらい自業自得のような気がする。
つか俺完全に巻き込まれてる…。

「別にウワサなんてどってことないじゃん。なあ？」
いや、噂を嘗めるなよ。

お前噂されたこと無いんじゃないか？

「ちょい、自意識過剰っぽいよな…」

…そうなのか？

すぐにこつちを見る順平の目が輝く。

「でも、スゲーじゃん転校生！初日から浮いたウワサなんてよ！あいつ、アレでケッコー人気あんだぜ？一目置いちゃったよ、実際！俺にとってはどうでもいいの一言に尽きるが、現代の学生というのはこんな感じなのかね？」

…やばい、オッサン化してる気がする。

「ま、そんな訳だから、これからよろしくな！」

どんな訳か理解は出来なかったが、取り合えず頷いておく。

その後、順平に誘われて一緒に帰ることにした。

「おーおー。走ってんなー、運動部…あ、オマエどつか部活入りする？新規入部ってことになるから、まだもうちつと後だけどな入れるの。」

まず何の部活があるのかも知らないのに入るか否か決める事は出来ないだろ。

そんな事を考えつつ順平とたわいない話をしながら帰った。

寮に着き、すぐに自室に入る。
荷物を置いて着替えると、すぐにダンボールから荷物を出して整理した。

もとが少ないこともあり、さほど時間は掛からない。

一段落し、休憩しようとベッドに座る。何気なく上を向いて、気付いてしまった。

…監視カメラ。

巧妙に隠してあったが、一発で見付けてしまった。

この寮は個室なのにプライベートは無いらしい。

…夜に外出させないためかもしれない。

と考えてみたものの、言い訳にしては苦しすぎる。

やはり監視カメラを使う意図は監視以外にありえない。

…でも仕方ないかもしれない。過去に色々問題起こしたからな。

ここは大人しく監視されようじゃないか。

寮 ラウンジ

短い銀髪の赤ベストを着た青年が、ソファで寛いでいる美鶴に話しかける。

「ちよつとでてくる。」

「ん？」

美鶴は見ていた本から視線をあげる。

「気付いてるか？…このところの新聞記事。」

新聞には毎日多くのニュースが載っているが、美鶴にはどのニュースについて聞いているのかすぐに分かった。

「…ああ。それまで普通だった者が、ある日を境に、急に口も聞けない程の無気力症に陥る…最近、流行りらしいな。記事ではストレス性ということ片付けられているが…。」

青年の瞳に好戦的な光が宿る。

「そんな訳あるか。絶対“ヤツら”の仕業だ。…でなきや、面白くない。」

「相変わらずだな。…一人で大丈夫か？」

「なに、心配ない。トレーニングのついでだ。」

銀髪の青年は悠々とドアを開けて出て行った。

残された美鶴は一つ溜息をつく。

「まったく、明彦のやつ…遊びじゃないんだぞ…。」

その咳きは、言われた本人には届かなかった。

初会（前書き）

全体的に（特にゆかりに）冷たく失礼な主人公ですね。
いつかなんとかなると思います。

初会

今日はさすがに岳羽さんと一緒に登校しなかった。

岳羽さんは弓道部の朝練があるとかで早くに寮を出ていったらしいが、俺までそれに合わせる必要もない。

少しでも睡眠補給しておくほうが遥かに大事に思える。

まあ、要する眠いだけだ。

今日から普通の授業だ。

授業は随分と個性的なものばかりで驚いた。新鮮で楽しいが。

午後の授業も担任の現代文だが、葛西善蔵より窪田空穂が好きだからで教科書を無視しようとする。

…教科書いらないだろこれ。

そして寝ていたら隣の順平に矛先がいく。

「おい、おいつて！先生、誰が好きって？」

まともに答えるのも何となく嫌だ。寝てたやつがさも聞いていました、と言わんばかりに正解するとムカつく。順平が必ずそうするとは思ってないが、正解なんて教えない。

「吉村冬彦。」

ドンマイ順平。潔く散ってこい。

順平は俺が言ったとおりに答える。

「違うわよ！どうして先生の話、聞いてくれないの！？先生、泣いちゃうじゃないの！もっと先生を見てよ！」

…あれ、順平って小学生だったっけ…？

順平はうるたえながらも素直に謝っていた。

「うらむぜ湊…！」

自業自得だバカヤロウ。
後、下の名前で呼ぶな。

学校が終わり、寮に帰ってくると、ラウンジに岳羽さんと見知らぬ男性が話している。

茶色の髪は後ろに流してある、眼鏡の男性だ。4、50代位だろうか。

生え際は後退中だと予測する。

「あ、帰ってきました。」

「なるほど…彼か。」

あ？俺がどうかしたか？

まだこの学校では問題は起こしていないはずだが…。

男性はこつちに歩いてきた。

「やあ、こんばんは。」

会釈で返す。この男の笑顔が嫌だ。

「私は、幾月修司。君らの学園の理事長をしている者だ。」

また偉いのが出てきたな。一体何の用だか。

「イ・ク・ツ・キ。…言いにくいだろう？おかげで自己紹介はいつも

苦手だよ。油断すると、噛みかねん…。」

いっそ噛めよ。

理事長が申し訳なさそうな顔をする。

「部屋割が間に合わなくて申し訳なかったね。正式な割り当てが決

まるまでまだ少しかかりそうだ。」

嘘つけ。監視カメラまでつけておきながら間に合わないも何もない

だろう。

オッサンの声は胡散臭いんだよ。

「さてと、何か聞いておきたい事はあるかい？」

そればかり聞かれている気がするな。

じゃあ、遠慮なく。

「なぜ寮へ？」

「なぜって…君を迎えるためさ。ダメかい？」

迎えるため…ねえ。理事長といえは校長より偉いだろうに、わざわざ、俺一人の為に。暇だねえ。

「…あ、岳羽君。そういえば桐条君は？」

強引に話変えやがった。

「はい、もう上に。」

「いつもながらマジメだねえ。顔くらい出せばいいのに。他に質問はあるかい？」

これ以上は話さないつもりか。…まあ、いいか。

「他の住人は？」

「この寮の住人は、君を含めて4人だ。少ないこつて。」

「ここに居る岳羽君と、それから桐条君。あと、3年生の男子で真田明彦君という生徒が居る。」

あ、男子いたんだ。

「ひとつ、仲良くね。他に質問はあるかい？」

「別にない。」

「よろしい。じゃ、よい学園生活を。私はそろそろ失礼するよ。転入したては色々と疲れるだろ？早めに休むといいよ。」

言われなくても。

「身体なんて、ぐーぐー寝てナンボだからね。昔、マンガにあったろう？“ぐーぐーナンボ”？なんちゃって。」

あー、ジェネレーションギャップとか言うやつ？

そんな漫画は知らん。

「……ごめんね。」

なぜか岳羽さんに謝られた。よく分からない。ともかく言われた通り今日は休む事にしよう。

部屋に戻って寝ることにした。

寮 4階 作戦室

普通の寮では絶対にならない巨大なモニターと操作板がある。真ん中にはソファアールがあり、モニターを挟んで両側には書棚がおいてあった。操作板前の椅子には美鶴とゆかりが座っている。

そこへ理事長が入って来た。

「お疲れさま。どうだい、“彼”の様子は？」

その問いに美鶴が答える。

「早くに就寝したのですが、先程から起き出し、今は洗面台の方にいるようです。」

画面上に人が写る。頭にタオルを被ってはいるが、間違いなく有里湊だ。

「理事長、やはり彼は……。」

「まあ、とりあえず見守ろうじゃないか。」

画面内の湊は怠そうな動きで鞆に手を伸ばす。

「……もうすぐ、“影時間”だ。」

辰巳ポートアイランド 裏路地

一人の男性がラジオを聞いていた。

「ハア……つまんね……。」

男がラジオを放り投げる。地面に当たって硬質だが軽い音がした。

『0時です。』

ラジオが0時を告げた途端、ラジオが止まり、世界が緑に染まる。

悪寒の走るような異様な空気へと変わった。

「……ん？」

男も異変に気付く。

「……なに……え……？」

周囲に黒い何かが纏わり付く。

「か……らだ……が……」

男の身体の至るところから黒いタールのような液体が溢れ出る。
「…あ…あ…あああああ…うわぁー！ーッ！！」
男の身体が粘着室な音をたてて地面に崩れ落ちた。

寮 4階 作戦室

緑の空間のなか、理事長がぼつり、と咳く。

「フム…平然としたままか。」

湊は鞆をこそごそと漁っている。だが、度々手が止まり、船をこいでいるようだ。

「毎晩0時になるたび訪れるこの“影時間”は、言わば隠された時間だ。普通の人間は棺のような姿に“象徴化”してこの時間があることすら感じない。」

「じゃあ、彼は…。」

ゆかりが言おうとしていることに理事長は肯定する。

「見てのとおり、彼に“象徴化”は起きてない。気付いてないようだけど、彼は今、ちゃんと影時間を体験してる。後は適性があるかどうかだ。」

眠気に負けたらしい湊は遂にベッドに横に倒れる。

「というか、あるんだろうね…。無ければ今頃、ヤツらの餌食になってる。」

「餌食…ですか。」

ゆかりが想像したのか、少し不快そうな顔をした。

「とにかく、もう後何日かは、こうして様子を見てみないと。」

「はい。」

美鶴は画面を見つめる。

「隠れてこんな事して、ちょっと気が引けますけどね…。」
その横でゆかりは少し目を伏せた。

???

「……さま……」

誰かの声がした気がした。

「有里湊さま……」

自分の名を呼ぶこの声に聞き覚えはない。

黒と白の交互に並んだ床の上を低空飛行している感覚。

やがて前方に青い扉が見えた。吸い込まれるように扉の中へ入る。

光が、満ちた。

周りが見えるようになる、どこかの部屋にいた。

何かのどつきりか？

色は基本青で統一されている。複数の扉が立ち並び、数枚の扉には青い布が掛けられている。前方の壁は外が見え、部屋が上にあがっているのが分かる。エレベーターみたいだ。俺の前には白く円いテーブルが置いてあり、さらにその奥には青いソファがあった。

ソファーにはぎよろりとした目をした鼻の長い老人が腰掛けていた。横には青い服を来た銀髪のポプカットの女性が重そうな本を片手に控えている。

老人が口を開いた。

「ようこそ、“ベルベツトルーム”へ。」

ベルベツトルームがこの部屋の名前か。硝子の部屋…？

「私の名はイゴール。…お初にお目にかかります。こちらはエリザベス。同じくこの住人だ。」

エリザベスは恭しく礼をする。

「エリザベスでございます。お見知り置きを。」

よし、ベスと呼ぼう。

「ここは夢と現実、精神と物質の狭間にある場所…。」

だからどこだよ。

「ここは、何かの形で契約を果たされた方のみが訪れる部屋…。」
契約…？

イゴールの前に寮の玄関で署名したカードが置かれている…。

ああ、書いたなそれ。

そういえば契約って言ったな。あの子供はあれ以来会ってないがどうかしたのか？

「今から貴方は、このベルベットルームのお客人だ。貴方は力を磨くべき運命にあり、必ずや、私の手助けが必要となるでしょう。」
力？こんなながつぱなの手助けを借りないといけないのか…。

「貴方が支払うべき代価は1つ…。契約に従い、ご自身の選択に相応の責任を持って頂く事です。」

まあ、そんな訳の分からないことより…。

「…これは夢？」
のほろが気になる。

「左様：現実の貴方は、今は眠りの中にいらつしゃる。いわば貴方は今、夢としてここを訪れているに過ぎません。しかし、いずれはご自身の脚でいらつしゃる機会もあるでしょう。」
どうやって夢の中に行くんだよ。現実にこの部屋があるのか？

「これをお持ちなさい。」

手の中に複雑な装飾の施された青い鍵があった。
どこに使うんだよ。

「また、お会いしましょう。」

イゴールの言っている言葉の数々を理解する前に意識は遠退いていった。

初会（後書き）

主人公ステータスは天才・カリスマ・漢ですか駄洒落は理解しませ
ん。

覚醒

放課後、順平に誘われた。別に断る理由もなかったため、一緒に帰る。

順平に連れられてポロニアンモールを歩く。

「ガツコのヤツらと、ちょーっとどっか行くべーってなるとココだな。」

案内するつもりらしい。

知らない土地と化しているからありがたくはある…かな。

ポロニアンモールは中央に噴水があり、それを囲むようにして店が並んでいた。

確かに放課後の時間潰しには持ってこいな場所だな。

「カラオケとか、ゲーセンとか、あとCD見たりとか。あとアレよクラブ。」

…うれしそうだな。

「…ええ、行ったことありませんけどねー。」

どうせ行っても警察に連絡がいつて補導されるのがオチだろうが。

放課後というだけあって、多くの学生がいた。

ある程度お店を見た後、帰途についた。

寮に帰ると桐条先輩と岳羽さんがラウンジにいた。

「君か、おかえり。今日は満月だな。」

言われて気がついた。

満月だからといって、特に何かがあるわけではないので気にしたこともなかった。

そういえば俺は空を見ないな。

特にすることもないので自室に籠る。

籠っても何もすることはないが。

疲れもあるので早々に寝ることにした。

影時間 作戦室

昨日と変わらないメンバーが画面を見ていた。

「どうだい、様子は？」

理事長の問いに美鶴が答える。

「今日は柔軟をしているようです。」

画面内にはベッドの上でブリッジをしている湊が写っていた。

「フムフム…やはり興味深いね、彼は。たとえ影時間の適性があっても、初めはもっと不安定になるものだ。記憶が消えたり、混乱したりね。今までの誰とも違う。実に例外的なケースだよ。」

「でもなんか…これじゃモルモットみたい。」

ゆかりが率直な意見を言った。

「そう言ってくれるな。彼はクラスメイトだそうじゃないか。同年の仲間が出来れば、君も心強いだろ？…我々には、どうしても力が必要なんだよ。」

「それは、分かってますけど…。」

ゆかりは納得いかない、という顔をしていた。

その時、ポーンという外からの緊急呼び出し音が鳴り響いた。美鶴が応対する。

「こちら、作戦室だ。…明彦か？どうした？」

通信機から音声が発される。声の主は真田明彦だ。

『凄いヤツを見つけたっ！これまで、見た事もないヤツだ！！ただ、あいにく追われててな…。もうすぐそっちに着くから、一応、知ら

せておく。』

「それ…ヤツらが、ここに來るって事ですか!？」

ゆかりが慌てたように言う。

対照的に美鶴は冷静に判断する。

「理事長! 今日の日監視は、ひとまず、ここまでに。我々は応戦の準備をします!！」

「…た、頼んだぞ!！」

準備を終えた3人は真田を迎えるべく玄関まで駆け降りて行った

自室

どうしてもこの時間になると目が覚めてしまう。

昨日の例外を除いてだいたいはこの時間が過ぎ去るまで待たなければ寝ることができない。

今日とて例外ではない。

目が覚めたところで何もすることは無い。

出来ることはアナログな事が自分の身体を動かすくらいだ。かと言って勉強する気にはならないし、暗過ぎて出来ない。

確実に目が悪くなる。

やることもないので柔軟でもしてみる。

気分でブリッジまでする。

少し動きが固くなっているな。

どうせ何もすることが出来ないので、寮内でも散歩しようか。

寮から出なければいいだろう。

静かに移動すれば誰にも気付かれない筈だ。

見つかったら知らん。

ゆっくりとドアを開く。

誰もいないと思った時、上から人が駆け降りて来る音がした。

え、早速見つかるのか?

あ、監視カメラか…。

それも複数のものだ。
そして桐条先輩、岳羽さん、理事長の順に階段を降りて行った。
俺は無視ですかそうですか……何かあったな。
階段を走るなど危険だ。下手に転ぶと勢いがついていただけに酷い
怪我を負い兼ねない。
そこまでして走る理由が下にあるのか。
興味が湧いた俺は足音を殺して後を追った。

玄関に一人の青年が走り込む。真田明彦だ。

「クツ……」

玄関の扉を閉じた途端、左胸を押さえうずくまる。
そこへ3人が走り込んだ。

「明彦ッ！」

「大丈夫だ。それより凄いのが来るぞ。見たら、きつと驚く。」
楽しそうに言う明彦を美鶴が一喝する。

「面白がってる場合か！」

「真田君、ヤツらなのか!？」

「はい、ただ普通のヤツでは……。」
突然ズドン、と大きな揺れが寮を襲った。

「キヤッ!!!」

ゆかりが悲鳴をあげる。

「何この揺れ……冗談でしょ!？」

冗談では片付かない状況にゆかりが慌てる。

美鶴は素早く指示をとばした。

「理事長は、作戦室へ!岳羽、君は2階にいる彼を起こして裏から
逃がすんだ!」

「俺ならここにいますよ。」

背後からした湊の声に全員が反応して後ろを向く。
1メートルほど後ろに湊がいた。

もちろん全て聞いていた。

「で、俺は彼女と逃げればいいんですか？先輩方は？ヤツとかいうのが来るんでしょう？」

その声は全く動揺がなく、異常なほどにしつかりとして落ち着いたものだった。

しかし、その違和感に気付くことのできる余裕等誰にもなかった。

「…ここで何としても食い止める。明彦、連れて来たのはお前だ。責任は取って貰うぞ。」

「ヤツらの方が勝手について来たんだ！まったく」

美鶴と明彦は寮の扉を開けて外へ出る。

「…何してる！早く行け、岳羽！」

「わ、分かりましたっ！」

岳羽の返事を聞いた明彦は扉を閉じる。

理事長は階段を上へ上っていった。

岳羽さんと二人になった後、マイペースに欠伸をする。眠れないからといって眠くないわけではない。

「はい。念のため…コレ、持ってた。」

岳羽さんから渡されたのは小型の剣だ。

剣は…まあ、使えない事もないけど。この寮には物騒な物が多いな。

「…じゃ、一気に行くよ！」

とは言っても、裏口はすぐそこだけどさ。

ラウンジの中を走り抜けて裏口へ続く扉の前まで来た。

「よし、ここまで来れば…。」

油断大敵ですよ岳羽さん。

簡単な呼び出し音の後、岳羽さんが何かに対応する。

相手は桐条先輩かな。

「ハッハイッ！、聞こえますっ！」

俺には聞こえません。音量をあげて下さい。

「マジですか!？」
先輩方は何かやらかしたのか?
いきなり扉が鳴る。
相当強い力で叩かれた感じだ。この扉意外と頑丈だな。
「うわっ!？ひ、ひとまず、退却!？」
岳羽さんが階段を駆け上がる。
後ろをついていった。

2階の踊り場に着いたとき、ガラスを割るような音がした。
… 何かが侵入した?
「なに、今の!？」
そして何かが這って来るような音がする。
不気味だ。
「な、なんか来る!？」
心なしか、寮も揺れている気がする。
さっきの揺れはこいつが原因か。
「う、上よ!上に急いでっ!！」
走るゆかりの後を追う。
あいつ、俺について来ているとかないよな…。自意識過剰か。

屋上

岳羽さんがドアに鍵をかける。
「フウ…」
果たして逃げ切ったのか、逃げ場を失ったのか。
「鍵も掛けたし、ひとまずは、大丈夫かな…。」
だいたいな。
「…!？」
何かが吠えるような音が前方からした。

前を見る。

何も無い屋上。

下からにゅつと黒い手が生え、屋上の床を掴む。ぐちゃ、という不快な音が響く。

まるで黒いスライムが付着したようだ。

次に生えて来た手には、一枚の仮面が握られていた。水色のその仮面は無表情で、額には？と描いてある。

左右を見渡すように仮面を振り、やがて正面で固定される。

…目があった…？

目と言っても空洞なんだが。

ざつと何本もの手が生え、それらが床を掴むと、何本もの剣を持った手が、金属を擦るような音と共に現れる。

つて卑怯過ぎるだろこれ！剣1本で捌けるかあっ！！

相手は幾つもの関節をもった腕を数本、複雑に絡めたような外見をしていた。人の身長を裕に越す高さを持っている。3メートル近くあるのではないだろうか。

なかなか気持ち悪い。

右手が微かに疼いた気がした。

相手は多くの手を上手く使い、近付いて来る。

「嘘ッ…！？外を上つて来たの…！？」

逃げ場がない方でした。

舌を出して言っても状況は変わらないけどな。

さて、先程の鍵を開けて建物内に退避するのと相手が襲って来るのはどっちが早いかね？

作戦室

「いた！屋上だ！！」

寮の前にいたヤツらを倒した美鶴と明彦は別のヤツを探していた。

寮内は複数の監視カメラがあり、それは全て作戦室のモニターに繋

がっている。その映像を元に敵を探していたのだ。
ヤツを見た美鶴は驚く。

「…なんだ、あの巨大なシャドウは!?!」
今までに遭ったこともない大きさだ。屋上にはゆかりと湊もいる。
彼らでは対応出来ない事は目に見えていた。

「…美鶴、行くぞ!?!」

2人が駆け出そうとした時、

「待て!」

理事長の声が響いた。

屋上

「あれがここを襲って来た敵…“シャドウ”よ!」
解説している場合じゃないです岳羽さん。

「そ…そうだ、戦わなきゃ…。」

え、今思い出した、みたいに何言ってるんだこいつ。

それも戦うって…勝てる相手に見えないでしょうが。

…先輩…は来ないだろうな…。

信じるだけ無駄だ。

でも、戦うのは無謀過ぎる。

こいつにあれが効くとは限らないし…。

「“召喚”…私だって、できるんだから…。」

召喚って、何呼ぶんだよ。

岳羽さんは足に付けていたホルスターから銃を抜き、銃口を額にあてる。

自殺…じゃないよな。自分で戦うって言ったし。

召喚に必要な儀式…?

岳羽さんは深呼吸を繰り返す。

おいおい、敵がそれを攻撃してくる構えだと認識したらこっちに攻撃してくるぞ。

早くしないといい的だ。
敵が赤色の光を帯びる。

《マハラギ》

辺りに炎が撒き散らされた。

「キャツ！」

辺りに撒き散らされた炎は岳羽さんと俺を包む。

俺まで巻き添えかよっ！

岳羽さんが銃を落とした音がしたがそんなものに構っている余裕なんてない。

俺も熱い！！

服に点いた火を屋上を転がって消す。

やっと火を消して前を見るとシャドウが眼前にいた。

咄嗟に殴り付ける。

拳は仮面を捉えた。拳痛え！仮面固すぎだ！！

シャドウは警戒したのか、さつと後ろに下がる。

あまりダメージは入ってないが、相手との距離は取れた。

右手に触れた物をしっかりと握りしめ、ゆっくりと立ち上がる。

肌が少しひりひりして痛い。

歯を食いしばって堪える。

今動かないと死ぬかもしれない。

俺は、こんなところで死にたくない。

右手に持っていた物は岳羽さんが額にあてていた銃だった。

こんなところで死ぬくらいなら…

僅かな可能性にだって賭けてやる。

銃口をこめかみにあてる。

助かる為に自殺紛いの事をするとは何という皮肉か。
瞬時に意識を集中する。息を吸って腹に力を込める。

シャドウが剣を振りかざして向かってくるのが見えた。

いける。

大胆不敵に嗤う。

「ペ……ル……ソ……ナ……。」

自然に口が動いて何かをつぶやいた。

同時に引き金を引く。

硝子の碎けるような音と共に何かが自分の中から引きずり出され、

ソレは俺の背後に現れる。

金属質の軀は水色で赤の布を首に巻き、関節は完全に金属を思わせる。

手足は布地を張ってあるが、中は金属だろう。

『我は汝。汝は我……』

そのペルソナ、オルフェウスが背後に持っていた豎琴をシャドウに向かつて振り下ろす。

豎琴はシャドウの振りかざした剣を捉え、そのままシャドウを吹き飛ばす。

体中を高揚感が駆け抜ける。

そのまま追い打ちをかける。

更に豎琴で追撃しようとしたオルフェウスに、異変が起こる。

俺は頭が割れるほどの頭痛に襲われた。

何かが強引に俺の中から出ていこうとしているのが分かる。

「ぐっあああああああ……！！！」

オルフェウスももがき苦しむ。バキツゴキツという嫌な音が響く。

オルフェウスの赤い布の内側から白い腕が生えた。2本目の腕も生える。

嫌な音を響かせながらオルフェウスを引き裂き、黒い何かが現れた。黒い何かは頭に獣を思わせる金属の仮面をつけ、背中には複数の鎖に繋がった棺を背負っている。腰には一振りの刀を挿していた。

黒い何かは腰の刀を抜き、シャドウに襲い掛かる。

圧倒的だった。刀で斬る、斬る、斬る。

グチャリ、ジュチャリと音を立てながら、あっという間にシャドウは細切れにされる。

ビチビチと蠢いていた一本の手が握り潰され、黒いのが空へむけて咆哮を上げた。

『ぐおおおおおおお』

一暴れして満足したのか、謎の力の暴走は終わり黒い何かはオルフェウスへと戻る。

割れるような頭痛も同時に引いていった。

精神的にも肉体的にもどっと疲れた。

「終わった…の？」

そういえば居たね岳羽さん。

グチャリ、ジュチャリと音が響く。

「…！？まだ動いてる…！」

巨大なシャドウだった残骸からその3分の1程の大きさのシャドウが現れる。お化けのように鋭い両手を前に垂らしている。そしてこいつらも、でかいのと同じ仮面を付けていた。

シャドウは岳羽さんを目指して這っていく。

「やっ…こ、来ないでッ…！」

来るなど言われて行かない敵はいないだろ！

…俺の方に行ったら殺られる事を理解しているんだろっとな。

でもそこで弱いヤツに標的を変えるのは、出てきて早々にやられる不良みたいだぞ。

恩なんざ更々売る気は無いが、目の前で死なれても後味が悪すぎる。

…どうせ岳羽さんは召喚出来ないだろうし。

岳羽さんの前に出る。

そういえば、とすっかり忘れていた腰の剣を抜く。…なんかしつくりこないが仕方がない。

一体目に剣を投げ付ける。剣で地面に縫い付けたところに隠し持っていた投擲用ナイフを投げ付ける。

その間にもう一体に向けてオルフェウスで突撃させる。

再度召喚したオルフェウスの突撃で敵は全滅した。

岳羽さんは無事らしい。

あー…もう無理疲れた…。

身体から力が抜ける。

自分の倒れたような音がしたが、痛みはなかった。

床が冷たくて気持ちいい…。

岳羽さんの叫ぶ声があったようだが多分気のせいだろう。

そして俺は意識を失った。

作戦室

「…!!」

「何だ、今のは…!？」

理事長の指示に従った美鶴と明彦は先程自分達が見た映像を信じられなかった。

「……。」

理事長がただ一人、微かに目を細めた。

カクセイ

10年前にムーンライトブリッジで事故にあつて以来、転々としながら生きて来た。

どんなに辛い事があつても何処かでお兄ちゃんが生きてるって思えば堪えられた。

そして遂に何処にも相手されなくなり、寮に入る事にした。

入寮する日は電車のトラブルがあつて、結局夜中に着いた。

通路に人はおらず、変なオブジェととっても大きな月が目立っていた。

着いた寮はどこか不気味で。

寮に入つてすぐ左にあるカウンターの上一枚のカードが置いてあった。

“我、自ら選び取りし、いかなる結末も受け入れん”

たった一文の文章と、署名欄のみの書かれたそれは、不思議な感覚がするものだった。

確かにあるのだが存在しない。

矛盾しているモノが、そこにあつた。

自然に手が動き、名を記す。それがさも当然であるかのように。

名前を書き終わると音も無くスウ…と消えた。

疑問に思いつつもその後のごたごたで忘れてしまった。どうもうまく連絡がまわっていなかったらしい。

だからって銃を突き付ける事ないでしょうに。

昨日はベルベットルームに呼ばれた。

イゴールという目のギョロリとしたてっぺんハゲの鼻の長いおじさんが居て、よく分からない説明をしてきた。

行動には責任を持ってっ事らしい。後は部屋の説明？

青い鍵も貰った。…用途までは説明してくれなかつたけど。説明してよ！！

そんなこんなで今日に至り、入寮して3日もたったからって事で寮内の探索をしてる。

この寮の説明は受けたけど自分で見ていない場所が殆どだろう。やっぱり自分の目で確かめないとね！。

ずっと気になってたんだよね。

ラウンジの奥にあるドアの向こうとか、2階とか、4階とか…。という訳で、やっぱり下からでしょう！

右手をまっすぐに伸ばして進行方向に向け、左は上に伸ばして肘から曲げ、右と同じ方向に向ける。胸を張って体は少し反対方向に脚から捻り、膝を少し曲げてビシッとかつこつける。

いざ行かん、未知なるドアの先へ！！

…美鶴先輩、生暖かい目で見ないで下さい。

ラウンジ奥にあるカウンター奥の扉、壁に張り付いて警戒しながらゆっくりと近づく。手には美鶴先輩にかりた銃を顔の側で銃口を上に向けて構える。

最初は断られたけど、理事長がいったてき。そう言う理事長ってどうなの？

別にいいけど。

ドアをバーンと開けて銃を突き付ける。

「手を挙げるー！！3回回ってワンと鳴けーい！！」

ドアの向こうに居たゆかりが驚いた後、呆れた顔をする。

「…何やってんの？」

ドアの向こうはキッチンで、ゆかりは夕食を温めていたらしい。

「探検ついでに突入ごっこ？」

「…ばかでしょ。」

馬鹿とは失礼な。何事も楽しまなきゃね。

2階は男子部屋だからとゆかりに止められ、仕方なく4階に行く…前にちよつとご飯。

腹が減っては戦は出来ぬのよ！

今日のご飯は買っておいたコンビニ弁当。…あんまり好きじゃないんだよね。

外食したくても夜は外出禁止だし…。

この寮思った以上に不便だよ！

トイレはラウンジ位しかないし、お風呂は別の建物だし、立入禁止多いし。

開かずの扉とか、開けて下さいと言ってるようなものでしょ。

ご飯が終わったらひと休憩。

食べてすぐはゴロゴロしたいのだよ。

たまには休まないとな。

ひと休憩が終わったら遂にあの開かずの間を開けようではないかと、いうわけで行くぞ皆の衆！！…1人だけ。

…ゆかり冷めた目で見ないで。

こつそりと4階へ。大きな扉には鍵が掛けられている。

ってかここにもトイレあるじゃん！

ラウンジ行くより近いし…。何で誰も教えてくれないかなあ。
ちよつとトイレですつきりした後、いよいよ例の扉へ。
扉を調べる。

鍵は…掛かっているか。

しかし、この程度で諦めると思うなよ！

こんな扉のピッキング位楽勝だ。

解錠するとはほぼ同時に室内に飛び込む。

「手を挙げるーい！3回まわってわんころばー！！」

勢いで何言ってるのか分なくなった…。

美鶴先輩の視線が刺さる。痛いです。

「おや？どうしたんだい？」

後ろから理事長が現れた。

やばいよ挟みうちだよ勝てないよ！

「退散！」

ダッシュでその場を後にする。三十六計逃げるに如かず！

そのまま寮を飛び出した。

あてもなくただたださ迷う。

…調子に乗りすぎました。反省はしていません。

銃は持ったままだった。…手放す機会を失って、ただ持っているだけだ。

結局、規則を破ってしまった。

まあ、別に規則を破る事自体はなんでもないし、むしろ破るべきだ
と思うけど。

寮には普通に生活するためのものしか置いてないからどこに入っても
変わらないと思ってた。

でもあの部屋は違った。大型の機械があり、複数のモニターのひと
つに私の部屋が写っていた。

…つまり、監視。

それはそうだ。ここは桐条の所持する施設。しかも人数が少ない特別な寮だ。

何か無いほうがおかしい。

怪しい場所の方がこちらもありがたい。その方がきつとお兄ちゃんの情報が入り易いはず。

ふと顔を上げる。

いつの間にか緑に染まる世界の中、ムーンライトブリッジを中程まで歩いてきた。

頭の中のスイッチが切り替わる。

10年前、事故に遭った場所。

…お兄ちゃんが、いなくなった場所。

今でも思い出せる。赤い炎、緑の空、黒い影…兄の背中。

ミュージックプレイヤーを掴む。目をつむり、深呼吸をする。

大丈夫。お兄ちゃんは私が見つける。

「おい、こんなところで何をしている！」

声のした方を見ると、赤いベストを着た銀髪の青年がいた。

この時間内に動ける人間。桐条の関係者ね。

「君は…月高生か…。とにかく、今は危ない。絶対に俺から離れるな。安全な所まで送っていく。」

「…はあ。ありがとうございます。」

私は守られる側だと認識されたいらしい。

「行くぞ。」

赤ベストの後ろに黒い影が見えた。

心臓が一層強く脈打った。口から飛び出なかったのが不思議な位だ。青年も影に気付く。

青年が両手を顔の前に構え、ファイティングポーズをとる。そのまま影に突っ込み、右、左と殴る。

腰に吊してあったホルスターから銃を抜き、躊躇う事なく頭を撃ち抜いた。

「ポリデュークス！」

筋肉質の肉体と反比例するかのように小さな頭を持ったポリデュークスは目に見えない速さで敵を殴った。

影は堪えられずに消滅する。

「…ふう。じゃあ行くぞ。」

青年は銃をホルスターに戻してゆっくりと歩き出す。

彼の後を追って行った。

「しかし、こんな所にも適性者がいるとはな。名前は…」

青年にいきなり突き飛ばされた。

地面に転がる。

「ぐあっ！」

前を見ると、青年が私を影から庇うように立っていた。その場にうずくまる。

嫌な音がした。骨にひびくらは入っているんだろうな。

ゆっくりと立つ。

ああ、覚えている。この感覚。背筋を伝う悪寒。

実感する。還って来た。…地獄の監獄だ。

銃を持つ手に力を込める。

今持っている武器はこの召喚するための銃のみ。

今まで出来なかったのに、今の私にペルソナは呼び出せるのか？

ミュージックプレイヤーを握り締める手で胸を押さえる。

例え出来なくてもやらなければならない。

こめかみに痛みを伴う程強く銃口を突き付ける。

一瞬、何処かで同じようにこめかみに銃を突き付ける少年の後ろ姿が見えた気がした。

「…ペ…ル…ソ…ナ…」

躊躇う事なく引き金を引く。自分の中の何かが外に引きずり出される。

硝子の割れるような音とともに自分の背後に何かが顕れた。

長い髪、ピンク色の金属製の胴体、ハート型の豎琴。見た目の違いはあれど、れっきとしたオルフェウス。

オルフェウスは豎琴を掻き鳴らし、炎を生み出す。炎が影に直撃する。

すぐさま2度目の召喚。

振り下ろした豎琴は影を叩き潰した。

影が消滅する。

「…お前は一体…!？」

驚いた顔の青年が見える。

影は周りには見えない。

緊張が解けたのか、全身が重く感じた。手にしていた銃が落ちる。

…あ、やばい…。

意識が保てない。

青年が何か叫んでいる声がするが、言葉が理解できない。

まだ、倒れちゃいけない…。

思いとは無関係に意識が閉じていく。

最後に見たのは青年の必死な顔だった。

入院（前書き）

大型シャドウ戦での湊の火傷は先輩がディアで治しました。

入院

ベルベツトルーム

またこの部屋に来た。

多分また夢だろうな。

「再び、お目にかかりましたな。」

イゴールとベスカ。

2人は前回会ったときと同じ場所にいた。

「貴方は“力”を覚醒したショックで意識を失われたのです。」

つまりイゴールの言っていた力は召喚したあれの事だったのか。

「ほう…覚醒した力は“オルフェウス”ですか。なるほど、興味深い。」

うっさい長つばな。

勝手に確認すんな。

「それは“ペルソナ”という力…。もう一つの貴方自身なのです。」

「もう一つの自分？」

なんだそれ。自分は1つだろ。…ドツペルゲンガーみたいに言うな。

「ペルソナとは、貴方が貴方の外側の物事と向き合った時、表に出て来る“人格”…。様々な困難に立ち向かって行く為の、“仮面の鎧”と言ってもいいでしょう。」

「…えーっと。」

意味不明。人格を召喚？

「“ペルソナ能力”とは“心”を御する力…。“心”とは、“絆”によって満ちるものです。他者と関わり、絆を育み、貴方だけの“コミュニティ”を築かれるがよろしい。」

マジですか…。絆を紡ぐって事はつまり、誰かと仲良くなれってことか。…無理だろ。

「“コミュニティ”の力こそが“ペルソナ能力”を伸ばしてゆくのです。よくよく、覚えておかれますよう。」

1番苦手なものが必ず必要とかこれなんのいじめだよ…。

「おや、貴方はもうひとつ、別の能力もお持ちのようだ。」

流石。伊達に長い鼻をしていないな。嗅ぎ付けるのがうまいこつて。「そちらは残念ながら、我々でお手伝いできることはありませんまい。よくよく考えて使われますよう…。」

あつたらマジで殴るぞ。俺の苦勞を無に帰すな。

「さて…。」

話は終わるか。

「貴方のいらっしやる現実では、多少の時間が流れたようです。多少つてどのくらいが多少なんだよ。」

「これ以上のお引き止めは出来ませんまい。」

本当にどのくらいだよ。気になるぞ。

「今度お目にかかる時には、貴方は、自らここを訪れる事になるでしょう。では…その時まで。ごきげんよう。」

視界が暗くなり、意識が遠くなるのを感じた。

どうでもいいが、ベスは自己紹介以来喋ってないな。

少しずつ、意識がはつきりしてくる。

久しぶりによく寝た感じだ。

目覚めもすつきりしていても気持ちいい。

ここはどこかの病室のようだった。清潔感のある白に統一された部屋、消毒液の独特の匂いがした。

面会に来た人が座る椅子には岳羽さんがいた。

「…あ、気がついた…？き、気分は…どう？」

いや、そんなのより…。

「なぜ君がここに？」

岳羽さんが心底ホツとした顔になる。

「はああ…良かった…やっと起きたよ…。」

また無視…。もういいけどさ…。

ゆっくり起き上がる。

何か身体の調子がおかしい…。どれだけ寝ていたんだ？

「本気で心配したんだから…。」
「知らん。」

「体の方は心配無いつて。過労みたいなものらしいけど…。」

あー…疲れ、溜まってたもんな。

岳羽さんが真剣な顔になる。

何、なんか問題でも…。

左手首を右手で握る。

そういえば、手袋！

左手を確認すると、しっかりと手袋がされていた。途中で取れないようにか、テープで固定までしてある。

え、何事？

「ああ、それは絶対外すなって言われたから。…本当になんなの？
それ。」

岳羽さんの問いには応えない。これについて話す気は更々無い。

「まあ、いいけどさ。」

あ、諦めた。

「…あ、あのさ…。」

言いにくそうに話し掛けてくる。

さっきから何なんだよ…。

「ごめんね。あの時は、何にも出来なくて…。」

確かに何も出来なかったな。

「でも驚いた。…すごいね、あの力。」

…制御出来なかったものを褒められてもな。

使えなければ結局は宝の持ち腐れだ。

それとも初めては皆暴走するものなのか？

「えっと、あの時、俺に何が…。」

「…あの力はペルソナって呼ばれてる。」

岳羽さんも知っているのか。

イゴールに会った事でもあるのか？…いや、無さそうだ。

「それに、貴方が倒した怪物はシャドウ…私たちの戦っている敵よ。」

確かに影っぽい色だったな。

「大丈夫、後でちゃんと説明するから。ごめんね、隠してて…。」

そんな事は話せないだろ、普通。体験しない限りは誰も信じない。笑われて終わりだ。

「えっと、さ…。」

まだ真剣な話は続々らしい。

申し訳ないって顔はやめる。

「いきなりでナンだけどさ…。私もね…貴方と一緒になんだ。」

一緒…？

「どういう意味だ？」

「私のお父さん、小さい頃、事故で死んじゃっててさ…。お母さんとも、距離が空いてて…。…あなたも…独りなんですよ？」

ああ、そんな話か。

「実は私…貴方の身の上、色々、聞いちゃっててさ…。私だけ知ってるのも嫌だし、話さなきゃって、ずっと思ってた…。」

聞きたくない。

本気であの寮の中は俺のプライバシーを無視しているんだな。俺みたいなやつにはプライバシーは必要ないってか。…もうどうでもいいや。

「昔さ…この辺りで大きな爆発事故があったの。父さん死んだの、そのせいらしいけど、詳しい事情、分かってないんだ…。」

昔の爆発事故と聞いて嫌でも10年前の事故の光景が頭に浮かぶ。ヤメ口。

眼前に黒い化け物が見える。

「父さんが勤めてたの、桐条グループの研究所だったの。だから、ここに居れば父さんの事、何か分かるかもって、思ってた。学園に入ったのも、この前みたいな事やってるのも、そういうワケ。」

岳羽さんの声が少し遠い。

黒い化け物が手を伸ばして来る。

しかしその手が近づけば近づくほど、段々と意識が現実に戻ってくる。

「…もつとも、怖くてあのあり様だったけどね…。私も初めてだったんだ…敵と戦うの。ゴメンね…。私が頼りないせいで、こんな…。」

「…君のせいじゃない。」

「…うん。でも、ゴメンね…。…それに、起きた早々、こんな話…。」

「…そう思うならするな。」

せっかくすつきりした目覚めだったのに気分が重くなった。

「待ってる間、色々考えちゃってさ。今まで、色々隠してたし、まずは自分のこと、話さなきゃって…。」

「だからどんだけ寝ていたんだ。」

「でも、聞いてくれてありがとう。誰かに話したかったんだ、ずっと…じゃあ、そろそろ行くね。目を覚ましたって、知らせないといけないし。」

岳羽さんは席を立つ。

「…じゃね。」

岳羽さんは退室して行った。

…どれだけ寝ていたのか聞くタイミングを逃した。

左手首に付いているテープを剥がしていると、軽いノック音がした。

「どうぞ。」

声をかけるとドアが開く。そこには懐かしい顔があった。

灰銀色の髪に同じ色をした瞳をした少年、瀬田総司は少しホツとしたような表情を見せると、先程まで岳羽さんが座っていた椅子に座った。

「久しぶり。体は大丈夫？」

頷く。

「驚いたよ。過労で倒れた割にはなかなか起きないから。」

「…俺はどれくらい寝ていたんだ？」

「1週間だよ。」

「はい？1週間？多少が1週間って…学生には長すぎだ！体も固くなってるはずだよ。」

「そんなに寝ててよく寝疲れしないね。後これ、頼まれたやつ。」

総司は持っていた鞆から荷物を取り出した。荷物は茶色い布で包まれている。

「…湊兄さん、まだ悪さしてるのか？」

返事をせずに荷物を開ける。中には投擲用ナイフが5本と黒い手袋が1つ入っていた。

引越す前に叔父に頼んでいたものだ。

「程々にしときなよ？いつか自分に返ってくるんだから。」

因果応報ってか？

「…余計なお世話だ。お前も必要以上に関わらない方がいい。」

怪我するどころじゃ済まないからな。

「…だったら、緊急連絡先に俺の携帯書くなよ…。対応することこの身にもなれ。説明入れるのも面倒なんだぞ。」

この左手は総司が指示したのか。

総司が1番対応に馴れているからな…。

「後、頼み事を俺を通してするなよ。直接本人に言え。」

「嫌だ。」

叔父さんは総司を通した方がスムーズに事が進むんだよ。

「…もういいや。じゃ、俺は帰るよ。何かあったらメールして。」

総司が立ち上がる。

「じゃ、またね。」

軽く手を振って退室していった。

入院（後書き）

瀬田総司は分かると思いますが、ペルソナ4の主人公です。

一応、湊の親戚です。作中の叔父さんは総司の父親ではありません。今後もちよこちよこと出てくる予定です。

入部

朝から髭帽子に会った。確か………じゅんぺい、だったはず。…はず！

「おーす、久々じゃん。どした？ハラでも壊してたか？」

腹壊して1週間も休むとかありえないだろ。なんの病気だよ。

「つか、ちよつと聞いてくれよー。」

「…朝から元気だな。」

つか単純に五月蠅い。

「ビョーキじゃねっつもの！」

見たままを言っただけでなぜ怒られる…。

低血圧で眠い俺にはそのテンションは辛い。

「はっ…いかにいかに！オレはもう昨日までのオレとは違うんだ！」

あーつと…厨二病か。

「ごめんな、オレばっかり…。」

…謝られた！…駄目だ、ついていけない。

「まあ、オマエも元気だせよ。オレは友達だからさ、ウンウン。」

いつ友達になったよ？あと本気で鬱陶しい。

後ろから岳羽さんが来る。

「朝から元気だねー、ったく…向こうからでも聞こえたよ？」

「あれ？オフタリサン、同じ寮なのに別出勤？」

あ？なんでいちいち一緒に登校しないといけないんだ？面倒臭い。

「もー、そのネタうるさいっての。…有里君、体大丈夫？起きて急

につて感じて悪いんだけど…。」

嫌な予感。テスト…とか？

「今日ね、理事長からあなたに、話があるらしいの。」

なんだ、話か。しかし、理事長が俺ごときに話を…ねえ。

「放課後、寮の4階に来て欲しいんだ。忘れないでよ。」

忘れないで…ごめんなさい忘れません謹んで行かせて頂きます。

夜

4階には大きな扉とトイレがあった。そういえば4階のこの部屋には入ったことがないな。

扉を開く。ちよつと重いぞこれ。もう少し開けやすい扉にしようぜ。部屋にあるソファーには岳羽さんと桐条先輩、理事長と赤いベストの見たことあるような男子生徒がいた。

室内すごいな。でかいモニターとか…監視部屋？

「お、来たか。」

はいはい来ましたよ。

「体の方は、大丈夫そうで何よりだ。安心したよ。退院早々ここへ呼んだのは、他でもない。君に、話さなきゃいけない事があってね。まあ、かけて。」

空いている場所に座る。ふつかふかだな、これ。

「あ、そうそう。前に見たと思うけど、彼が、真田君だ。」

「よろしくな。」

この人が真田先輩だったのか。

「さて…いきなりでアレなんだけど…。実は、1日は24時間じゃない…なんて言ったら、君は信じるかい？」

唐突に変な質問だな。

「信じない。」

と、言っておこう。普通は信じねえよ。大体予測は出来るけどさ。

「フフ、まあそうだろうな。」

桐条先輩に笑われた…。

「しかし君は、もう実際にそれを体験しているんだ。」

ああ、俺が何も知らない前提で話が進んでいるのね。少し納得。

「初めてここに来た夜の事を覚えているか？」

忘れられるかよ。不審者扱いされかけたからな…。

「あの日…君は色々と思議な体験をした筈だ。消える街明かり…

止まってしまふ機械：道に立ち並ぶ棺のようなオブジェ…。薄々は感じたんじゃないか？自分が“普通と違う時間”をくぐったこと…。

「日常であり普通ですが。」

「あれは“影時間”：1日と1日の狭間にある“隠された時間だ。”
影時間か…呼び名があると楽だな。しかし…。」

「…隠された時間？」
隠れていたのか？どこに？

「隠されたと言うより、“知りようの無いもの”ってとこかな。でも、影時間は毎晩深夜0時になると必ずやってくる。今夜も。そして、この先もね。」

意味不明。知りようの無いものなら俺だってあんたらだって知らないはずだろ。

「普通の奴は感じられないってだけだ。みんな棺桶に入ってお休みだからな。」

あの棺桶は人だったのか。大体予測はしていたが。ってことは0時になってもあんなに人がいるんだな、流石都会。

というかいきなり横から割り込みしてくるな真田先輩。

「けど影時間の一番面白いところは見た目なんかじゃない。」
ほうほう。面白い、とな。

「お前も見たる：“怪物”を。俺達はシャドウと呼んでる。シャドウは、影時間にだけ現れて、そこに生身で居る者を襲う。だから、俺達でシャドウを倒す。どうだ…面白いと思わないか？」
どうでもいい。

「明彦！どうしてお前はいつも…痛い目を見たばかりだろ。」
あーあ、桐条先輩に怒られた。

「まあ、いいじゃないか。ちゃんと戦ってくれてるワケだし。」
理事長の言葉は戦えさえすればいい、と聞こえるのは気のせいかな？
「結論を言おう。我々は“特別課外活動部”。表向きは部活って事になってるけど、実際はシャドウを倒す為の選ばれた集団なんだ。」

選民意識ってやつか？これは俺達しか出来ないとか言ってる…。あほらしい。

「部長は桐条美鶴君。僕は顧問をしている。シャドウは“精神”を喰らう。襲われればたちまち“生きた屍”だ。」

別にいいだろ、それはそれで。

「このところ騒がれてる事件も、殆どヤツらの仕業だろう。」

事件？…確か、ストレス性のなんとかかかってやつか。

「警察に任せればいい。」

わざわざ一学園の生徒ごときにさせることじゃないだろ。

「…残念だが、影時間に警察は機能しないな…。」

…だよな。棺桶だし。

「実は、ごく稀にだけど、影時間に自然に適應できる人間が居てね。そういう人間は、シャドウと戦える力を覚醒出来る可能性がある。」

それがペルソナ…あの時、君が使って見せた力さ。」

ほう…つまり理事長はあの時傍観者だったのか。

…恐らくは先輩方もだろうな。

「シャドウはペルソナ使いにしか倒せない。つまりヤツらと戦えるのは君達だけなんだ。」

つまり理事長はペルソナが使えないって。

「分かった。」

理解はしたよ。

「飲み込みが早くて助かるよ。」

さいですか。

桐条先輩は机にシルバーのトランクを置き、こちらに向けて開けた。

中には赤い腕章と怪しく光る銀色の銃が入っていた。銀色の銃は岳

羽さんが持っていた物と同じ物だ。

用途はあの時と同じか。

「要するに、君に仲間になって欲しいんだ。君専用の召喚器も用意

してある。君の力を貸して欲しい。」

召喚器は銀色の銃のことか。」

召喚器は銀色の銃のことか。」

しかし…仲間になれ、ねえ。

「…どうするかな…。」

「そんなに深刻に考える事ないだろ。ちよっと付き合えよ。」

真田先輩、軽すぎだろ。

「私からも是非、お願いしたい。」

桐条先輩、怒らないんだ。

「ちよつ…先輩らに詰め寄られたら彼だって困るんじゃない？」

よし、言っただれ岳羽さん。別に困りはしないけど。

「そりゃ、仲間になってくれるなら、その…心強いですけど。」

戦略変えてきただけかよ…。期待した目でこつちを見るな。溜息が出た。

もういいや。なるようになれ。

俺の事は予想以上に知らないみたいだし。もう知らん。

「…どうでもいい。」

「それ、拒否しないって事だよな？ふう、良かった。あなた、断ると思ってた…。ちよつと心強いかも。」

「受けてくれて助かるよ。分からないことは何でもきいてくれ。」

「いや、感謝するよ、ホントに。」

あんたが言つと胡散臭いな理事長。

「ああ、そうそう。君の寮の割り当てだけだね。このまま今の部屋に住んでもらう事にしよう。偶然、のびのびになってたけど、こりゃケガの功名だね、ハハハハ…」

「偶然のびのびって、あれは…調子いいと言うか…」

なるほど。あの大きいシャドウは予想外にしても、最初から俺はこうなるように仕組まれていたんだな。

なにはともあれ特別課外活動部に入部し、シャドウたちと戦うことになった…。

…！？

頭の中に声が響く。

我は汝…、汝は我…
我、新たなる絆を見つけたり…
我、“愚者”のペルソナを生み出せし時…
我ら更なる力の祝福を与えん…

心に力が芽生え始めたのを感じる。

これがイゴールの言ったコミュニティなのか…？

「どうしたの？ぼーっとして。」

気がつくくと岳羽さんがこっちを見ていた。

「…もう退室してもいいですか？」

「ああ、疲れているだろうから、早く休むといい。」

桐条先輩の言葉に甘え、トランクを片手に立つ。

扉を開けた時点で言い忘れた事に気付いた。

「…俺の事を勝手に仲間だと思っ分は結構ですが、近付き過ぎると死にますよ。」

そして今度こそ退室した。

影時間 自室

ベッドに腰掛けてぼうっと天井を見ていると、誰かの気配を感じた。前方を見ると、いつかのしましま幽霊少年が立っていた。

「やあ、元気かい？」

…元気に見えるのか？

「何処から入った？」

「僕は、いつだって君の傍に居るよ…。」

まさか取り付かれていたのか。

触れることが出来たりすんのか？

「フフ…。」

何が楽しいんだ？

「もうすぐ…“終わり”が来る。」

終わりか。なんか不吉な予感しかしないな。

「何となく思い出したんだ。だから、君に伝えなきゃと思って。」
「苦労さん。」

「…どうでもいい。」

「…そっか。」

残念そうに言うな。聞いてほしかったのか。

「ま、君がそう思うならいいや。」

いいのか。どうしても言うなら暇だし聞かないでもないが。

「実は僕にもまだはつきりとは分かんないしね。」

分かんないのかよ。…それだけ早く知らせたかったのか？

「それより、とうとう力を手に入れたみたいだね。」

またその話か。もう3度目だぞ…。いい加減飽きる。

「それも、ちよつと変わった力みたいだ。何にでも変わるけど、

何にも属さない力…。それはやがて“切り札”にもなる力だ。君の

あり方次第だね。」

要するに異端ってことか。

そつえば全て説明の仕方が違ったな。

「初めて会った時のこと、覚えてる？交わした約束は、ちゃんと果たしてもらっよ。僕はいつでも君を見てる。たとえ君が僕を忘れててもね…。」

…流石幽霊。でも怖い。いつでも見てるとかストーカーみたいだぞ。でも忘れてるって…俺はあいつの事を知っているのか？記憶にはないが…。

「…じゃ、また会おう。」

友達にでも言うかのような気軽な声を残して少年は消えてしまった…。

あ、触ってみるのを忘れた。

地獄

校門前で岳羽さんが話しかけて来た。

だから噂になるんだよ…。付き合っているとかわかれてもいいのか？

「おはよう。昨日はその…ありがとね。真田先輩もケガしちゃってるし、私と桐条先輩だけになって不安だったんだ…。」

「ケガ？」

「そういえばなんかあったな。」

「うん、あなたが倒れた日、真田先輩もシャドウにやられてね。」

あんなこと言ってた割に真田先輩って弱…いやいや何でもない。

「少しあばらを痛めただけだって言ってたけど…。」

ご愁傷様。…何かあったら代わりに俺が呼ばれるのか？嫌だぞあの人のいた場所って。俺はあんな風に熱くなれん。なりたくない。

放課後

岳羽さんが話かけてきた。

だから噂が出るって。

「あーねむっ…マジで寝ちゃうかと思った…。」

俺は完全に寝てたが？

教室のドアの開く音と共に桐条先輩が入って来た。

教室内がざわめく。

まあ、校内一の人気を誇る桐条のお嬢様だしな。

「ちよっといいか。」

「やっぱりこっちにくるのね。」

「今日、帰ったら4階の部屋に集合してくれ。全員に伝える事がある。詳しい説明はその時にな。じゃあ、伝えたぞ。」

集まりって…情報を小出しにされてもなあ…。

桐条先輩はすぐに教室から去っていった。

「用件だけだった…。」

「私たちと違って、忙しいんでしょう？生徒会とか、そういうのでさ。

」

ならメールか電話でいいだろ。この学校携帯持つの許可されてんだし。今度メアドを教えとくか…。」

「え…あれ？ゆかりツチって…桐条先輩のこと嫌い？」

いたのか順平。…そういえば隣の席だったな。

桐条先輩だし、聞き耳でもたててたか。

「別に…嫌いじゃないけど。」

けどって何だよ？切れ悪いな…。」

作戦室

既に桐条先輩と真田先輩が座っていた。

忙しいらしいって話の割には早いな。

「おかえり。」

「待っていたぞ。紹介しておこう。」

「え？」

誰をだよ。岳羽さんも驚いているところを見ると知らないヤツか。

「…おい、まだか？」

タメ口って事は真田先輩より年下か？

「ちと待って、重つ…。」

ん？聞き覚えのある声のような…いやまさか。

扉が開く。いかにも重そうな荷物の影から順平の顔が見えた。え、

何のどつきり？

…4階までその大きな荷物持ってきたのか。大変だな。

「デヘヘヘ。どうモッス。」

「えっ、順平！？…何であんたが、ここに！？」

「2年F組の伊織順平だ。今日からここに住む。」

真田先輩：クラスメイトで席も隣なので知つとります。

「今日から住むって…うそっ！？何かの間違いでしょ！？」

…間違いだと信じたいな。なんか知ってる人全員がこの部に関わってきている気がする。

このままの勢いでの担任まで関係してきたりしてな…。現実になりそうだから想像するのはやめよう。

「この前の晩、偶然見かけたんだ。目覚めて間もないようだが、彼にも間違いなく適性がある。事情は大体話してあるが、俺達に力を貸すそうだ。」

真田先輩が話したのか？だったら不安だな。ゲーム感覚で参加してきそう。命を賭けた場所に遊び半分のヤツは邪魔なだけだ。いらねえよ、本当に。

「適性があるって…それ、ホントなの！？」

消えればいいのに、適性。

「オレ、夜中に棺桶だらけのコンビニでマジベソかいてたらしくてさ。つか、正直あんま覚えてないんだけど、見られてみたいので…ハズカシー！」

知らねえよそんなこと。

「でもまー、なんつーか、最初のうちは仕方ないんだってさ。記憶の混乱とか、アリガチらしいんだよね。キミたち、そういうの知ってた？」

「…知っている。」

ということにしておく。そんな事説明されてないしどうでもいい。

「なら、いいんだけどさ。ま、これペルソナ使いの常識だから。」

あー…はいはい。

「…けどさ、正直言うと驚いたぜ？オマエらも、そうだって聞かされた時はさ。」

…こつちも驚きだよ。

「…でも、知ってる顔が居て良かったよ。1人じゃ、不安だったしな。」

知らねえよ。

「ま、オマエらも、オレっちが仲間になって、ホントんとこ、嬉し
いだろ？」

「え？」

岳羽さんも嫌なのか。

「ま、まあね……。」

内心溢れ出てるぞそれ。

気持ちは分かるがな。

つたく、どんだけお気楽思考なんだか。

「そういうワケだ。よろしく頼んだぞ。」

嫌だよこんなヤツ。よろしくするな。

真田先輩がやけにやる気になっているように見える。

「よし……だいたい戦力も整ってきたな。これで、始められそうだ。
いいよ始まらなくて。」

扉が開き、理事長が入ってくる。

話が終わる頃に来るって、外で話でも聞いていたのか？

「よし、全員来たようだね。ちよっと聞いて欲しい。」
嫌です。

「我々の擁するペルソナ使いは、長い間、桐条君と真田君の2人だ
けだった。けど、最近とんとん拍子に仲間が増えて、今や5人にま
で増えてる。」

5人か、少ないな。戦隊ものみたいだ。俺は中ボスでよろしく。

「……そこでだ。今夜0時から、いよいよタルタロスの探索を始めよ
うと思う。」

「タル……？なんスか、ソレ？」

……タルタルソース。

「タルタロスよ。てか順平、あれマジ見た事ないの？」

岳羽さん、俺も見たことないです。

「ハテ……？」

「見てなくても、不思議はないさ。なにせタルタロスは影時間の中だけに現れるからね。」

普段は収納されているのか？便利だな、タルタルソース。…あ、普通か。

「影時間の中だけ…？」

「シャドウと同じって事さ…面白いだろ？それに、俺たちのスキルアップにもうってつけの場所だ。あそこは、言ってみればシャドウの巣だからな。」

スキルアップって真田先輩…。楽しそうに言わないで下さい。

しかしシャドウの巣…か。シャドウと戦って人を助けられていると言っていたんだ。それを落とすつもりだろうが…。

「お、おお…シャドウの巣っすか…。」

…順平、理解できてんのか？

「て言うか、先輩…その体で行くんですか？」

そっいえばあばらがイってたね。

一瞬、真田先輩には複数の体があるのかと思った…。

「明彦はケガが治ってない。同行はしてもらおうが、探索は無理だ。…ですよね！。」

「…分かってるさ。」

最初の間は何だよ。

「先輩の分はオレがバッチリ、カバーしますって…！」

順平…。

「なんか、不安だな…。」

岳羽さんに1票。

桐条先輩が理事長を向く。

「理事長は、どうされますか？」

「僕はここに残るよ。…どうせホラ、ペルソナ出せないしさ…。」

意外な場所に順平が驚いている。

普段起こされているとは言ってもやっぱり眠いな…。

「は…？ここ…？え、どういう事っすか？ここって、学校じゃ…。」
見た通りの学校だな。

「見てれば分かる。」

あ、説明放棄ですか先輩。

「ほら、0時になるぞ。」

携帯の時計が0時を指すと電源が落ちる。

同時に地鳴りのような音がして、校舎が変化しだした。地面から建物の一部と思われる物が次々と生え、高い塔を形作る。所々に時計をあしらった不気味な塔は月にも届きそうだった。

驚いて固まる俺と順平に桐条先輩が呟くように言った。

「これがタルタロス…影時間の中だけに現れる迷宮だ。」

「メーキュ―って…なんなんだよ、それ！？俺らの学校、どこいちまったんだよ！？」

順平五月蠅い。

…迷宮か。迷宮は中にある何かを外に出さないためにあるか、その先にある何かに触れさせない為にあるものだったはずだ。
なら、この中には何がある？

「影時間が明ければ、また元の地形に戻る。」

「こんなデカイ塔が丸ごとシャドウの巣って…。てか、オカシイっしょ！？なんだってウチの学校んトコだけ、こんな…。」
知らないし、どうでもいい。

順平の問いに対して桐条先輩は何も言わなかった。

順平が少し落ち着く。

「先輩達にも…分からないんすか？」

「…ああ。」

…なんか知っていきそうだな。

「きつと色々あるんでしょ…事情が。」

岳羽さんは気付いたか。

「分からなきや、調べればいい。ここを本格的に探索するのは、俺や美鶴にとつても今夜が初めてだ。ワクワクするだろ？」
多分真田先輩だけです。

「どう見たって、ここには絶対何かある。影時間の謎を解く、カギになるものかな。」

「明彦。意気込むのは勝手だが、探索はさせないぞ。」

「う、うるさいな…何度も言うな。」
タルタロスを見上げる。

ここからでは上の方はもう見えない。塔の不吉さはこれからを示していないといいが。

「…地獄の塔。」

「地獄!?!」

ぼそりと誰にも聞こえない程の大きさに呟いたつもりだったが、順平には聞こえていたらしい。
ちらりと見れば物凄く説明してほしそうな顔があった。溜め息をつく。

「…タルタロス。ギリシャ神話で言う奈落。語源は奈落迦^{ならか}。仏教用語で地獄を意味する。」

しかし地獄とは元来、落ちるものであって下にあるはずだ。何故塔として現れる？地上は地獄で天上が地面の下にあるとでも言うのか…。

…くっそ、あの幽霊が終わりが何とかって言うから思考が変な方向にいつている。

とにかく中に入るう。

タルタロス 内部

「おお…中もスゲーな…。」

順平の言う通り、中も凄い。中は10階分位は軽くあるんじゃないかと思ってしまう程天井が高い。中央には大きく長い階段が時計を

模した入口まで続いている。階段の左にはひっそりと金の大きな置き時計、右には黄緑の光を放つ謎の装置があった。

天井は白く発光し、中を明るく照らしている。白と青で統一され装飾された内装は豪邸を彷彿させる。

しかし綺麗な見た目に反して、中の空気は不気味でとても重い。それこそ長時間居たら体調に異常をきたすだろう。

「でも、やっぱり気味悪い…。」

順平も岳羽さんも、先輩方もあまりいい反応はしていない。

懐かしいと言うか、落ち着くと思うのは俺だけか。

「ここはまだエントランスだ。迷宮は、階段の上の入口を抜けてからな。」

「まずは慣れてもらおう。」

先輩方は慣れてるって感じですね。

いや、俺も慣れてると言えば慣れてるんだが。

「今日の探索は、お前たち3人だけで行け。」

「えっ！？新人だけでですか!？」

岳羽さんが驚く。まあ、真田先輩は…な。

「深入りさせるつもりはない。」

当たり前だ。俺はともかく順平や岳羽さんはな…。

「それに、必要な情報は、私がここからナビゲートする。」

迷宮だからな。迷わないようにってことか。

桐条先輩がナビで真田先輩があら…新人しか残らんな。

「それとな、現場でのチーム行動を仕切るリーダーを決めておこうと思う。」

新人しかいないからな。真田先輩がケガしてなければ一発で決まったものを。

「リーダー？それ、つまり探索隊の隊長!？」

ゲームのし過ぎじゃないのか順平。

「ハイ、ハイハイッ！オレオレッツ!!!」

どこの詐欺師だよ。いや、こいつにそんな頭はないだろうが。

「……。」

真田先輩は俺らを順番に見ていく。視線が俺で止まった。嫌な予感。「有里。お前がやれ。」

「やっぱり来たよ！」

「なんでっスか！？こいつ、隊長っぽくないっしょ？」

確かに俺には隊長とか向いてないと思うがお前にだけは言われたくない。

「あのね、彼はもう実戦経験者なの。」

「えっ…マジ？」

マジだよ。

「確かにそれもあるが、選んだ理由はもっと簡単だ。順平。ソレに岳羽もだが…ペルソナの召喚、あいつのようにちゃんと出来るか？」

「ちやんとって…俺最初暴走しましたよ？」

「も、もちろんっス！バッテリー、決めますって！」

「なんか不安だな。」

「私も、大丈夫です。」

「相手はシャドウだ。出来なきゃ話にならないぞ。」

「はい、分かってます。」

…あれ、順平…返事ないんだが。

「よし、行って来い。準備はいいか、リーダー？」

「そうだいいのか？」

…って俺がリーダーか。

…多分。」

不安だ。主に順平が。

「いきなりだもんね…。でも私も頑張るから、行く？」

…慰めて欲しいんじゃないやい！

もういいや。とりあえず中に入るっ。

…？

エントランスの端のほうに奇妙な青い扉があるのを見つけた。

「どうしたの？」

岳羽さんの問いに答えようとして、手元の契約者の鍵が光っている事に気付いた。

：つまりこの扉はイゴール関係のものか。

吸い寄せられるように扉の鍵穴に差し込む。

一瞬の暗転の後、ベルベツトルームに居た。

「お待ちしておりました。」

イゴールとベスは前回来たときと同じ場所に居た。動かないのかお前ら。

「いよいよ、その力：使いこなす時が訪れたようですな。」

どこから見てんだよ。千里眼か？ ストーカーはやめろよ。

「今から挑まんとする塔は、果たしてなぜ生まれ、何の為に存在しているのか……。残念ながら現在の貴方では、まだ答えを導く事は出来にならぬでしょう。」

いちいちむかつく言い回しだな。

「だからこそ、進まれる前に知っておかれるが宜しい。ご自身の力の性質というものをね。」

「力の性質？」

何だそれ。

「貴方の力は、他者とは異なる特別なものだ。」

ああ、幽霊が言っていたやつか。

「言わば、数字のゼロのようなもの……。からっぽに過ぎないが、無限の可能性も宿る。」

分からん。もつと簡潔に頼む。

「貴方はお1人で複数のペルソナを持ち、それらを使い分ける事が出来るのです。」

あ？ 普通は1人1つなのか？

「そして敵を倒した時、貴方には見えるはずだ……。自分の得た可能性の芽が、手札としてね。」

手札……。トランプか？

「時にそれらは、ひどく捉え辛い事もある…。しかし、恐れず掴み取るのです。貴方の力はそれによって育ってゆく…。よくよく心しておかれるが良いでしょう。」

…百聞は一見にしかず。戦えば分かるだろう。

イゴールの話は抽象的過ぎて意味が理解できないからな。

「さて…いよいよ私も忙しくなりますな。次からはご自分の意思で扉を開けて、ここへ来られるといい。その時こそ、私の本当の役割…貴方への手助けについて、お話ししましょう。」

またイゴールの話はあるのか…。

「では、再び見える時まで…ごきげんよう。」

視界が暗くなり、扉の開く音がした。

そして今回もベスと話してない…。

何だ、嫌われてんのか？

「ちよつと、大丈夫？」

岳羽さんの声で正気に戻る。

大丈夫。いつかベスとも話せるはずだ！

「どうしちゃったワケ、ボーっとしちゃってサ？」

「…なんでもない。」

話しても通じないだろうしな。扉見えてないだろうお前ら。

「まさか、寝てたとか!？」

確かに眠いな…。影時間明けないと寝れないけどな！

「オマエは、あれか。国会で居眠りする大物政治家か？」

何だそれ。どんな例えだよ順平。

「リーダーなんだからさ。頼むぜ、マジ。」

リーダー面倒だな…。

「なんでもないならいいの。とにかく行くこつ。」

岳羽さんの言う通り。改めて迷宮に入りますか。

それぞれの武器を選んだ後、階段を上がり、扉の前まで来る。

やばい高すぎだろこれ！せめて、せめて手摺りを下さい!!

「準備はいいか？」

「…大丈夫。」

声が震えないように言うのってこんなに難しかったんだね…。

「では、宜しく頼むぞ。」

下を見ないようにすぐに扉をくぐった。

2階に来るとエントランスのような白い清潔感のようなものは消え、緑の景色に所々赤い液体をつけたものに変わった。学校の名残が残っていてそれが更に不気味さに拍車を掛ける。

「いよいよ、こつから本番か…。」

順平でも緊張感のある声が出るんだ…。

「なんか、すぐ迷いそう…。」

まあ、迷宮だし。

貰った通信機に桐条先輩から通信が入る。

『3人とも、聞こえるか？』

「おつ、先輩!？」

「ここからは、私が声でバックアップする。覚えておいてくれ。」
順平が驚いた表情をする。

「えっ…中の様子が分かるんすか？」

「私のペルソナの特性でな。」
便利なことって。

「実は、このタルタロスは、中の構造が日によって変わってしまう。私もそちらへ加わりたいところだが、外からのサポートが欠かせないんだ。」

先輩はタルタロス内部に何度か入った事があるんだな。

「うわっ、ますます迷いそう…。」

「ところで、いま君らの居る場所は、既に、いつ敵が出てもおかしくない。敵のレベルは低いはずだが、注意して進めよ。習うより慣

れるだ。」

「うつす！」

「了解です。」

2人の返事を聞いて通信はいったん切れた。

「あれ、俺は返事してないがいいのか？」

「ったく…。なんか勝手だなあ…。」

勝手…なのか？

タルタロス内をのんびりと歩き出す。

2人も後をついてきた。

『気をつける！前方にシャドウ反応だ！』

シャドウの姿を視認する。

こつそりと後ろから近付き、逆手に持っていた片手剣を床に向けてシャドウごと突き刺す。シャドウは床に縫い付けられた。

「おつしゃー。行かせ総攻撃ー！！」

「却下。」

真つ先にシャドウに飛び掛かりそんな順平を制止する。

「え、マジ！？」

マジだから一旦止まれ。

「ペルソナを召喚して倒せ。」

いくら大丈夫だって返事を聞いていても岳羽さんのあれを見るからな…。

シャドウは臆病のマーヤだ。巨大なシャドウから出てきたものと同じやつであり、少なくとも物理攻撃は近づかなくてはリーチが足りず、当たらない。初めて召喚する相手にはピツタリだろう。

「早くしろ。長時間は動きを封じておけない。」

意を決したように順平がこめかみに召喚器をあて、引き金を引く。

「うおおおお、ヘルメース！」

帽子のような頭部に足から金色の翼を伸ばした全体的に金属質なペルソナ、ヘルメースは素早く空を駆け、翼で一太刀いれる。

岳羽さんも今回は召喚器を構え、躊躇いなく引き金を引いた。

「イオー！」

牛の頭部に涙を流す女性が鎖で縛られているペルソナ、イオは疾風を巻き起こし、敵を切り裂く。

シャドウは攻撃に耐え切れずに消滅する。

やろうと思えばあっさり出来るのね。

残った片手剣を回収する。

「結局オマエ召喚してねえじゃん！」

順平うるさい。戦闘終わったんだからいいだろ。

「もしかして、恐くて出来なかつたり？ だったら、リーダーをオレに……」

「オルフェウス！」

召喚器を使い、オルフェウスを召喚する。

そのまま、アギを繰り出す。

少し遠くで炎が生まれ、シャドウの悲鳴が響く。

「…次、行くぞ。」

驚きと恐怖で固まる順平をよそに、次のシャドウに突っ込んだ。

大体のシャドウを倒した後、エントランスに戻る事になった。

イゴールの言っていた手札云々についても理解した。戦闘終了後にカードが数枚、見えたのだ。高速で動くカードから1枚を選択していった結果、ピクシーとアプサラスというペルソナを手に入れた。

黄緑の装置を起動させ、エントランスに戻る。

エントランスに帰って来て1番最初に声をかけてきたのは桐条先輩だった。

「よし、全員戻ったな。有里、どうだった？」

「どうと聞かれても……」

「…眠い。」

「フフ、緊張が解けたからか？」

最初からです。

「数をこなしていけば、じき慣れる。」
眠気には慣れねえよ…。

「すげえ…。自分の力つての、初めて実感したぜ！」
順平が嬉しそうに言う。

それはよかつたね。

「でも…なんでだ？なんか、ミョーに体がシンドいんすけど…。」
「単なるハシヤギ過ぎじゃないの？」

同感。

「んな事言つて…ゆかりツチだつてもろバテ気味じゃんか。」

「バテるつてか、なんか、息苦しいような…なにコレ…。」

俺は平気。…眠いけど。

「それは影時間のせいだ。平時よりずっと早く体力を消耗するからな。心配ない、じき慣れる。」

桐条先輩が意外にも嬉しそうにした。

「しかし、想像してたよりも、行けそうじゃないか。明彦も、うかうかしてられないな。」

煽るなよ…。

「フン、ぬかせ。」

…笑われた。

まあ、なにはともあれ一応シャドウの対応は出来た、か…。
頭の中で声が響く。

え、コミュニケーションが上がったのか！？

基準が分からんぞこれ！

…いいや、眠気が思考を奪ってる気がする。

考える事を放棄する。どうでもいいや。

今日はもう帰って寝よう。

…早く影時間明けねえかな…。

警察

タルタロスを探索した翌日は眠いな。

いつも影時間は眠れないとはいえ、明けたとほぼ同時に寝る事ができた。

しかしタルタロスを探索した日には、影時間が過ぎてもシャワーを浴びたりしてベッドに入る頃には1時を過ぎてしまう。

…意外なところに敵がいたな…。

完全に盲点だった。

こうなったら授業中に寝るしかないな…。テストに響かないように気をつけないと…。

普通に授業だと思っていたが、今日は朝礼があるそうだ。

ナイスだ！これで寝れる。

朝に…と、トモチカ？とかいう生徒に聞いて初めて知った。

昨日はホームルームも寝てたからな…。

例の綺麗な講堂で朝礼は進んでいった。

何で先生方はこんな事をするのかねえ…。

まあ、寝れるから別にいいけど。

「…以上で、全校朝礼を終わります。続きまして、生徒会から、新しい役員の紹介があります。」
「どうでもいい。」

「生徒会代表、生徒会長、3年D組、桐条美鶴さん。」

「はい。」

先輩が生徒会長か。納得だな。ってか3年D組だったのか。

先輩は堂々とした足取りで壇上に上がった。

なんだろう、あれが王者の貫禄か…いや品格か？

「やっぱ先輩に決まったんだ。」

岳羽さん、いくら小声でもいきなり言うな。

「ま…あの人の人気、スゴいもんね。」

それは同感。羨ましくはならないけど。

「なんつっても桐条だもんな。オーラ出てるっつーか、近寄り難いっつーか。しかも桐条グループって、この学校の母体なんだろう？」
出来レースってか？

あとあまり話していると怒られるぞ。あの担任に。

「生徒会長という大役を拝命するにあたり、私の所信をお話ししておきます。」

生徒会長を拝命…って4月からか？

普通は10月位じゃないのか？具体的にいつとは知らんが、半年程の生徒会はどうしてたんだ…。

先輩の演説は続く。

「学園がより良くあるために1人1人の積極性は確かに大事です。

しかし、全員が1つの思いを1年間ずっと切らさずおくのは、簡単ではないでしょう。大事なものは、それが途絶えても確実に回る仕組みをいかに造っておくかです。その為に、各自の中の明日への思いを確認し、今、この青春の時をどう過ごすのか。現実から逃げることなく、如何にして未来を直視するのか。全てはそれに掛かっています。私1人の視野では、見えない物もたくさんあるでしょう。充実した学園生活を共にするため、皆さんの智恵と力を貸してください。よろしくお願いします。」

…はっ！うっかり寝ていた…。

「すげー…なんだあれ。」

順平が呆然として呟く。

「お前、意味分かった？」

…何の話だ？」

片目を擦りながら答える。

途中からギブアップ。眠気に負けた。

「…そうか。フリーダムだな、オマエ…。」
失礼な。

そんなフリーダムな俺だが、授業はちゃんと起きていたぞ。

相変わらずな授業だったがな。あの担任どうにかならないのか？

放課後

順平に誘われて断る理由が思い付かなかった俺は一緒に帰っていた。別に寮も一緒なのに何で帰るときまで髭面を見ないといけないんだか…。

校門付近で黄色い声を引き連れた真田先輩に気付いた。

その後、真田先輩に言われてポロニアンモール内の交番で待ち合わせる事になった。

黄色い声の女子達だが、先輩は誰1人として名前を知らないそうだな。そんなもんだろ。

ただの鬱陶しい付き纏いの名前まで覚えてやる義理も人情も持ってねえよ。

色々寄り道をしようとしてその度に順平に止められ、仕方なく交番に来た。

ドアを開けるとそこには警官が1人と真田先輩がいた。

…警察はあまり得意じゃないんだよな…。出来れば気付かないで欲しい。…無理な話か。

「じゃ、黒沢さん、これ載っていきます。あと、さっきの話、こいつらの事です。」

「……。」

警官…もとい、黒沢さんの視線がこっちを向く。

「この人は黒沢巡查。俺達の活動に協力してくれてる。」

つまり銃刀法違反とかで捕まる事はないのか？

「それと、これは幾月さんからだ。」

真田先輩はポケットから5千円を出す。

せめて財布に入れなさい。

「え、マジいいんすか!？」

順平、嬉しそうだな。

5千円を受け取る。

「手ぶらじゃ戦えないからな。ここで、準備しろ。」

警察が武器を売るのか…。世も末だな。

「黒沢さんは、仕事のコネで俺達の装備品を揃えてくれる。もっと

も、タダにはしてくれないがな。」

「当たり前だ。世の中にタダのものなど無い。」

…声は意外と迫力ないのな。顔は厳ついのに。

「分かってますよ。じゃ、俺はこれで。」

真田先輩はそのまま交番から出ていった。

「君達の事は聞いている。俺の仕事は、街の治安を守る事だ。たとえ

それが、どんな事情であってもな。」

視線が痛いです黒沢さん。こっちをじつと見ないで下さい。

「力など無くても、俺にはこの街の異変は分かる。俺は、俺が正し

いと信じる事をする。…それだけだ。」

かっこいい事を言ったようだが俺は知らん。

とりあえず、迷った末に順平の防具を購入した。

なんか1番死にそうな気がするからな。

「ありがとございました。これからよろしくお願いします。」

一礼して交番を出ようとした時、黒沢さんが一言付け足す。

「これ以上問題を起こすなよ、“死神”。」

ばれてたか。

「え、死神！？ってあの、至る所で暴力事件を起こしグハアッ!?」
順平の腹を肘で打った。

「失礼しました。」
痛みに悶える順平を掴んで交番を出た。

暫くしてやっと復活した順平はすごすごと帰って行った。勿論、誰彼構わず話さないように十分脅した上で、だ。
好奇心からつつついてくる奴らが1番面倒臭い。
警察にも目をつけられているしな…。

まあ、それは置いて。せつかくここまで来たからには色々と見て回らねば!

ポロニアンモール内には様々な店がある。交番、喫茶店、ゲームセンター、カラオケ…果ては骨董屋まで、より取り見取り。店が多過ぎてどこに行くか迷ってしまう程だ。

噴水前でどこに行くか迷っていると、他とは違う、暗い通路を見つけた。

所謂路地裏というものだ。

何となく、で向かう事にした。

すぐに行き止まりになっていた路地裏には、漫画などでよくあるような光景があった。

つまり、数人の不良に1人の女子が絡まれている図だ。
関わりたくないため、影から覗く。
ベタだ。ベタベタのベッタベタだ!

そして不良どもの向こうには青い扉。…ベルベツトルームに繋がる扉だ。

ベルベットルームって影時間の外にもあったのね。

えーっと、ベルベットルームに行くなら、不良をどうにかしていつて事？

ベルベットルームがこんなところにもあるって事が分かったし、今日は引き返そうか。今日中に行かないといけない用事もないし、面倒事には関わらない方がいい。

素早く引き返し、残っていたお金で傷薬や地返し如玉などを買って帰った。

路地裏の女子ががどうなったか？カツアゲされたんじゃないの？

警察（後書き）

主人公としては最低な人間で終わってる気が…。

迷子（前書き）

ガッキーー誕生日おめでとうー!!..!!

迷子

その後、友近にラーメンを食べに誘われ魔術師コミュ発生したり、タルタロスに挑んでレベルアップした順平がテレットテレットうるさいからテレットと呼ぶことにしたり、色々あった。

あ？部活？入ってねえよ。

周りに入れと言う声が多いが、順平や友近のように帰宅部もいる。つまり強制ではない。

別にいいだろ。コミュが発生するだろうがどうでもいい。

タルタロスで現金を拾った時には驚いた。

軍資金にすると言った時は皆からブーイングが出た。

お前ら金の亡者か？

あまりにも五月蠅かったので結局山分けすることになった。

山分けが何を意味するか理解しているのか…？

イゴールの本当の役割も分かった。

イゴールの役割は複数のペルソナを掛け合わせて新たなペルソナを生み出す、ペルソナ合体だそうだ。

170程の可能性があるとされた。多過ぎだろ…。

試しにピクシーとアプサラスを合体させたらネコマタが出来た。

ついでにコミュニティに力（経験値）をもらいペルソナが強くなる事も確認した。

そうそう、嬉しい事があった。

やっとベスと話したのだ！！

…まあ、話といっても用件聞かれたただけだが。ベスに近づく第一歩だ！

そんな俺だが今とても困っていた。
最近外食ばかりだったので久々に夕食でも作ろうと思いい買い物に出
掛けたのだが、気付いたら知らないところに立っていた。つまり迷
子だ。

どこで道を間違えたんだか…。

そしてこういう日に限って携帯は寮に置いてきていた。

場所が分からないので交番にも行けない。

黒沢さーん、ここら辺通って俺を助けて！

…心の中で叫んでも意味ないけどさ。

ため息と共にやる気を吐きだしつつ、仕方ないので歩く事にする。

「おい。」

ん…？

前方には暗い赤のコートにニット帽と、完全に冬の恰好に見える服
を来た目付きの悪い不良のような青年がいた。

暑くないのか…？

目がこっちを向いているようだが多分気のせいだろう。後ろの人で
も見ているに違いない。

それよりもこの迷宮の出口をだな…。

「おい。」

青年の横を通り過ぎようとした時、肩を叩かれた。

「…何ですか？」

「お前、迷子だろ。」

見てたのかよ。

「どこに行くつもりだ？」

「…教えてくれるんですか？」

人を寄せ付けけない雰囲気を出す割には親切だな。

「ここは危ない。案内してやるから場所をさっさとええ。」

「…スーパー。夕食の材料を買いに。」

青年は少し考えているようだった。

笑うなら笑えよ。たかがスーパーに行くだけで迷子だよチクショウ。

「…ついてこい。」

青年が歩き出す。

「ありがとうございます。…俺は有里湊です。」

青年の後を追う。

道案内してくれると言う人に名乗る位はしないとな。

例えその後不良達に囲まれても切り抜ける自信はある。

「…荒垣真次郎だ。」

アラガキシンジロウ、長い名前だ。

結局、買い物まで付き合っただけで貰った。

今日のレシピは買いながら決めようと思っていたらレシピまで教え

て貰った。

親切過ぎるだろ…。

「帰り道は分かるのか？」

首を振る。

この辺りの地理はまだ知らない。

ため息をつかれた。

転校したての俺が街の地理を全て把握するのはまだ無理だったの！

「…場所は？」

「月光館学園巖戸台分寮。」

俺の言葉を聞いた途端、荒垣さんの空気が変わった。一瞬の驚きと

…警戒心。

「…お前…。」

恐らく、荒垣さんは部に何らかの形で関わっている。

多分、先輩にあたるのだろう。
「とりあえず案内お願いします。」
荒垣さんはゆっくりと歩き出す。
暫くはどちらも話さなかった。

分かりやすい道を選んでくれたのだろう。大きな道を使うだけで寮の前まで着いた。

これで次からは迷わないぞ。

「わざわざありがとうございます。」

御礼を言って頭を下げる。

「…何も聞かないのか？」

荒垣さんは複雑な表情をしていた。戸惑い、とでも言うのだろうか。

「…じゃあ、メアドを教えてください。寮生には会いたくないだろうから、聞きたい事が出来たら後でメールします。」

「…分かった。」

荒垣さんは少し躊躇いながらも携帯を取り出す。

どこまでも親切な人だな。

俺は先程貰ったレシートとボールペンを渡す。

「今携帯を持ってないので書いて下さい。」

明らかに嫌そうな顔をしていたが、大人しく書いてくれた。

「…今度から気をつける。」

荒垣さんは一言残してポケットに手をつ突っ込んで歩いて行った。

…もう迷子のごめんだよ。

寮に帰ると全員がラウンジで寛いでいた。

…嫌な予感。

「あ、おかえり。」

「…ただいま。」

「湊、何だそれー？」

順平がソファーにもたれ掛かりながら言う。

「答えたくないな…。」

「…夕食の材料。」

「え、有里君って料理出来るの!？」

驚いた岳羽さんの大きな声に先輩達も反応する。

「手料理か、いいな。俺らの分は無いのか？」

タルタロスに突撃するような勢いで真田先輩が来る。

「ハイ、ハイ！オレも食べる!!」

全員で食べる方向で進んでないか!？」

「私も是非食べてみたいな。今日のメニューは何だ？」

桐条先輩も嬉しそうに言う。

「あ、じゃあ私も欲しいな。」

岳羽さんまで…。」

もう決定事項ですか…。」

心なしか皆の目がキラキラしている。

断りたい…しかし言い出せ無い。

一応、数日分の材料は買っていたが、まさか1日で消費されようとするとは…。」

ため息をつく。

「1人千円。」

妥協案を出すしか出来なかった。

『有里です。今日はありがとうございました。メアドの登録お願いします。』

料理ですが、皆まで食べる話になり、教えて頂いたレシピを活用できませんでした。すみません。』

携帯に届いたメールを見てため息をつく荒垣だった。

迷子（後書き）

というわけで荒垣先輩でした。

おかしいところなどありましたらご指摘お願いします。

依頼（前書き）

遅くなりました。

まだ忙しいのであと1、2ヶ月程更新ペースが遅くなりそうです。

依頼

校長の桐条先輩に対抗するための無駄に長い話や先輩に生徒会に半ば強引に入れられたり、よくもまあ毎日物事が起きる事で。

いや、一日で起きた事だが。

お前が生徒会！？こんなヤツ入れていいのか！？といった事を言っていたテレットには、岳羽さんに頼んでガルをぶっ放して貰った。便利だなガル。今度ガル持ちのペルソナ作ろう。

放課後

授業が終わったとほぼ同時に携帯が鳴る。

開いてみるが、画面上には人の名前はおろか、番号すら表示されていない。

なにこれホラー？

この程度で怖くはないが。

電話に出る。

『もしもし、こちら、エリザベスでございます。』

ベス！？

あれ、俺って携帯番号教えなかったけ…？

…細かい事は別にいいか。

『いつもお世話になっております。』

「こちらこそ…」

『お話がございますので、ベルベツトルームまで起こして下さい。』

話？ベスが？

『ベルベツトルームへは、ポロニアンモールからもお入り頂けます。

扉をお探し下さい。』

ああ、あの扉か。

じゃあ今回はそこから入るか。

『…では、お待ちしております。』
すぐに行きます。

通話は切れた。携帯をかばんになおす。
じゃあ、一秒でも早くレッツらゴー！

ポロニアモール

他の店には一切目をくれずに裏路地を目指す。

少し暗くなっている通路を覗くと、やはりまた例の不良どもが、違
う女子を囲んでいた。

制服からして、同じ学校か。

しかし、交番の横でよくやるなお前ら。黒沢さんちゃんと仕事して
いるのか？

隣の交番を覗いてみるとちょうど巡回中らしく、居なかった。

不良どもも頭が無いわけではないのね。

放置しておいてもいいが、今日はあそこから行く予定だ。

何よりもあまりベスを持たせたくない。

…恋人待たせてる男か俺は！

アホらし…。

とりあえずあそこにいた不良どもを何とかするか。

裏路地には苛々しているのがよくわかる不良どもが輪を小さくして
いた。

女子は今にも陥落しそうだ。

俺が不良なら追い撃ち優先するが残念ながら今回はこっち側なので
不良どもには退散願おう。

不良の1人が痺れを切らして殴ろうと拳を見せ付けた辺りで割り込

む。

「イツケナアインダアー。」

不良の意識がこっちを向く。

携帯のカメラで一枚。中々にいい一枚だな。すぐに保存っと。

「男ガ複数デ女ノ子ヲカツアゲエ？サイツテエー。」

敢えてゆつくりと話す。さあ、釣られる。

「うつせえ！さっさと失せろや。殺すぞ！」

声が耳障りだ。

よくそんな声に生まれたね。奇跡じゃないの？

携帯を見せ付ける様に持ってボタンを押す振りをする。そのまま耳

に当てて話す。

「あ、警察ですか？実は今、カツ…」

慌てたのか。不良の1人が殴り掛かって来た。頬を殴られる。

下手だなあ。

腹の底から堪え切れない笑いが溢れ出して来る。

「正ー当ー防ー衛ー！」

右手で拳を作り、振り下ろす。

「があっ！」

不良1人終了！。

拳を脳天に受けた不良は地面に伸びる。

いやー、こいつがあまり身長が無くてよかったよ。

「てめえ！何しやがる！！。」

頭が悪いなあ。説明したよ？

他の不良も次々と襲い掛かってくる。

4人か。こんな狭い場所で皆一緒に来たらやりにくいだろうに…。

案の定、お互いの身体が邪魔をした不良どもはあっさりと地に伏した。

余裕だな。シャドウの方がまだやり甲斐があるぞ…。

女子に近付くと、怯えた顔をして震えている。

…まあ、一般人の反応の仕方だな。

「…えっと、大丈夫？」

顔を何度も縦に動かす。

「…警察、行くよ。」

手を掴んで先導する。ここに居られたらバスに会いたくても会いに行けないし…。

警察もこう近いと便利だな。

交番に女子を残してジュースを買ってくる。どれがいいか分からないから取り敢えず剛健美茶で。

交番に戻ると女子は最初と変わらない場所に、変わらない姿勢でいた。

剛健美茶を投げて渡す。

空いていた椅子に勝手に座った。

黒沢さん早く帰ってこないかな。

「…あ、あの…。」

女子を改めてちゃんと見る。

緑色の髪に大人しそうなその外見は地球環境に良さそうに見える。

いや、悪い意味じゃないぞ。

「えっと…私、山岸風花といいます。…助けて頂き、ありがとうございます。…
ざいました。」

女子は頭を下げた。

剛健美茶に髪が入らないか？

「…有里湊。」

助けたのはついでだし。

それより早く帰って来いよ黒沢さん。

それから15分程待っていると、漸く黒沢さんが帰って来た。

「…ん、どうした？」

相変わらずの仏頂面だ。

「…その女の子が交番横の裏路地でカツアゲされてた。」
視線で彼女をさす。

「…お前がしたのか？」

「ワーアハハ。笑エナイ冗談だね。」

視線も合わせずに棒読みで言う。

「有里君は助けてくれただけです！」

山岸さんの言葉に驚く黒沢さん。

「いやまあ、日頃の行いだけどさ…。」

携帯で取った画像を見せる。カツアゲの証拠だこのやろつ。

「…明日は血の雨でも降るのか…？」

「降ラセテモイデスヨー。…じゃあ、後は任せます。」

すぐに交番を出る。

やっも行けるよ。

黒沢さんの制止の声を無視してベルベツトルームに向かった。

ベルベツトルームに行くと、やはりいつもと変わらない場所にいつもの姿勢でベスとイゴールがいた。

ここは時間の概念がないのか？

「御呼び立てして申し訳ございません。」

話はベスかららしい。

「実は…折り入ってお願いがございます。」

願い…？

「私…思う所がございます、お強い方を探しておりました。もし宜しければ、私よりの“依頼”にお応え下さいませんか？」

強い人を探しているから依頼をこなす…？

意味が分からない。強い人を見付けて欲しいのか？

「中にはあなたのエスコートが必要な特別な依頼もございますが…。」

「

…デートか？デートなのか？

「もちろん、依頼達成の暁には、相応の報酬もご用意しております。お客様がお力を示しにいらっしやるのを、私…心よりお待ち申し上げます。」

つまり、依頼はベスにとつての一種の目安か。俺がどれほど強くなつたかを知るための。

じゃあ強い者を探す理由は？

ここには敵も何も無いだろう？

ベスから貰った複数の依頼書を眺めながら考える。

まあ、いいか。単純に強い人を好むだけかも知れない。詮索するだけ無駄だ。

しかし、何だろうこの依頼の数々…。

甲蟲の外殻を取ってこいだの人工島計画文書を取ってこいだの…。

マッスルドリンコぐらい自分で買ってこい。後マツヤニの粉って何だ？

…依頼として出す位だから外に出れない、とか？あの外見は目立つよな…。

と思つたらポロニアンモール行きたいって…。

もういいや。考えるの疲れた。

取り敢えず、外殻とマツヤニの粉とポロニアンモールの案内を引き受ける。

「ベス、ポロニ行くよ。」

「まあ…。」

とても嬉しそうに微笑むベス。不覚にも見とれてしまった。

「心待ちにしております。それではお願いいたします。」

ベスと共にベルベットルームを後にする。

今更だけど、ベスその恰好で行くんだ…。

ポロニアンモール

…これってデートなんでしょうか…。

中央の噴水のある広場。まだ裏路地から出たばかりですよベスさん。

「あ…これは…早くも、見事な逸品との出会いが…。」

どれ？俺には普通の景色にしか見えないんだが。

「これが噴水…。」

そこかよ！…いや、まあベルベットルームには無いけどさ…。

「命の源たる水をもてあそぶ、罪深きアート…。」

間違つてはないだろうけどそう認識したらまともに見れないよ！

「その魔性ゆえに、硬貨を投げ入れた者の願いを叶えてしまうもの

まであるとか…。」

「…叶うかもな…。」

トレビの泉の話だった…はず。…いや、無いなそんな泉。

「これは試さない訳には参りません。」

え、試す？

「不肖このエリザベス、こんな事もあるうかと硬貨を少々持って参りました。5百円硬貨にしまして2千枚…締めて100万円からのスタートでございます。」

何の競りが始まるんだよ…。

ベスは懐から大きく膨らんだ財布を取り出した。

どこに収まっていたんだよ…。後2千枚は少々じゃない。

つて、財布を逆さに向けてる！？

硬貨がじゃらじゃらと音をたてて滝の様に噴水の中に落ちていった。

…拾っちゃだめか？

「あ…！」

あ？

しまった、といった表情を見せたベス。

自分の間違いに気付いたか？

「投げ入れる事ばかりに夢中で、肝心の願いを考えておりませんで

した。」

ベスさん流石です。

「これではいけませんね…。熟考のうえ、また近いうちに訪れる事に致しましょう…。」

もう間違い訂正する気力もない。

ただただベスの行く道についていく事にした。

ベスは交番の前で立ち止まる。

「おや…こちらは何の施設でしょうか？中に険しいお顔立ちの御仁がいらつしゃいますが…。」

黒沢さんだな…。笑い堪えながらこつち見るんじゃねえよ。

山岸さんもこつち見るな。

「こちらに貼つてある顔写真は…。」

ベスの興味は近くの掲示板に向いたようだ。

「指名手配…報奨金…。これは…私の討伐依頼と同様のものと考えて宜しいのでしょうか？」

討伐って…。

「…さあな。」

「あなたにもお分かりにならないとは…神秘的な場所なのですね。」
説明していないからな。

「もし私の依頼を同じでしたら、討伐の証をどのように確認するかと気になります。やはり体の破片なのでしょうか？興味は尽きません…。」

体の破片って…。グロいな。

ポロニアンモールの隅にある建物まで来た。

派手過ぎる程に鮮やかにデザインされた看板にはエスカペイドと書いてある。テレットの言っていたクラブだ。

ここにもベスは興味を持ったらしい。

「こちらの建物は…」

分からないという顔のベス。

「まさかここは…クラブ!？」

驚きと嬉しさが入り交じったような声だった。

ベスはクラブ分かるのか。

「内なるパトスのままに踊る…そんな日常では許されぬ欲求を解放する、光と音の地下庭園…。」

…そうなのか? クラブに関しては知識は持ってないから知らんぞ。

ベスはおもむろにドアの取っ手に触れ、ドアを引く。

しかしこんな陽の高い内から開いているわけもなく。

「…!? そんな…今は閉まっているのですか?…残念でございます。ぜひ私も思っておりますのに…」

悲しそうにしたベスに何と声を掛けようか迷っていると、やはり諦めきれなかったのか急に踊りだした。

それはあたかも精緻な人形が滑らかに動いて踊っているかのようで。

「イェーイ。」

右手、左足を上にあげ、華麗にポーズを決める。

拍手を送っておいた。

「フウ…いくぶん気が治まりました。」

「…よかったね。」

眼福でした。

「それにしても…どの場所も大変興味深く、目移りをしてしまいました。」

ベルベットルームにあるようなものは一つも無いからな。

「…宜しければ、あなたのお薦めを、教えて頂けませんか?」

「…カラオケ?」

「カラオケ…それはまさか…歌舞音曲の本職の歌い手に、ワンポタ

ンで挑戦できるという、あの…!」

間違っではないが…。

ベスの情報源つてどこなんだ。

「私の秘密のレパトリー…？ついにお披露目の時が訪れたようですね…。」

秘密のレパトリー…？何だろう。ものすごく気になる。

「あ…失礼。少々お待ち頂けますか？…こちらにも噴水があったのですね。」

ベスはエスカペイドのすぐそばにあった噴水の下に行く。忘れてなかったのね。

ベスはまた財布をひっくり返す。大量の硬貨が落ちていく。

…願いが叶うといいな。

「！？更にあちらにも噴水が…。なるほど…この場所の噴水の主は、三位一体という事なのですな。」

発想が奇抜過ぎるよ！

ベスは入口を挟んだ反対側、ゲームセンターの横にある噴水にも硬貨を落とす。

もうそれは投げ入れるじゃなくて落とし入れるだよ…。

これがベスクオリティ…！

すみません適当言いました。

「…お待たせ致しました。それでは参りましょう。」

ポロニアンモール中央付近にある階段を上り、カラオケに入った。

結果だけ言うと凄かった。ベスは演歌からアニソンまで何でも来い

！とでも言うかのような歌いっぱいだった。

2人でしたデュエットはとても楽しかった。

そして何度も言うが、情報源どこだよ…。

カラオケをした後、広場の中央にある噴水付近に立つ。

「本日は数々の貴重な体験をさせて頂きました。依頼の方は、十二分に達成でございます。」

ベスの言葉で現実に戻る。

これはただの依頼だ。…依頼でしかないんだ。友達同士がする遊びでは決してない。

「宜しければまたいつか…一緒にさせて頂きたく存じます。」

「…こちらこそ…楽しかった。」

「では、戻りましょうか。」

ベスと2人でベルベツトルームに戻った。

ベスはベルベツトルームに戻ってくると仕事の顔になった。

「お付き合いありがとうございました。それでは早速…ポロニアンモールへのご案内、ありがとうございました。噴水へかける願い…何にするのか未だに決めかねております。このベルベツトルームをクラブにして欲しい…というのは、主に断られたので…。」
もう聞いたのか…。

流石にそれはイゴールも了承しないだろ…。俺もそこには行きたくない…かな。

「他の願い…となると、難しいところでございます。」
難しいのか。

「…あつ。ついに、決めました。」
して中身は？

「願いが決まって欲しいと願うことに致します。これで無事、解決でございます。」

…ベスがいいならもういいや…。

「さて、今回の報酬ですが、特別なものを用意致しました。」
ああ…あるんだっけ。

「これがあれば、魔術師・カハクを合体で創り出すことが可能となります。可憐な少女のような外見と、強力な攻撃が魅力のペルソナでございます。」

ベスは小さなチャイナ服を取り出した。

「それでは、こちらが報酬になります。お受け取りください。」
小さなチャイナ服を受け取った。

…何か気に入くない…。

でもそう言っていては何もならないしもう疲れた…。
マッスルドリンコの依頼を受けて寮に帰る事にした。

そういえば不良は最後まで気絶したままだった。

見舞（前書き）

真田先輩を好きな方にまずは謝ります。
すみません、彼に悪気は無いんです。

見舞

朝

眠気を堪えながら登校していると、岳羽さんが話しかけて来た。

ついでに男子どもの恨めしげな視線も感じた。視線は当然無視する。

「おっはよ。なんか、すっかり暖かいねー。まあ、今日から5月だもんね。早いと思わない？」

「別に。」

こんなものだと思う。

「あつという間だよー。色々あつたしさ…。」

大型シャドウとか、新入部員とかの話か。

「…って言えばさ。無気力症の事件、全然減らないね…。」
何がて言えばか分からないが…。

もういつその事、全員無気力症になればいいのに。

「シャドウと戦えるの、私たちだから…。」この前みたいにさ、何かあったときのために、もっと力つけないとね…。」

気持ちは分からんでもない。

苦戦なんざしたくないね。

「私は自分のペルソナの力…もっと、強くしないと。いつも守られてるワケにはいかないから…。」

…？

岳羽さんの言葉には『足を引っ張りたくない』という事とは別の意味が含まれている気がした。

まあ、どうでもいいんだけど。

「そっぴや、知ってた？真田さん、今日検査入院でさ。」

放課後になり、周りが部活等でちらほらと減って来た頃、順平が口を開いた。

「さつき連絡があつて、病院に届けモノ頼まれちゃったんだよね。オレって、結構頼られてる?」

少し嬉しそうに話す順平。

たかがパシリだろ。

「そんなの、帰宅部ならヒマだろうって頼んだんでしょ。」

「そ、そんな事ねーだろ。」

動揺がまともに顔とついでに声に出てるぞ。

「ハハ、冗談だつて。で、何を持って来いつて?」

どこまでが冗談だよ。

「隣のE組のクラス名簿だつてさ。」

「名簿…?どうすんだろ、そんなの。て言うか、今日、たまたま部

活休みだし、付き合おっかな、それ。あなたも行くでしょ?」

疑問形と言う名の強制文が聞こえた気がするぞ。

「…行かないけど。」

わざわざパシりに付き合うわけないだろ。

「まあたそう言うコト言う。」

呆れたような岳羽さん。

俺は何もしていない。

「病院まで来いなんて、何か大事な用つぽくない?」

いや、暇つぶしに女子の名前をみてどんな人が妄想しようとかそう

いう話じゃないのか?

…変態だな。

「つか、オレが頼まれたのになあ…。」

そうそう。順平に頼む程度だからな。そんなものだろ。…先輩、あ

くまで冗談だぞ?

「大事な用なら、みんなで行つといた方がいいって。」

大事な用なら全員に連絡するだろ…。

「ね?」

可愛くいっても変わらんし分からんぞ。

強制的に連れて行かれそうなので鞆を持って早々に教室から離脱。

…する前に襟首掴まれて連行された。
最近の女子は力が強いな…。

辰巳記念病院

何を記念して創られたのかは知らないここは、かつて俺が入院した病院だ。

ドアを順平がガラガラと音を立てて開ける。岳羽さんいい加減放して。首辛い。力技で外すの面倒臭い。

中には真田さんの代わりにいつぞやの親切な案内人がいた。荒垣さんだ。ベッドの上に座っている。相変わらずのコートはとても暑い。見ているこちら側だけか？

「……………」

こちらに気付いたらしい荒垣さんは、何も言わない。

「ここって真田さんの病室……じゃなかったりします？」

あーあ、順平が相手に呑まれた。

助けてなんかやるもんか。まだ首掴まれてるし。

後ろから足音がした。真田先輩か。

「お前たち。どうした、大勢で？」

「お見舞いに来ましたっ！」

引っ張られて来ましたっ！

「…でも、なんか平気そうですね。」

拍子抜けたような表情で岳羽さんが言う。

何を想像したんだよ。

「ただの検査入院と言っただろ。」

聞きましたね、順平から。

俺リーダーなのに情報の入りが悪いな…。なんでだろ。

「アキ、もういいか？」

荒垣さんがここにはもう居られないとでも言うかのように口を挟ん

だ。

「ああ、参考になった。」

大体予測はしていたがやはり知り合いか。

ついでだが、誰か突っ込むなり岳羽さん離すなりして欲しい。無視する分はもういいから。

「つたく…いちいちテーマの遊びに付き合ってられるか。」

荒垣さんがベッドから立ち、歩いて来た。

「お前…」

少し驚いた顔をする荒垣さん。気付いてなかったんですね…。

「…とりあえず、放してやれ。」

岳羽さんは、そうだった!とようやく手を離す。俺は忘れられてたのね…。

「ガキさんありがとうございます。」

頭を下げて礼を言う。

そういえば荒垣さんには助けられてばかりだな。

「いや…」

荒垣さんそのまま病室を出ていった。

「だ…誰っスか、今の?つか湊、知ってるの?」

「一応、同じ学園の生徒だ。先月から増え出した謎の無気力症…お前達も知ってるだろ。」

またその話か。無気力症って聞き飽きた。

「アイツたまたま、患者の何人かを知っててな。話が聞きたくて呼んだ。」

「…湊は?」

そんなに俺が気になるのか…。

「…別に。」

話すの面倒臭い。

「それより順平、頼んでた物は?」

待ち切れない、とでも言うかのように順平に問う真田先輩。

「モチ、持って来たッス。」

渡すだけにやけに気合いの籠っている順平。

そんなにボクシング部無敗チャンプのパシリがいいのか…。

俺は嫌だな。

「済まない。じゃ、そろそろ行くか。」

順平から名簿を受け取った先輩は痛めた方の肩をぐるぐると回す。

…やる気だな…。

「ちょ、そんなに振り回したらまた…。」

「平気だ、このくらい。」

先輩は順平の制止も聞かない。駄目だこの人。

「あまり長いと部活にも響くだろ。取り戻す時間が惜しい。」

もういつその事死神シャドウにでも突っ込めよ。

「そついえば先輩って、なんでボクシングを？」

「始めた理由か？そうだな…。」

岳羽さんの問いにどう話すか迷う先輩。

他に何に聞こえるんだよ。後悩む位に何も無いのか。

「別にボクシング自体に思い入れはない。素手の格闘技なら何でも

良かった。」

キックボクシングはアウトか。…まず想像できんな、真田先輩のキ

ックボクシング。

「昔、自分の無力さを思い知った事があってな…。もう、ああいう

後悔はしたくないんだ。」

真田先輩は悔しそうに表情を微かに歪める。

相当強い後悔だったんだろつ。

…なんか空気が重い。

「それに、自分がどこまで強くなれるのか、興味もあるしな。まあ、

言ってみれば自分対自分の終わらないゲームみたいなものだ。」

どうでもいい。

「な、なるほど…ゲームっすか…。好きっすよ！オレもゲームッ！」

フォローしたつもりだろうが完全にずれている。

「あんたのはテレビゲームでしょ？」

「あ、でも格ゲーもやるよ？」

「…どうでもいい。」

岳羽さんに台詞を持ってかれた…。

つか今回俺がいる意味ないじゃん。

…帰る。

夜、荒垣さんからメールが来た。

『ガキさんと呼ぶんじゃねえ』

と一文だけが書かれていた。

返信を送る。

『ガキさん先輩。』

荒垣さんのため息をついている姿が容易に想像できた。

本当にどうでもいい。

見舞（後書き）

6話目に「カクセイ」を割り込みさせています。
よろしければそちらもどうぞ。

以下、書き忘れていました。

読めば分かりますが、サブタイトルの片仮名表記は視点が違います。

お参り

ゴールデンウィーク。

順平はこそそと人の後を尾行していた。

尾行の対象となっっているのはSEES現場リーダーの有里湊その人だ。

理由は数日前に遡る。

先日、ただ寮に帰るのも何となく癢に感じてゲームセンターに遊びに来ていた。

格闘ゲームに勤しんでいると、外が騒がしくなった。

気になって外を覗くと、美女の傍に見馴れた姿があった。

我等がリーダー、有里湊だ。銀髪美女の隣で表情を微かに動かしながら、それも少し楽しそうにしながら歩いていた。

あの湊が、だ。

もっさりした前髪で顔を隠しているためにただでさえ表に出ない表情が余計に読めず、何を考えているか分からず、口も中々開かず、開いたと思っただけ一言だけしか言わないあいつは学校ではオレとゆかりツチ位しか話さない。時々友近いるけど。鉄仮面にも程があるだろ。

時々オレ達にそれだけで人を殺せるような視線を寄越すこともあるから友人は極端に少ないだろうと思っていた。

だがそんな奴に銀髪美女がいた。

寮では部屋が隣だからちよっとした会話を聞こうと思えば聞こえない事もない。

そしたら今日、会っらしいじゃねえか！

これは調べてみないと！

というわけで今に至る。

今は巖戸台商店街にいる。

湊は古本屋に入っただけ。

この古本屋はじいさんとばあさんの経営する場所で、そういえば最近リニューアルオープンしたらしいって噂が回ってたな。

通りすがりの人を装って中を見る。

…ポケットに手をつつまれてた。

…まあ、店員さんがいい笑顔だったから、多分何か物を買ったんだろ。…強引に渡されたみたいだったな。

モノレールに乗って今度は辰巳ポートアイランド駅へ。

モノレール内では見つからないかとヒヤヒヤしたぜ。

無駄に鋭いんだよ湊のやつは…。

湊は辰巳ポートアイランド駅の花屋に入っただけ。

…銀髪美女にプレゼントするつもりか？

いいやそうに違いない！男が花を買うとはそういうことなのだ！

色々と話していたようだが、やがて紙袋に数種類の花を束ねた小さな花束を2つ持って出て来た。

…2つ！？

2つだぞ、2つ！

つまり2人の女性にやるってことだろ！？

…ふ…二股…？

いいやダメだろそれだけは！

相手はゆかりツチ…とか？

やっぱりあの噂は本当だったのか！？

2人は付き合ってたのか！

これは友人として何が何でも止めなければ…！

湊は次にポロニアンモールに来た。
もちろん順平も後ろをつけている。
ポロニアンモールで集合するつもりか？
花束をやるって事は、最低恋人レベルだろ？…多分だけど。

湊はそのまま交番横の路地裏に入っていく。

…？随分と物騒な場所で待ち合わせするんだな。

路地裏を覗くと、そこにはただぼーっと立ち尽くす湊がいた。
他に誰もいない。

ゆっくりと近づいてみる。

ピクリとも動かない湊の前に来る。やはり何も無い。

「…何？」

「うえっ！」

湊は冷めた目でこつちを見てた。

これはきつとあれだ、絶対零度とか言うやつだ。

「いつ、いや…別に銀髪美女が誰かとか二股してんじゃねえかとか
思ったわけじゃねーから！！」

「…二股？誰が？」

殺される！！

「…オマエ、ゆかりっちと銀髪美女の2人と付き合ってたんじゃねー
の？」

恐る恐る聞いてみる。

湊が溜め息をついた。

最初から、順平が後をつけて来ている事は知っていた。

しかし、何故二股とかいう話になる？

銀髪美女は分かる。恐らく依頼中を見られたのだろう。

岳羽さんは…やっぱり朝のあれか。やはり噂になっていたのか。

「…あれ、お前、花束2つ持ってたよな？」

順平が紙袋の中の花束が1つに減っている事に気付いたらしい。

二股は花束から連想したのか。短絡的過ぎる…。

「ベスに1つあげた。」

ベスは花を見たことがなさそうだったので、ベルベートルームにでも飾ってくれば良いと思い、プレゼントした。

意外と喜んでくれたからよかった。

「ベスつて…？後もう1つは…？」

ハテナマークを頭の上どころか顔を埋め尽くす程に大量に見える気がする。

「…銀髪美女。」

「え、いつ会った!？」

そろそろ質問に答えるのが面倒になってきた。

どうせベルベートルームと答えても見えない奴には頭のイカれた奴にしか見えない。説明するだけ無駄だ。

「…どうでもいい。」

さっさとその場を後にする。

「どうでもよくないっつもの!」

順平も追い掛けてきた。

「だいたいオマエは口数が少な過ぎるんだよ!しかも少し話したかと思えばどうでもいいとか、ありえねえだろ!」

無視して歩き続ける。

ミュージックプレイヤーを弄り、イヤホンをする。

後ろの方から「フリーダム過ぎんだろー!」と聞こえたが多分気のせいだろう。

ムーンライトブリッジ

1度ここには来なければいけないと思っていた。

10年前の事故現場。

今と昔は違う上に、影時間ではないので不思議な感じがする。

思い出す。

燃える炎、黒い化け物、白い少女。

流れる血、力無い手、響く轟音。

自分の過去だと確信の持てる数少ない時間。

「…どしたん？ぼーっとして。」

順平に肩を叩かれて正気に戻る。

無言で橋の中程まで歩く。

順平も黙ってついてきた。

今は全く何も無く綺麗になった事故の跡に立つ。

随分と綺麗になったものだな。まるで全て忘れ去られたかのようだ。

いや、第三者にとってはそうなのだろう。

結局、覚えているのは関わった僅かな人間だけなのだ。

紙袋から花束を取り出す。

順平が変な顔をしているが気にしない。

橋の欄干をじっと見る。本来なら、こここの辺りに置くものだろう。

しかし何か違和感のようなものがそれを拒んだ。

その思いに従い、海に向かって花束をおもいきり投げる。

花束はばらばらになりながら下に落ちていった。

「ちよお！海にもの捨てんなよ！！何？どうしちゃったわけ！？」

混乱した順平に腕を掴まれる。

「…昔、ここで事故があったらしい。」

「…は？」

順平の顔を見て、自分が何を言ったか気付く。

「…実感が湧かなかったから、投げた。」

「あー…理解しようとしたオレツチが馬鹿だった。」

帽子の上から頭を掻きながら順平がフリーダムだもんな…と呟く。

別にフリーダムは関係ないだろ。

空になった紙袋を拾い、畳んで順平に渡す。

「…帰る。」

そしてまた歩き出す。

ここで死んだのは一体誰だっただろうか。

勿論頭では理解している。しかし、実感できない。

ふとした時に思ってしまう。

本当にあの人は両親だったのだろうか、と。

親不孝者だろうと思う。そう言われても仕方がない。

ここで起きた事は現実にあったことだし、その事に何の違和感も感じない。

ただ、度々見る悪夢。まるでそうであると俺に刷り込もうとしているかのように感じてしまうのだ。

…考えすぎだろうか？

順平に腕を掴まれた時、一瞬自分が何を言ったのか分からなかった。自分の口から他人の言葉が飛び出したかのようにぼろっと零れていた。

無いと思うがタルタロスでの探索を繰り返す事でいつの間にか信頼しかけていたのだろうか。

…自分で警告したくせに何をしているんだ俺は…。

影時間

ベッドの上でぼうつとしてしていると、しましま幽霊少年が現れる。

「やあ、元気かい？フフ…。」

含みのある笑いをする少年はかわいいとは思えない。

「勝手に入るなよ…。」

「そんなふうに言わなくなったっていいだろ？僕はいつも、君の傍に

いるんだから。」

…本気で憑かれてるな。神社つてお祓いしてくれるっけ？

「1週間後は満月だよ…。」

どこか真剣に少年が呟く。何か重要な事を伝えようとしているのは分かるが、満月か…。

思い出すのは前回の満月。幾つもの手で構成された、マジシャン。

「気をつけて。また1つ、試練がやってくるからね…。」

「…試練？」

あの大型シャドウに出くわす事をさせているのか？

「君が“ヤツら”と出会う事さ。」

さも当然、と言つかのように即答される。…だよな。

「試練と向き合うには準備が必要だ。でも時間は、無限じゃない…。」

もちろん、君なら分かっていると思うけどね。」

こいつが言うのと嫌味にしか聞こえない。

でも理解しているのも確かだ。

「じゃ、それが過ぎたら、また会いに来るよ。」

不思議な笑みを残して少年は見えなくなった。

会うたびに思うが、あいつ本当に子供なのか？

とりあえず警告されたからにはまたあの大型と向き合う覚悟をしておくか。

番人

寮に帰つてくると、全員が라운ジのソファ―に座っていた。

「…あ、お帰りー。」

岳羽さんが真つ先に挨拶してくる。

「ねえ、有里君。今夜、タルタロス行つとかない？」

全員の意識がこちらを向く。

「先月の襲撃の後、何も起きてないから、妙に不安になってきちゃつてさ…。」

こっちは警告を受けたから別の意味で不安だがな。

「それに、最近、増えてない？…例の無気力症。何かの前触れとかじゃないといいんだけど。…って、考えすぎかな？」

女の勘はすごいな。…勘？

ついでにどんな敵かまで当ててくれないのか？

少年の警告が確かなら、次の満月までに大型とやり合えるレベルまで強くならなければならない。他のシャドウとは比べ物にならない強さを持つあいつらに勝つためには、どれだけ強くなればいいのか見当もつかないが。

「…とりあえず、今日は登れるところまで行きます。」
全員が頷いた事を確認した後、自室に引っ込んだ。

タルタロス エントランス

今日はベスの依頼の報酬もあり、お金が貯まったので装備を一新した。

いつまでも初期装備は辛い。

「お、新しい装備だ。オレッチの分とか無いの？」

「無い。」

「何で？1人だけ狡いだろ！ゆかりっ子もそう思わない！？」

文句を言われる筋合いはない。岳羽さん羨ましそうにこっちをちらちら見るな。

「タルタロス探索する度に手に入れた金を山分けするという事は軍資金も山分け、つまり自分達の装備代や道具代その他はそれぞれで管理すると言う事だが？」

順平達の顔が引き攣った。

「ゲームや服に使ったんだろ。」

「いや、だって…。」

「…だって？」

「…だって、金貰ったら使いたいじゃん！今月は欲しいのあったしさ。装備なんて…！」

溜め息をつく。だってで済むような楽な世界を探索しているのではないのだ。

俺は死にたくないと思うから行動している。

ここはゲームでは無い。リセットボタンで最初に戻る事もデータロードで途中からやり直す事も出来ない。ましてや死んだ者が生き返る筈が無い。

しかし順平や真田先輩は遊び半分、岳羽さんは父親の死の真実を突き止める為でしかない。桐条先輩については知らないが。

タルタロスは所詮目的を達成するための通り道であってそれ自体が目的では無い。

だが疎かに出来るものでもない。そんなことをすれば死ぬだけだ。最近、タルタロス内を探索するのに慣れたからなのか、緩んでいる気がする。

周りを見ていると真剣に取り組む俺が馬鹿みたいじゃないか。

「…じゃ、死ねば？」

「有里！」

桐条先輩が順平、岳羽さんと俺の間に立つ。

「言いすぎだ。落ち着け！」

「…何で？」

全員がたじろぐ。

唯一岳羽さんだけが一言呟く。

「何でつて…。」

「…死にたがり率を率いる程暇も余裕もねえよ。」

1人で階段を登る。

「意味分かんねーよ！急に逆切れしてんじゃねー！！おい、湊！聞いてんのか！？」

順平の言葉を無視して扉をくぐった。

「くっそが！あいつ何なんだよ！？意味わかんねえよ！」

湊が去った後のエントランスで順平が床を思い切り蹴り付ける。

「…タルタロス内を1人で探索するのは危険だ。とにかく、今は彼と合流してくれ。」

美鶴さんがバイクに乗せてある通信機器を弄りながら2人に言う。
真っ先に反応したのは順平だった。

「やだね。何であんな事まで言われて助けに行かないといけねーんだ。大体、死にたがりはある程度の方じゃねーか！1人で突っ込んで助けてやる筋合いなんかねーよ！！」

順平の言葉にゆかりは反応出来ない。

沈黙が支配する。

破ったのは湊との通信が繋がった音だった。

「有里か！無事だな。今岳羽と伊織をそっちに…。」

主に順平が嫌な顔をする。

『…先輩。すみませんが、少し1人で頭を冷やさせて下さい。通信は全員繋がっている為、順平とゆかりも聞いていた。』

「しかし、中は危険だ。余り長時間は…。それにその階には門番がいる。」

『…分かっています。シュッ』

「有里！待て！！」

『…ガスツガキンツ！チツ…うあっ！？』

湊の驚いたような声の直後、ブツンと音をたてて通信が途切れる。

「有里！？有里！！…伊織！岳羽！有里が門番シャドウとの戦闘に入った。今すぐ援護に向かえ！伊織、有里の事が気にくわんかもしれんが今は援護に回ってくれないか？言いたいことは後で本人に言え！」

「行くよ順平！！」

順平は嫌そうな顔をしたが、舌打ちひとつで言葉に従う。

順平とゆかりが転送装置に駆け寄り、素早く操作する。

いつもはリーダーたる湊が操作するその使い方は後ろで見ているので分かっている。

しかし、湊のいるであろう階層が表示されない。

「くっそあいつ、装置を起動させてねーのか！？」

「仕方ない。階段で行くわよ！」

2人は慌てて階段を駆け上がった。

タルタロス内のシャドウを無言で殴りながら進む。

ルートは知らない。ただ目についた道を通り、シャドウを刈る。

桐条先輩から通信が来た時は門番のいる階層に着いた直後だった。

応えるのも億劫だったが、飛び出して来たのはこちらだ。応答しないわけにはいかない。

それでも今は彼等に会いたくなかった。

「…先輩。すみませんが、少し1人で頭を冷やさせて下さい。」

時間稼ぎにもならない発言。全員が顔をしかめている図が容易に想像できた。

『しかし、中は危険だ。余り長時間は…。それにその階には門番がいる。』

「…分かっています。」

桐条先輩の言葉を聞くまでもない。眼前には全体的に白く表面が光を反射して見るからに硬そうな門番バスタードライブがいた。人でいうところの腕があるところには巨大な円錐の物体が、脚のある場所には車椅子のような車輪に脚が3本ずつ、均等に配置されていた。投擲用ナイフを走りながら投げ付け、勢いを殺さずに回し蹴りを放った後に片手剣で切り付ける。

硬い感触と音が響く。

予想通りと言えば予想通りだが、やはり物理は全て効かないようだ。舌打ちして敵を蹴り、跳んで距離を取る。

敵がつかさず鋭く尖った腕を突き出して来る。

「うあっ!？」

身体を捻り、必死に避ける。腕は頬を切り裂き、通信機を破壊して後ろに抜けた。

一回転して立ち上がる。

直後に後ろに跳び、敵の打撃を避ける。

冷や汗がどつと出る。

背筋を伝う感覚に思わず笑みが浮かんだ。

「オルフェウス。」

頭に召喚器を突き付け、引き金を引く。

「アギ」

バスタードライブが燃え上がった。

どれだけ魔法を放つただろう。

敵の攻撃を回避しながら炎や疾風などを放つ。

身体には完全に避け切れずについた傷が幾つもあり、体力、精神力共に尽きかけている。

正に満身創痍。死にかけた。

召喚器を持つ手は既に感覚がない。

《マハジオ》

バスタードライブが全体に雷を撃ち落とす。

「くっそがあ！」

動かない身体を無理矢理動かして避ける。

オルフェウスを召喚し、疾風で切り裂いた。

ダメージが限界を超えたのか、シャドウが断末魔の悲鳴と共に闇に消える。

それを確認すると身体から力が抜けて床に座り込んだ。

「やばかった。」

持っているアイテムを使用して傷を癒す。

もうペルソナを召喚して回復させる事もできない程に力を使い切っていた。

目を閉じて床に寝転がる。

傷は全て治ったが、失った血液までは戻らず、溜まった疲れが抜けるわけでもない。

「…何やってんだ俺は…。」

再びため息が出る。

死にたがりは嫌いだと言いながら死にたがりだと言われても仕方ない行動をした。

何で俺はこんな馬鹿やってんだ…。

ため息をついてゆっくりと目を開ける。

視界いっぱい広がっていたのはオルフェウスの顔だった。

「…え？」

床に寝転がる俺の上にオルフェウスが乗っている。端から見ればオルフェウスに押し倒されている図としか見えない筈だ。

「…退け。」

オルフェウスは聞こえていないのか、じっと目を見ているだけだ。

「お前…いい加減にしろ！」

何とかオルフェウスを押し退ける。

「…どういっつもりだよ。」

複数の足音が響く。順平達が来たらしい。

「有里君！」

岳羽さんの声がした方に意識を向ける。

そのすきにオルフェウスが手刀を額に振り落とした。

「いつ！」

オルフェウスはすぐに消える。

衝撃が体を抜け、額を押さえて床を転がった。

こんなことならゲーセンでパンチマシなんかするんじゃないかった

…。マジで痛い。

順平に胸倉を掴まれる。疲れている身には少し辛い。

「オマエっ…！」

順平が凄い形相で睨んでくる。怒っている、という表情。

首が締められて少し苦しい。

「…離せ。苦しい。」

「無表情で何言ってるやがる！からかってんじゃないぞ。」

揺すられて更に氣道が締まる。

表情を出せたらとつくに出てる。

誰も彼もお前みたいに単純じゃないんだよ。

「自殺みたいな事までしやがって、意味わかんねえよ！」

「心配したのよ！1人で突っ走ってんじゃないわよ！！」

自分が何をしたかは重々承知している。

…だから2人して耳元で叫ばないで欲しい。耳が痛い。

「…とりあえず、場所を変えないか？」

ここは迷宮内なのだ。刈り取る者がいつ出て来てもおかしくないし、何より影時間が終わってしまう。刈り取る者はまだ先輩から話を聞いただけで会ったことは無いが。

「まだ話は終わってないわよ！」

「…影時間が明けるぞ？」

2人は数秒迷うように黙り、順平は胸倉を掴んでいた手を乱暴に離した。

数回、軽い咳が出る。

一息つくつと、右手首を岳羽さんが、左手首を順平が痛い位の力で掴んだ。

「逃がさないから。」

「逃がさねえよ。」

何だ？俺は煮られるのか焼かれるのか炒められるのか？

両脇を固められたまま、俺は連行されて行った。

行けるところまで行く予定だったんだがな。

…言ったらきつと腕が潰されるな。

エントランスに帰つてくると、桐条先輩も鬼の形相をしていた。

「…有里。私の言いたい事は分かるな？」

頷く。

「話は寮に帰つてからだ。帰り次第作戦室に集合だ。いいな？」

「…分かりました。」

明日は学校を休むかもしれない。

とりあえず岳羽さんと順平、いつになったら離してくれるんだよ。

順平爪が1つ刺さってるし。

寮 作戦室

寮に残っていた真田先輩も話に加わり、計4人に囲まれて床に正座させられている。

それぞれの腕はまだ掴まれたままだ。4人共立っている為、両手を挙げる格好になっている。

降参しているみたいだな。…似たようなものか？

「弁明して貰おうか。」

桐条先輩の指揮の下、全員で無言の圧力を掛けてくる。

弁明…説明と言う名の言い訳をしろって事か。

「…すみませんでした。」

どう説明したらいいか分からずに一言謝る。

「…ちよつと、何よそれ。謝ったら全て終わるとか思ってたんの？そんなわけないじゃん！ちゃんと説明してよ！！何で1人で門番シャドウに突っ込んだのよ！？下手したら死んでたのよ？分かってんの！？」

岳羽さんが腕を掴む手に更に力を込めながら叫ぶ。順平は何も言わない代わりに力が入る。先輩2人はいつ手を出してきてもおかしくないほどの怒気を放っていた。

口を開き、言葉が見付からずに閉じる。

ぐらぐらと順平に揺すられる。

「何とか言えよ！オマエはいつもそうだよな。何も話さない。それで何とかなるとか思っくんじゃねーぞ！」

「…有里。私は止めた筈だな？何故聞かなかった。門番シャドウは他のシャドウとくらべものにならないほどに強い事は君も承知しているはずだ。」

勿論知っている。

今までも何回か戦闘になり、その度に苦戦してきた。

「…有里。お前は何がしたいんだ？」

真田先輩の言葉に全員が黙る。

恐らくは全員が聞きたい答え。

彼等が知りたいのは、俺という本質^モ。

俺はゆっくりと口を開く。

「…俺は…。」

しかし、言葉は続かない。続ける事ができない。

俺の中には、何も無い。

両腕の締め付けが無くなり、力を抜いていた為に重力に従い下に落

ちる。

身体を掴まれて引きずられる。少しだけ間が開いたそこに、護るかのようにオルフェウスが顕現していた。

隙間から、驚いた顔が見える。

「勝手に出て来るなオルフェウス。」

オルフェウスは何も反応せず、ただ間に立っていた。

「…何でオルフェウスなんか出してんだよ…？」

頭を軽く振り、問い掛けてきた順平を見る。

驚き、戸惑い…様々な感情の入り乱れた複雑な表情は、きっと全員が抱いているもの。

オルフェウスが振り返る。また、こちらをじっと見つめてくる。

オルフェウスと睨み合う。

オルフェウスの伝えたい事が分からない。

《気付け》

オルフェウスの声が聞こえたとはほぼ同時に頭に衝撃と痛みが加わる。

「だっ！」

また手刀を入れられた。

頭を押さえて床に転がる。馬鹿になったらオルフェウスのせいだからな。

オルフェウスはそのまま消える。

視界を塞ぐものが無くなった為、全員の顔がよく見えるようになった。

数秒で痛みが多少和らぐ。

体を起こし、立ち上がる。

「…恐らく3日後、先月のような大型シャドウが出現する。」

「何だと!？」

「何でお前がそれを知っている!？」

真田先輩の問いには答えない。

「…出現場所、能力共に不明。…今の実力で勝てるという確証も無

い。」

「…だから、焦ったのか？」

桐条先輩を見て頭を下げる。

「…先刻は軽はずみな行動をしまい、すみませんでした。結果的に死ななかつたとはいえ、多くの心配をかけた事、申し訳なく思います。2度とこのような事にならないように努めて参ります。本当にすみませんでした。…リーダーから外すなり、退部させるなり、俺の処遇は好きにして下さい。」

「…有里…。」

批難の色が籠っている声を無視して頭を上げ、扉を見る。

「…俺はもう、死にたくない。…見たくない。」

半ば逃げるようにその場を後にした。

湊が居なくなつた後の作戦室。

皆何を言えいいのか分からずに黙っていた。

「…こうしていても埒があかない。今日はもう解散しよう。皆疲れ
ているしな。彼の対処については明日、話し合つ。以上だ。」
誰も反論せずに解散する。

様々な意味で疲れた一日だった。

番人（後書き）

次回、満月戦です。

女教皇 前編（前書き）

満月戦は長いのでいくつかに分けます。

女教皇 前編

影時間 作戦室

美鶴はソファアに座り、一人で情報支援用の機材を操作していた。しかし、あまり結果がよくないようで、浮かない顔をしている。

「フウ…。」

自然とため息が零れた。

ドアの開閉音と共に明彦が入ってくる。

明彦は美鶴を見て、軽く驚いた。

「なんだ、まだやってたのか？」

「まあな。敵はいつ来るとも限らない。それに、今日は大型が来るらしいからな。」

明彦は眉をひそめる。

「大型、か…あいつの対処は決めたのか？」

あいつとは勿論有里湊の事だ。

先日、湊を除く他の者達で話し合いをした。様々な意見が出たが、話は纏まらなかった。皆の意見を基に美鶴が決める事としてお開きになったのだ。

「ああ、決定した。大型が出れば今日、出なければ明日、皆の前で発表する。」

「…そうか。しかし…タルタロスの外まで見張ろうなんて、そう簡単に出来るものか？」

美鶴の表情が陰る。

「本音を言えば、力不足だな…。私のペンテシレアでは、情報収集はこの辺りが限界かも知れない。」

敵の情報収集をできるペルソナは美鶴のペンテシレアだけだ。流石に湊でもそのようなペルソナは所持していない。これからその能力を得るか否かは分からないが。

そのペンテシレアの能力も後付けされたもので使いこなすには大変

な労力がある。

ペンテシレアは本来補助系ではなく戦闘系のペルソナなのだ。

「…しかし、ペルソナの力というのは、想像していたより、だいぶ幅広いものらしい。何しろ、次々とペルソナを替えながら戦える者まで現れたくらいだ。彼の能力には、特別なものを感じる。まだ覚醒して間もないというのにな。」

初めて門番シャドウと行き会った時を思い出す。

それまで戦ってきたシャドウより明らかに強い敵を相手に苦戦を強いられた。ゆかりの回復も段々と追いつかなくなってきた。

その時彼 有里湊 はそこでオルフェウスではなくピクシーという小さな妖精の姿をしたペルソナを呼び出したのだ。

彼のその能力が無ければそこで全滅していたかもしれない。

彼は部内の大切な戦力の一つなのだ。

明彦は好戦的な笑みを浮かべる。

「確かに、あんなヤツが現れるとは驚きだ。しかし、ペルソナを使うのは俺たち自身。それを生かせるかは、アイツ次第だな。」

キュウウイン……ピン！

機械音の後に電子音がした。

「ん…？」

美鶴が機械を操作する。

「これは…シャドウの反応…!？」

「なに!? ホントに見つけたのか!？」

お互い、ただのでまかせだと思っていたらしい。

「反応が大きすぎる。こんな敵は今まで…。」

「まさか、有里の言っていたデカいやツか!？」

「…間違いないだろう。」

「そうか…思いがけず、楽しめそうじゃないか。他の三人を起こすぞ?」

「ああ。」

明彦は大きなパネルの方に足を向けた。

ポロニアンモール

交番を出て近くのベンチに座る。横には買った装備品や薬の入った袋を置く。

まとめ買いしなければよかった。

薬はかさばるし装備品は重い。

でも誰かに頼むことは出来なかった。

先日の一件以来、寮内の居心地が悪い。

夜も作戦室で話し合いをしていたらしいが、その輪の中に入ることが出来なかった。

原因は分かる。俺のせいだ。自業自得。

勝手に暴走して、逃げたからだ。

自分の事を心配してくれているのは分かる。多分あれを心配している、と言っただろう。

でもそれが煩わしい。

こう…ぞわぞわする。

全身に鳥肌が立つような不快感。皮膚の表面を何かが纏わり付くような気持ち悪さ。感情が自分に向けられる事が間違いであるような違和感。

俺は彼等の仲間ではいられない。

空を仰ぎ見る。暗い空には満月以外何も無い。

一昨日はベスの依頼の期日だった。

しかし他の人は話し合いがある上に話し掛けにくかった。

一人で突っ込んでもいいが、ばれたら前回の事もありさらに叩かれるのは目に見えていた。

仕方なく、荒垣さんにメールを打ち、半ば強引だが脅してはぐくれの特製を奢る条件つきでついて来てもらった。

戦闘を避けて行ったため、一度も戦わなかったが、今出ている依頼は全て達成できた。

…荒垣さんには色々聞かれ、最後に脳天に一撃お見舞いされたが。ガキさん拳は無いわ。

ため息をつき、ゆっくりと立つ。いつまでもここで休んでいるわけにもいかない。

荷物を持ち、歩き出した。

カチッ

小さな音と共に、影時間に入った。

…帰りは歩きか。

そういえば今日は大型シャドウが出る予定日だった。

…怒られるな。

影時間 作戦室

ブザー音が寮内に響いてから数分後、ゆかりと順平が来た。

「おまたせしました！」

「何スカ！？敵スカ！？」

美鶴は辺りを見渡す。

「ああ。…しかしその前に…有里はどうした？」

途端に順平は顔をしかめる。

「部屋には居なかったツスよ。」

美鶴は頭を抱えた。

何で彼はこういふときにいないんだ…。

「全く…。まあいい。それより、タルタロスの外で、シャドウ反応が見つかった。詳しい情報は分からないが、先月出たような大物の可能性が高い。」

順平とゆかりの表情が引き締まる。

湊の言っていた事が当たっていた。

「外に出た敵は仕留め逃がす訳にはいかない。影時間は、大半の者にとつて無いものだ。そこで街を壊されたりすれば矛盾が残る。」

「ま、要は倒しやあいいでしょ？やっつけてやるツスよ！」

「また、あんたは…。」

ゆかりが暗に調子に乗るなど言っても順平には通じない。

美鶴は明彦を見る。

「明彦はここで理事長を待て。」

明彦が一瞬固まり、すぐに反論する。

「なっ…冗談じゃない！俺も出る！」

しかしそれを許す美鶴ではない。明彦はまだ完治していないのだ。

「まずは身体を治す方が先だ。足手まといになる。」

「なんだと!？」

例え美鶴でも足手まといだけは言われたくない。

「彼らだって戦えるさ。少なくとも、今のお前よりはな。」

そう言われてしまうと何も言えない。

「明彦…もつと彼らを信用してやれ。みんなもう実戦をこなしてるんだ。」

それでも諦めきれない明彦は必死に糸口を探す。

「しかし、有里が「くどい!」「」

美鶴の一言で明彦は黙らざるおえない。

「いざとなれば私が出る。それで満足か！」

「……………くそっ。」

とても悔しそうに吐き捨てた。

「まかして下さい！オレ、マジでやりますからっ！」

順平は胸を張り元気よく言う。

活躍出来る可能性があるのだ。彼のやる気が出ないはずがない。

「仕方ないな…。」

明彦は未練を振り切るように頭を振った。

「なら、二人は先行して出発だ。美鶴は準備がいるんだろ？」

明彦の言葉に美鶴は頷いた。

「ああ、駅前で落ち合おう。」

「了解です。じゃ、行きますか！！」

順平とゆかりは気合いを入れて部屋を出た。

巖戸台駅前

ムーンライトブリッジを軽く走破し、巖戸台駅前の階段で一休みしていた。

鞆からから剛健美茶を取り出して飲む。

温い。やはり買い溜めはしない方がよかったか。

一気飲みをした後、ため息を一つついて空き缶をごみ箱に捨てる。

もうひと頑張りか。

帰ろうと思いい荷物を持った時、岳羽さんと順平の姿を見つけた。

岳羽さんと順平は俺に気付くと全力で駆けて来た。

怒り心頭って感じで心なしか二本の角が見える気がする。

…鬼だ。鬼がいるよ！

「何でここにいるのよ！？大型シャドウの出現場所知ってて先回りしたって言うの！？ばっかじゃないの！！！」

岳羽さんに服を掴まれながら一方的にまくし立てられた俺は意味を理解するのに手間取る。

出現場所に先回りということは、この近辺に出たのか？

…探知能力なんざ持つてねえから知らんが。

「ホントは全部知つてて教えなかつたつてのわ！？そんなに自分の手柄にしたいのかよ！！」

あー…俺の信用ゼロ？

自分の手柄にしたいのはお前の方だろ順平。

…物凄く、どうでもいいと言ってこの場から離脱したい。むしろさせて下さいお願いします。

「…ど」どうでもいいなんて言わせないわよ！」「」

岳羽さんが見事に被せてきた。

「君にはどうでもいい事かもしれないけど、私たちにとってはどうでもよくないんだから！！」

「…っ」

彼女の真剣な眼差しに気圧され、言葉が奥に引っ込んだ。

ブロロロ…

遠くからバイク音が響いてきた。影時間内は自分達の話し声以外に音が全くないのでよく聞こえる。

「…ん？なんだあ！？」二人が音のした方を見る。視線が離れたことで一息つきながら、俺も音のした方を見た。

大型バイクが目の前に停車する。ヘルメットの下にあつた顔は桐条先輩のものだった。

「遅れてすまない。…ん、有里か。今まで何をしていたんだ？」

すつと手にしていた荷物を前に出す。

「…装備、二人の分。」

岳羽さんと順平がそれを受け取る。

「…前回の探索の時は結局山分けしなかつたから、利用して買った。

…それに、大型程度で死なれても迷惑だ。」

二人して目を伏せ、少し申し訳ないような表情をした。

「…ここでは疲れて休憩してただけ。…先輩達はなぜここへ？」

「ああ、大型シャドウらしき反応をキャッチしてな。情報のバックアップを、今日はここから行う。」

桐条先輩が俺を見る。

「有里、君の処遇だが、今まで通りリーダーをしてもらう。」

「先輩、本気っすか!？」

順平の反論を桐条先輩は視線だけで封じ込める。

「シャドウを倒せるのは私たちだけだ。数少ないメンバーを減らすわけにはいかない。それに君程冷静で適切な判断をする人間は部内にいないだろう。」

桐条先輩は俺を美化し過ぎていないか？

「…無茶だ。」

その二人が俺みたいになやつ言うことを聞くとは限らない。

「出来るさ。今までだって、そうして来たろ？」桐条先輩は事もなげに言う。そう簡単にいくとは思えないが…。

「何故俺が…。」

「ワケなんていいじゃんか。認められてんだからサ。要は、今まで通りって事だろ。」

順平は不機嫌ながらもついてくるらしい。

「つか、なんかオマエ、このままリーダーが定位置になりそうだよな…。…ま、別にいつけど。」

順平はとても不満げだ。

リーダーがしたいなら順平に是非とも押し付けたい限りだが…任せたら死にそうだ。

「しかし、前回の行動も捨て置けない。だから、これからはあのような行動をしたら問答無用で処刑する。」

身体に悪寒が走り抜ける。処刑は何かやばい。何がか分からないけど何かやばい。

…先輩は目が本気だ。

「君らの勝手はこれまで通りだ。シャドウの位置は、駅から少し行つた辺りにある列車の内部。そこまでは線路上を歩く事になる。」

「え、線路歩くつて、それ、危険なんじゃ…。」順平は驚いた顔で言った。こいつは影時間に機械が止まること知らないな。

「心配ない、影時間には機械は止まる。列車が動くはずが無い。」

「や、でもそのバイク…。」

「これは特別製だ。」

少しいらついたような、もしくは嬉しそうな声で桐条先輩が言った。

「それに、状況に変化があつたら私が逐一伝える。…そういえば有里、通信機が壊れていたな。」

桐条先輩から通信機を受け取る。

「ありがとうございます。」

通信機を装備する。岳羽さんと順平もそれぞれ装備を換える。

「そういえば湊、オマエ武器とか召喚器は？」

「…問題無い。」

鞆からエアガンを取り出す。別に銃で頭撃ち抜けばいいだけだろ。

「うえ…。」

「…ちよつと、マジで…？」

明らかに引かれた。別に代用品があれば問題無いだろ？何か問題があるのか…？

中の弾を出してポケットに入れる。これで頭を撃つても痛くない。

…まさか自分を撃つ事になるとは思わなかったがな。

「…先輩、鞆をお願いします。」

桐条先輩に鞆を預けた。

「よし、では作戦開始だ！」

「はい。」

「う…うっす！行ってくるっす！」

岳羽さんと順平は気合いが入っているらしい。

三人で駅内部へ向かった。

「有里君ってさ。」

移動中、岳羽さんが話しかけて来た。

「ホントに喋らないよね。」

否定はしない。特に自分の気持ちを口にする事は苦手だ。

「でもそれってさ。今回みたいな誤解を生むよ。まあ、今回は私も悪いと思うから謝るわ。ごめんね。でも否定出来るところはちゃんと否定して。」

「…善処する。」

否定すると断言は出来なかった。

女教皇 中編

側面に虹と鳥達の描かれているモノレールの前に来た。モノレールは影時間に見るとその絵と影時間のギャップが違和感を生み出していた。

扉が全て開いている。…異確定。

「これ…だよな？」

ゆかりが自信なさ気に呟く。

ピピピ。

通信音が響き、その後に桐条先輩の声がする。

『三人とも、聴こえるか？』

「あ、はい、大丈夫です。今着いたんですけど、パツと見じゃ、特に…」

岳羽さんが辺りを見渡しながら応答する。

『敵の反応は間違いなくその列車からだ。三人とも、離れすぎないように注意して進入してくれ。』

虎穴に入らずんば…しかし地の利は敵の方がある、か。まあ、モノレールならある程度とる作戦も予想できる。…つかシャドウに作戦練る頭があるのか？

「分かりました。」

「へへッ、腕が鳴るぜっつーか、ペルソナが鳴るぜ！」

順平がテンション高くモノレールを見る。

「じゃ、乗り込みますか！」

ゆかりも気合い十分だ。

俺はそんなものいらねえや。

岳羽さんが真っ先に乗車口へ続く足場に飛びつき、登っていく。しかし途中で止まり、スカートを片手で抑えた。

「…覗かないですよ。」

「へいへい、ノゾかねえつつの。……（ンフツ）。」
順平がすばやく視線を飛ばす。…ンフツって…。

「…ってか、見えたらしようがねーよ？」

にやけた順平が目を逸らした。その角度じゃ見えないんじゃないのか？

「…順平、ここに埋めていこうか。」

岳羽さんの目が据わっている。でもここ鉄骨だぞ…？

モノレール 最後尾車両

車内は暗く、棺のオブジェがぼつんと一つ立っていた。

「これ、人間…つか、乗客だよな？」

順平が当たり前の事を確認してくる。

そうか、こいつはつきりと見るのは今日が初めてか。

シューオー、バタン

乗車口の聞き慣れた開閉音。

「あつ！？」

ドアが全て閉じてしまった。…どうも今回のシャドウは頭があるらしいな。というか、動かそうと思えば動くんだな、機械。

『どうした、何があった！？』

音しか届かない桐条先輩が慌てたように通信してきた。

「それが、閉じ込められたみたいで…。」

『シャドウの仕業だな…。確実に、君らに気付いてるといふ事だ。何が来るか分からない。より一層、注意して進んでくれ！』

「りよ、了解です。」

岳羽さんの返事で通信が終わった。

モノレール内はいつも通りの広さしかない。当たり前だが。このような広さだと順平が一振りすることが精一杯だろう。つまり俺は接近戦ができない。

「…し、静かだな。」

「何か薄気味悪いね…。」

順平と岳羽さんがそれぞれの感想を漏らす。

影時間だから仕方ないと思うが。

シャドウを警戒しながらゆっくりと進む。

「あれ？シャドウいねえじゃん？んだよ。拍子抜けだよ…。」

そうして油断したところに奇襲、とかな？

その場合来るとすれば後ろからか？

モノレールは長いからな。前後で挟み撃ちしかないだろうが、それをされると逃げ場が無い為パニックを引き起こす可能性がある。

…面倒臭い。

更に進む。

ぽつりぽつりと一つの車両に最低一つの棺桶が乗っている。…シユ

ールな凶だな。

「なんか妙に静かだね…。」

響くのは自分達の靴音のみ。タルタロスを探索しているときは当たり前のような気がするが敵がいつ出て来るとも限らない、しかも今回は大型が相手だという状況がそう感じさせているのだろう。

車両の中程まで来たとき、突如上部からシャドウが出現した。

「うわっ!?!」

ひらひらと宙を漂うそれはどこかのお偉いさんの生首に仮面をつけたようだ。頭上に戴く冠の中には一冊の十字の描かれた本が浮き、時々回転している。

「出やがったなッ!」

順平が気合いを入れて大剣を構える。

しかしシャドウはスムーズな動きで前方の車両へ移動していった。

誘われて行った先で大量のシャドウによるリンチか挟み撃ちかはたまたその両方か…。

「ちよつ、コラツ!!！」

そして順平は見事に釣られている…。

『待てっ！敵の行動が妙だ。イヤな予感がする。』

「そんなっ！追っかけないと、逃がしちまうっスよ!?!」

…敵しか見てないらしい。

まあ、ブレインは俺か桐条先輩だろうから仕方ないと言えば仕方ない…か？

『…有里。現場の指揮は君だ。この状況…どう思っ?』

桐条先輩ですら判断しかねる状況か…。

まあ、一つの意見として聞いているだけだろうけど。

「追いかけるべきだ。」

『わざわざ姿をみせておいて、何故逃げる?動きが妙じゃないか?』

慎重に動いてくれ。』

現場の意見は却下かよ。

予想通りだけどさ。

「あんなのオレらで倒せんじゃん!てか、オレ一人だってやれるっつーの!」

順平は一人でシャドウを追って行った。

何だろう…ちよつと既視感^{デジャブ}?

「あ、コラ、順平ツ!?!」

「岳羽、後を追え。あいつを一人にさせるな!」

岳羽さんの背を押して促す。

「う、うん!!」

勢いに負けた岳羽さんも順平を追って前方へ行く。

『有里、後ろだ!!』

瞬時に後ろを向く。先ほど順平が追って行ったシャドウと同型のヤツが二体並んでいた。

一人ならば近接攻撃をしても誰の邪魔にもならないな。

「先輩、二人の事は頼みます。」
拳を握る。素手だが構わない。

『フウ…敵は火炎属性が弱点だ。』
無言で敵に殴り掛かる。

拳が当たるとすぐに距離を取る。今までいた場所に疾風が巻き起こつた。

微かに腕を掠めたが問題無い。

エアガンを出す。

上手くいく確証はないがやってみないことには始まらない。

エアガンを頭に突き付け、引き金を引く。

…。

…。

オルフェウス出ねえし！

《ガル》

「…っ!？」

すぐさまエアガンをポケットに入れ回避行動に移る。しかし間に合わずに疾風攻撃をまともに食らった。

鎌鼬で切られたように複数の切り傷ができる。

「ハハッ」

上着の内側から投擲用ナイフを取り出し投げ付ける。ほぼ同時に左腕の袖から鎖を飛ばす。

鎖は長さ三メートル程、先に直径三センチ程の鉄球と短い刃がついている。

敵は刃をすばやく回避するが鎖は生き物のように敵に巻き付く。そのままドアにたたき付け、ナイフを投げ付けた。

耐え切れずに消滅する。

斬撃をいれようとしてきた敵の攻撃を鎖で防御して敵を掴む。

片手で縦横無尽に振り回しながら手摺りにぶつけ、もう片方の手でエアガンに弾を込める。

仮面の空いている目の部分に銃口を向け、零距离で一気に全弾撃ち尽くした。

辺りに散らばった武器を回収して前を見る。

傷薬を使って傷を治した後、順平達の後を追う。

『有里。』

少しいらいらしたような通信が入る。

「処刑は勘弁して下さい。」

『何故二人を先行させた？』

現れたシャドウを倒しながら返答する。

「：罠であることは分かっています。先で大量のシャドウに待ち伏せされたら一人では対応できるとは思えない。しかし慎重にいつて挟み撃ちになっても逃げ場が無くパニックを起こすだけだ。それにここは狭い。複数が戦闘するには向かない。」

『しかし、一歩間違えば君が死んでいたかもしれないんだぞ。』

思わず笑いが零れる。

「クハツ：関係ないね。全員が死と隣り合わせの世界にいるんだ。」

「：誰ダツテ死ヌンダヨ？：それよりも、ペルソナ召喚の仕組みを簡単にお願いします。」

「：気にくわない、という空気がひしひしと伝わってきたが、桐条先輩は何も言わずに説明してくれた。」

『：銃を頭に当て引き金を引くという無意識下での恐怖に、立ち向かおうとする意志が影時間では明確な形ヘルソナとなって現れる。』

「：つまり死にたくないと思えばほんつと出て来るのか？」

「死ぬ恐怖に立ち向かう意志：ね。」

「つまりあのエアガンでは無意識下ですら恐怖を感じる事ができなかつたという事か？：ペルソナが出て行きたくないとか言っていたりしてな。ハハハざけんじゃねえ。」

岳羽さん達の背中が見えた。

「ヘルメス！アギ！！」

ちよつど順平が最後のシャドウを倒したところだった。

「…お疲れ様。」

「大丈夫？」

「大丈夫に決まってるんだろ！？」

声が裏返ってるよバカヤロ〜。

「つか、別に助けなんか…。」

「ちよつと、あんたねえ！」

岳羽さんの言葉は桐条先輩によって遮られる。

『おい、気をつける！』

いつになく緊迫した声だ。

『敵の動きが急に静まった。警戒を怠るな！』

次の案を考案中か？

ガタンッ

軽い振動と共にモノレールが動き出す。

…そこまでするか？

まあでもドアの開閉が出来たんだ。モノレールも動かして当然、か。

「おわっ…なんだよ！動かねんじゃなかったのかよ！？」

順平が軽くよろめきながら叫ぶ。

『どうやら、列車全体がシャドウに支配されてるらしいな…。』

冷静で微妙に曖昧な判断をありがとう。

「らしいって…ちよつと、大丈夫なんですか！？」

モノレールのスピードがあがる。

スピードホリックか何かか？安全運転でいいだろ別に。

「お、おい…ヤバくねえ？」

『マズい、このままスピードが落ちないと、数分で、一つ前の列車

に追突する！」

「追突！？なんなんですか、それ！？」

「列車同士がどーん。」

「いや、わかるから！」

「じゃあ聞くなよ。」

『いいか、落ち着いて聞くんた。さつきから先頭車両に強い反応を感じる。多分それが本体だ。行って倒し、列車を止めるんだ！』

いざ先頭車両へ、と駆け出そうとした時、前方にシャドウ出現。

「クッソ！何のアトラクションだよ、つたくー！！」

本当にな。

こんなアトラクションあつてたまるか。

『後八分だ！時間がない！走れ！』

三人でシャドウに突っ込んだ。

先頭車両直前まで来た。

途中に雑魚がいるわスピード上がるわで残り時間も三分程しかない。

『本体はこの中だ！準備はいいな？』

「大丈夫。」

即座に前の車両に続くドアを開けた。

……。

開けた先にあつた光景に一瞬、思考が停止した。

大型シャドウは確かにいた。両足を開いて座り、手を後ろに置いた上半身に何も付けていないツインテールの女性だ。右半分は黒、左半分は白く、胸にはBJと描かれている。そして背後に巻物を伸ばした髪のようなものが体とは色を反転させて宙を漂っていた。

…一瞬、左手が確かに疼いた。

「いた……！」

シャドウを見た順平も目を丸くしている。

「うつわ…すげー事になつてんな…。」

確かにM字開脚は凄い。でも俺は嫌いだな。

「…はしたない恰好。」

「…コイツが本体？」

「先はもう無いし、コイツで間違い無いよ！」

岳羽さんは気にしないのか。…同じ女性だからか？

『急ぐんだっ！』

桐条先輩の通信ではっと気付く。倒さないと死ぬんだった。

「先輩はアナライズをお願いします。テレットは前衛。岳羽さんは回復で。」

『任せておけ。』

「おう！」

「分かった！」

それぞれの返事を聞いて行動を開始した。

順平が大剣を振り回す。後ろから岳羽さんがペルソナを呼び出してガルを放つ。

『敵はプリーステス。光・闇無効の氷結反射だ。ブフ系は弾き返されるぞ！』

プリーステスは巻物のような髪を俺に向かって放つて来る。咄嗟に半身ずらす。

二の腕を掠つて後ろへ流れた。

「…髪は俺が抑える。」

ざっと数える。…ぎりぎりかもしれない。

「っしやー！！」

順平がヘルメスを呼び、斬撃を加える。

岳羽さんがイオを呼び、順平の回復をする。

「シッ…。」

俺は投擲用ナイフで辺りを漂う髪を壁に縫い付けた。

残り二分。

プリーステスは投げキッスをするような動作と共に仲間を二体召喚する。

「先輩、アナライズ。岳羽さん召喚されたヤツを攻撃。」
即座に指示を飛ばしながら考える。

ある程度ダメージを与えられてからの召喚はダメージを回復をするためだろう。恐らく二体呼び出したのは回復役を判らせないため。時間がないってのに…。

一度の回復で取り返しのつかないことになりかねない。

残り半教程の髪を抑える事を後回しにして召喚された敵の殲滅を優先する。

『敵、囁くティアラは氷結弱点だ!』

岳羽さんが右側の敵に矢を浴びせる。

俺は左側の敵を鎖で引き寄せ回し蹴りを叩き込む。

フオオオオオ…

冷気が辺りを占める。

《マハブフ》

冷気がそのまま氷となって襲い掛かってきた。

「うあっ…」

「きゃあっ!」

「イテエツ!」

三人共まともに受ける。

しかも俺凍った!?

身体が動かない。

他の二人は氷結にならなかつたらしい。

順平はプリーステスに、岳羽さんは囁くティアラに攻撃を入れる。

プリーステスはぐったりとして囁くティアラは消滅する。

『大分弱ってきたぞ。もう少しだ!』

残り一分。

俺が仕留めそこなったもう一体の囁くティアラが俺に対してプリンバを掛けてくる。

…って、ペルソナ呼び出せない俺に掛けても意味無いだろ…。効いてないしな。

氷結が解けた直後にシャドウを殴る。

囁くティアラは全て消滅した。

プリーステスの髪が順平を襲う。

何とか大剣で防いだ。

その際に岳羽さんがガルを入れ、俺がナイフを投げる。

…残り四十秒。

まだ消滅しない。

いい加減しつこすぎるぞ！

最期のあがきとでも言うようにブフを繰り出してくるが当たらない。

順平と岳羽さんははペルソナを呼び、俺は鎖を飛ばす。

プリーステスは漸く消滅した。

最期に目が合ったのは気のせいだな。

…残り三十秒。

「ギリギリ…セーフか？」

順平の言葉とは裏腹にモノレールは進み続ける。

「…ってオイ！止まんねえじゃんか！」

「そっか！ブレーキかかんないと、すぐには…！」

シャドウの最期の置き土産だった。

恐らく一度影時間で動き出した物は不変の理に則って動くのだから

う。

つまり、ブレーキをかけなければモノレールは止まらないのだ！

…残り十五秒。

『おい、どうした！？前の列車はすぐそこだぞ！』

多分今一番状況が分からずに焦っているであろう桐条先輩から通信が入る。

「うがー！こんなもんの運転なんて分かつかよ！」

順平の叫びには同感だがやらなければ死ぬだけだ！

「任せろ！」

順平の大剣を奪い、運転席に通じるドアを斬る。

残り十秒。

即座に運転手であろう棺桶を体当たりで端に寄せ、機器を見る。

見たこと無いはずだが、手は迷う事なくブレーキのバーを思いっきり引き、急ブレーキをかけた。

甲高い音と共にスピードが落ちていくが、前方には列車がもう随分と近くに見えている。

ブレーキだけじゃあ間に合わない！

左手の手袋を歯で噛んで強引に取る。

八秒。

…呼んでやろうじゃないかオルフェウス！

要は恐怖に立ち向かえばいいんだろ。

一瞬躊躇いながらも指先をぴったりとこめかみに当てる。

「さっさと出てこいオルフェウス！！」

自分から何かが溢れ出てくる感覚。

オルフェウスがモノレールの前に顕現する。

四。

「受け止める！」

オルフェウスは両足で踏ん張り、両手で受け止める。オルフェウスの感覚がダイレクトに俺に伝わる。

「ああああああ！！！」

全身で痛みが暴れる。

四肢が削られちぎれそうな痛みを意識が飛びそうになる度に痛みで強引に引き戻される。連動するようにオルフェウスが消えかけては復活を繰り返す。

二、一。

岳羽さんの悲鳴がこだました。

女教皇 中編（後書き）

とりあえずあのエアガンではペルソナは呼べないという事で。

次で満月シャドウ戦は終わりです。

女教皇 後編

前方をゆっくりと確認する。オルフェウスは既に消え、フロントガラス一杯に前の列車の最後尾車両が見える。車両同士の間はオルフェウスが何とか挟まる程度の隙間しかない。

それでもそれだけの間を残してモノレールは止まっていた。全身から力が抜ける。意識まで消えていきそうになるのを何とか保つ。

…生き残った。

床に落としていた手袋を拾い、即座に嵌める。

頭は通常の半分以下しか働かない。…早く帰ろう。

湊が運転席から出て来ると順平とゆかりはモノレールの床に尻餅をついていた。

「と…止まった?」

おそろおそろ、といった風に順平が呟く。

「止まってる…みたい。」

ゆかりも同じように答える。無事に生きている事に実感が持てない。

『おい、怪我はないか!?』

美鶴からの通信で一気に現実に引き戻される。

「い、一応大丈夫です。や、やば、あたしヒザ笑ってる…。」
手摺りを支えに立ったゆかりの足は、今になって微かに震えが来ていた。

「あーっ、あーもうっ、メチャメチャ、ヤな汗かいたっつーの…。」
順平はそれまでの恐怖を振り払うかのように叫びながら立ち上がる。
順平達のいる場所からも前の列車が見えたのだ。本気で「死ぬ」と

思う、その恐怖を感じないはずがない。

今更になって身体が反応したのは、ただ単に張り詰めた糸が切れただけだ。

美鶴は二人の声を聞いて、少なくとも最悪の結果を避ける事が出来た事にほっとする。

『フウ…無事らしいな。今回はバックアップが至らなかった。済まない…私の力不足だ。シャドウの反応はもう無い。よくやってくれた、安心して戻ってくれ。』
そして通信が切れる。

「…ってか、ブレーキよく分かったね？」

ゆかりの問いに湊はモノレールのドアを手動で開けながらなんでもないかのように平然と答える。

「テキトー。」

「テキトー!？」

驚きで順平の帽子が飛んだ。

「ああ…いや、もう何でも。」

順平は考えるのを諦める。

「つか、帰り、なんかくつてかねえ？安心したらハラ減ったよ。」

「

順平が湊の肩に腕をまわしながら言った。

湊はすぐにその腕から逃れ、モノレールから跳び降りる。

「…二人は、」

「うん？」

「何？」

湊は二人の視線から逃げるように顔を背ける。

「…二人は、何故指示に従った？」

モノレールから梯子を伝って降りてくるゆかりと順平が頭を傾げる。

「…いきなり何？従わないで欲しかったとでも言うの？」

「いや…。」

一度は和んだ空気が再び出撃前のように張り詰める。

順平は二人の様子を見て頭を掻く。

「えーっと？」

湊はゆっくりと息を吐き、ゆっくりと息を吸う。そして一度止め、ゆっくりと話し出す。

「…先日の俺の行動で、部内の空気が悪くなっていた。…説明を放棄した俺が悪いのは分かる。そして先程の。信頼関係が無いはずなのに、指示に従った。…それが、分からない。」

二人とも線路上に降りた。ゆかりは湊をしっかりと見る。

「有里君は、指示に従わなかったらどうしてたの？」

「…。」

湊は応えない。その表情は髪で隠れてよく見えない。

「こつちを見なさいよ!!!」

ゆかりは湊の肩を押し、服を掴んで強引に視線を合わせる。

「私達だって命を賭けてるの！指示に従うのは有里君の指示に従って行動する事が一番だっと思うからよ。それが信頼じゃないの！？有里君の言う信頼って何よ!!!」

正面から見た湊は顔だけでは無く瞳にすら何の表情も映していなかった。

「…まるで人形だ。」

「…湊。オマエ、信頼して欲しーのか？」

順平の言葉にゆっくりと首を振る。

「…俺、は…。」

ゆかりの手を服から引きはがす。

「…有里、済まない。聞いていた。」

美鶴が通信で割って入る。

「…有里。我々は君が何を言おうと仲間だ。その事実が変わらない。私達は君を信頼している。先日の話は処分を下した時点で終わっているのだ。反省したのなら、次に繋げればいい。もうこの件については、誰も君を責めない。」

「…分からない。」

湊はぽつりと眩く。

「…何でそんなに、簡単に…。」

「だー!!!」

順平が叫んだ。

「めんどくせえ!“仲間だから”これでいいだろ!あんまちっさい
事気にしてつとハゲツぞ!!!」

「順平みたいに?」

「ゆかりっチ、これはポーズ!ハゲてねーから!!!」

湊は順平とゆかりのやり取りをただ見ていた。

「…眩しいな。」

口の中の眩きは誰にも聞こえる事なく消えた。

限界は唐突に来た。

脚の力が抜け、身体を支えられない。

トサツ

人が倒れたにしては随分と軽い音がした。

その音を聞いた岳羽さんと順平が慌てて俺を掴み、揺すってくる。

彼等が叫んでいるが、断片的にしか判らない。

少ない力をかき集め、声を発する。

「…病院には…連れていくな…。」

二人の動きが止まる。

「…なにがあってもだ…。絶対に…。」

段々と意識が保てなくなってくる。

最期に感じた暖かいモノは何だったのか…。

「先輩！有里君が！！」

ゆかりは大声で叫ぶ。向こうでは順平が湊の名前を呼びながら揺すっている。聞こえてくる声に美鶴も危機を感じ取った。

『岳羽、何があった！？』

「有里君が倒れました！ど、どどどうしたら！？」

ゆかりはパニックになり腕が何をすればいいか分からずに宙をさまよう。

『落ち着け。とりあえず戻って来い。影時間が終わり次第、病院に搬送する。』

二人が漸く落ち着き、お互いに頷き合う。

順平が湊を背負おうとした時、湊の消えそうな小さな声が聞こえた。

「…病院には…連れていくな…。」

二人の動きが止まる。

「…なにかあってもだ…。絶対に…。」

「…と、とにかく急ぐわよ！」

「お、おう。」

ゆかりの声を聞き、順平は湊を背負う。

ぐったりと脱力した体は、予想に反して軽かった。

…こんな小さな体で、倒れるまで無茶をして、一体コイツは何がしたかったのか。

「早く！！」

二人は路線を走り始めた。

作戦室

明彦は遅れて来た理事長と共に美鶴からの連絡を待っていた。

ピーンという電子音の後に美鶴と通信が繋がる。

「俺だ。」

明彦が返事をする、美鶴も状況を説明する。

『こちら現場だ。たった今、全て片付いた。モノレールにも目立つ

た被害はない。ただ：有里が倒れてな。車を頼む。』

「病院に連れていくべきじゃないのか？」

救急車を呼ぼうとして止められた明彦が反論する。

『私もそう思うのだが：本人が拒絶した。何があっても絶対に駄目だそうだ。』

それを聞いた明彦は軽く眉間にシワを寄せた。

そんな明彦を置いて理事長が話を進める。

「分かった、手配しよう。ご苦労様、桐条君。やー、列車を乗っ取られたと聞いた時は正直どうなるかと思っただけど、上出来だよ。これなら明日の朝刊にヘンな大見出しが出るような事は無くて済むね。」

作戦室に来ていた理事長が称賛する。

『彼等がよくやってくれました。短期間で驚くほど成長しています。』

「しかし、シャドウの様子：ただ事じゃないですね。モノレールを乗っ取るなんて、調子に乗りすぎている。」

明彦が拳に力を入れ、虚空を睨む。

「こちらでも調べてるよ。」

『ついに：始まったという事なんでしょうか？』美鶴の問いの意味を理解した理事長は顎に手をあてて考える。

「うーん：まだ早計には言えないけどね…。ま、とにかく、まずは現れるきっかけを突き止めない事にはね。いつもこんな土壇場まで分らないのはどうにもマズい。」

『私にもつと力があれば、皆の負担を軽く出来るんですが…。』

美鶴の申し訳なさそうな声に理事長は優しく声を掛ける。

「気にしないでいいさ。君はよくやってってくれる。そんな事よりね：真田君さー：なんか、飲みモノ持ってない？」

椅子の背もたれに身体を預けながら理事長は明彦を見る。

「は…？と言うか幾月さん、今日は何だか疲れてませんか？まさか、表に停めてあった自転車…」明彦の中で何かが繋がった。

「明日、いや、明後日あたり……筋肉痛かな、こりゃ。」
「やれやれ、と呟く理事長に明彦は軽い同情の目を向けた。」

ブリーステス(前書き)

彼女は甘党のようです。

ブリーステス

私が特別課外活動部、通称S・E・E・Sに入部して二週間程経った。

現場リーダーを請け負い、多くの人とコミュニティを築いたり、毎日忙しい。

あの日、真田先輩に助けられて(？)気を失い、結局起きたのは一週間後だった。

起きた時は本当にショックだった。

だって一週間だよー・週・間！！

青春という一ページは短いつてのに一週間も寝て過ごすなんて…。

イゴールの鼻叩き折ろうかとか考えたよマジで！

…テオドアなるイケメンドアボーイに止められたから仕方なく我慢したけどさ。

お兄ちゃんについての情報は全く見つからない。

私の知っているお兄ちゃんの情報が少ないと言うこともある。

考えてみると名前も知らなかった。覚えているのは“ゼロ”“天然物”“出来損ない”そして“00”の印。ああ見つからねえええ！！！！

その苛々はシャドウにあたる事で発散した。

だって見つからないんだもん！文句はお兄ちゃんに言ってよ！！！！

最近はお兄ちゃんも増えて来た。

影人間を増やさないために活動しているのに、これでは一体なんの為に活動しているのか分からない。

…ストレスに堪えられなくなったらイゴールの鼻を叩き折ってテオ

の帽子をひっくり返してやる！

今日は珍しく夜を外食で済ませた。

はがくれの特製がうまくてうまくて…。またよだれ出そう。

音楽を聞きながら上を向いて歩く。

今日は満月だ。

満月は嫌いだ。見ると心が落ち着かない。

早くしなければと焦りだけが先走る。

「負つけないぞう！！」

空に向かって叫んだ。

「今日はタルタロスに行かないので、思う存分勉強するがよいさあ
！」

寮生全員に伝えると、順平が文句を言ってきた。文句は勉強出来て
からいいやがれい！

自室で勉強をする。

私は天才じゃないから勉強はしつかりする。

これも青春！つてね。

いや、ただ単に補講なんか受けたくないってだけだけど。順平と同
列は…ねえ。

明日が休日だったので、夜の一時まで勉強を行った。

その間に呼び出しとかは無かった。

…無かった…筈なんだけど…。

朝

少し遅く起きた私は階段を下りていると、二階で順平に会った。

順平は何故かやけに疲れているように見える。

「タルタロス行ってないのに疲労状態はないでしょ。何やってたんだか。」

「おっはよー、順平。どしたの？疲れてるけど。」

順平は私を見て、ニコリともしなかった。相当な疲れらしい。ツカレトレールでもあげるべき？

「何でって…昨日はデカイシャドウが出たじゃんか…。」

「…え？」

大きなシャドウ？昨日？

え？昨日はタルタロスに行っていないのに。影時間内は誰も廊下に出てない筈だし、警報も鳴ってない。美鶴先輩から集合もかからなかった。

…順平は一体何の話をしているの？

「モノレールを支配したデカイシャドウを倒して湊がギリギリでポ一ソーしたモノレール止めたから助かったんじゃない。その後線路を走って帰れば流石に疲れるっての…。」

湊？それは誰？この寮にはそんな人はいないし、私は知らない。

“それ”を私は知らない！！

ラウンジに降りると、ゆかりがいた。ゆかりも疲れているらしく、顔色が良くない。

「…ゆかり、大丈夫？」

ゆかりはゆっくりとこつちを見た。

「大丈夫に見える？ってか何であんたは元気なのよ…。昨日はあんなに大変だったのに…。」

ゆかりも昨日を体験してる。出撃するなら美鶴先輩がナビをしただろつからきつと美鶴先輩も体験してる。

…多分、私だけが蚊帳の外。

「…昨日って、皆寝てたんじゃないの？大きなシャドウって何？モ

ノレールで何かしたの?…湊つて、誰?

ゆかりと順平がほぼ同時に目が点になる。

「え…本気で言ってるの?」

二人の軽蔑するような表情に全身が冷える。

「…つとが、冗談言ってみたりしてー。」

必死に笑顔を取り繕った。

二人が余計に疲れたような表情をする。

疲れていたからか、何も突っ込まれなかった。

「ちよつと驚かせないでよ。びつくりしたあ。」

「ホントだぜ…。」

本当は冗談じゃなくて本気だった。

全員が知っていて当たり前前の事。でも私は知らない。大きなシャド

ウは門番シャドウみたいなの?湊は?君は、一体誰なの?

頭の中に疑問が渦巻く。

「…うううあああああ!」

思いっきり叫ぶ。

「あああベルベツトルーム行って来る!!ついでに一人カラオケし

てきてやるううう!!!」

寮を走つて飛び出した。

「…ベルベツトルームって、何?」

「え、女の子が一人カラオケって…。」

ドアは勢いが良すぎて何度かバウンドしながら閉まった。

ベルベツトルーム

寮を飛び出してモノレールを使い、ポロニアンモールからベルベツトルームに走り込む…イメージでドアを開ける。

ベルベツトルームにはいつものようにイゴールとテオがいた。

「イゴール…。テーオー…。」

机に顎を乗せて両手を伸ばす。

「紅茶よろしくー。激甘で。」

テオが一礼して退室する。

「…どうされましたかな、お客人。」

「んー…？…イゴールはさ、昨日の事知ってるの？」

「…はて、昨日の事、とは？」

イゴールは知らないのか、それともそのふりをしているだけか。

…分からぬ。

「…どうぞ。」

テオが紅茶を手に帰って来た。

前に置かれた紅茶を一口飲む。

…うむ、甘い。

糖分を摂取したので標的をテオに変える。

「テオは知ってる？昨日起こった事。大きなシャドウにモノレール、そして…湊。」

テオが微かに瞼を震わせたのが見えた。

テオは知っている！

「…知ってるのね、テオ。」

確信に満ちた声で言うと、テオは困ったような顔をした。

テオの様子を見たイゴールが口を挟む。

「大型シャドウもその方も、存在はしておられるのですが、今はまだ触れる事のできない存在モ存在なのです。」

机を叩いて立ち上がる。

「ゆかり達は大型に会って、その人に助けられてる。会えない筈ない！」

零れるギリギリで紅茶が踏み止まる。

イゴールが落ち着いた動きで指先を揃えた右手を出し、椅子に座るように促した。

…気に食わない。

でもいつまでも立っているわけにはいかず、仕方なく座る。

ティーカップを両手で持ち、一口飲む。紅茶の甘さに少し落ち着く。

「私一人だけ、何も知らない。大型シャドウも、湊も…お兄ちゃんも…。一人だけ、蚊帳の外。」

考えるだけで余計なモノまで出てきそうになる。

…別にゴミが目に入っただけだし。

「…主。」

テオがイゴールに何か言っているらしいが知らない。

私は糖分補給するんだよう。

別に太る前に頭使うからいいもん。

「…エリザベス！」

イゴールが呼ぶと、間を置かずして青い服を着た銀髪のエレベーターガールが現れる。

「エリザベスでございます。」

一礼したエリザベスにつられてこちらも礼をする。

「…例の鏡を。」

「畏まりました。」

エリザベスはポケットから、一枚の小さな鏡を取り出す。

細かな装飾の施された高そうなその鏡は昔の中国を思い起こさせるようなデザインだ。

「…かけかがみ影鏡、でございます。」

「…かけ、かがみ？」

どこからどう見ても普通の鏡にしか見えない。

「影鏡は、窓でございます。その方に触れることは出来ませんが、御姿を拝見する程度であれば問題ありません。」

「…通信機みたいな物？」

意味が分からなかったから身近にあるもので例えてみる。

エリザベスはそれに意味深な笑みを浮かべて言う。

「いえ…。どちらかと言えば、盗撮…でしょうか。」

とうさ…盗撮！？犯罪じゃん！！

「現在から過去まで、あったことを見る事が出来ます。」
鏡を手取る。

影鏡は簡単に掌に収まってしまふ。

「ですが、一つだけ。この鏡を使うという事は二つの境界を曖昧にする事になります。どちらにどんな影響があるかは我々にも予測しかねます。きっとあの方はそれを望まれないでしょう。それでも使われますか？」

ぬはっ！…何を言っているのか分からぬえい…。

「あの…具体的…と、いいますか…馬鹿にも分かるようにお願いします。」

エリザベスはその答えを予測していなかったのか、一瞬、驚いた顔をした。

どうせ馬鹿だよこんチクシヨー！！

「…最悪の場合は生きているモノ全てが死に絶えるでしょう。貴女の背負うモノが増えるだけかもしれませんし、何も起こらないかもしれませぬ。」

…何という曖昧さ。そして酷い時とそうでない時の差が激し過ぎる。良かったら何も起きなくて悪かったら全滅って…どんな賭けよ。

テオが本を持つ手に力を込めて声を発する。

「姉上！意地悪過ぎます！！」

エリザベスはそんなテオを平然と見る。

「何がいいたいの？テオ。」

テオは一瞬、怯んだがすぐに反論する。

…テオ頑張れ。

「…影鏡はそもそも悪影響の出る可能性が低い筈です。最悪のケースになる可能性はそれこそほぼゼロです。」

「…分からないかしら？テオ。」

エリザベスの雰囲気グッと変わり、テオが青くなる。

辺りの空気が確かな重みを持つ。体が固定されるような重圧。

指一本、瞼一つ動かせない。

…この人、強い。

「私が問うているのはこの方の覚悟。覚悟無くして影鏡を扱うのは危険なのです。安易な操作ミスで世界を無にされたらどう責任を負うつもりですか？テオ。」

…鏡一枚で滅びる世界ってなんか理不尽というか何というか…。

鏡一枚に持たせる力じゃないよね。

でも、そう言ったからって鏡が世界を滅ぼし兼ねない力を持つことには変わり無い。

だからと言って、簡単に諦める事なんか出来ないししたくない。

テオもエリザベスの言葉には勝てないらしく、黙ってしまった。

…覚悟を決めるしか、ないよね。

渴いた唇を舐め、何とか動かして声にする。

「…もういいわ、テオ。」

真っ正面からエリザベスの視線を受け止める。

「エリザベス、あの方が誰を指すのか分からないけど、私には関係ないわ。私は私の為に、今するべき事をするだけよ。結果世界が滅びれば、それはそうなる運命だった事。私は、たかが世界の二つや二つ、滅びるからって諦めたりはしない。」

エリザベスの視線が鋭さを増す。

視線だけで殺されそうだ。

しかし引くわけにはいかない。私はまだ、するべき事がある！！

数秒とも数十分ともとれる睨み合い。

ベルベツトルーム内に流れる曲が意識から消え、呼吸すら躊躇われるほどの緊迫した重い静寂が辺りを満たす。

不意にエリザベスが笑った。

圧力が嘘のようにフツと消える。

「…ご安心下さい。嘘でございます。」

……。

今、確実にベルベツトルームの時が止まった。

もとからここの時間はあつてないようなものだけだ…。

「…えーつと？」

エリザベスは言葉を続ける。

「ですから、嘘です。鏡にそれほどの力なんてあるわけが無いでしょう？これはただの窓。それ以上でもそれ以下でもございません。」
体から力が抜けた。

「先程申し上げた悪影響は他の要因が主でございます。確かに鏡を起因とするものが無いとは言い切れません。それでも最悪の事態に
ならない筈です。こちらからは見ることにしか出来ません。」

「…姉上、私にも嘘をついていたのですか！？」

必死に言い寄るテオを無視してエリザベスは使用方法を告げる。

「…何時、何処で起きた事であるか等をはっきりと影鏡に告げるの
です。後は勝手に再生されます。それではごゆっくりどうぞ。」

エリザベスは掴んだテオと共に退室していった。

「…昨日の影時間に、モノレールで起きた大型シャドウ戦を見せて
」

影鏡の表面が水滴を落としたかのように波打ち、黒く染まる。

次に映ったのは影時間中のモノレール内部だった。

順平とゆかり、そして見たことのあるような青い髪の少年が、大型
シャドウと戦闘していた。

よく見ると青い少年は他の二人よりも軽装だった。

「その青い方が、有里湊様でございます。」

「…彼が…。」

イゴールからも見えているのか、彼が湊である事を教えてくれた。
映像だけでなく、音も拾うのか、ベルベツトルーム内を流れる緩やかな曲には似合わない激しい戦闘音が響く。

今まで戦った敵よりも強い筈だが、そんな相手に臆する事なく彼等はダメージを与えていく。

ほんの数分で彼等は大型シャドウを倒した。

鏡が元のように戻り、私の姿を映す。

それと同時にテオが少しボロボロになって帰ってきた。

「…テオ、大丈夫？」

「…私は大丈夫でございます。」

とてもそうには見えないけど、ここはそっとしておいてあげるべきかな？

「…とりあえず、帰るわ。影鏡はどうしたらいいの？」

「それは既に貴女のものでございます。ただし、使いすぎにはご注意下さい。」

「はい。」

鏡をポケットに入れた。

「じゃ、一人カラオケする予定だから帰るわ！」

椅子から勢いよく立ち上がり、ベルベツトルームを出た。

カラオケに入り、曲を入れずに影鏡に向かった。

一人で試したい事があった。

それは、お兄ちゃんの事。

これだけは、例えばイゴールやテオにも見せたくなかった。

エリザベスはこの鏡を使うという事は二つの境界を曖昧にする事になると言った。…嘘だと言っていたけど。

恐らくあの鏡は何かの隔たりの向こう側を覗く物。それも完全に違う別世界ではなく…そう、何かがズレているだけの、同じ世界を覗く物だと思う。平行世界がないとは言い切れ無いけど、順平やゆかりがいたから多分そうだ。二人は昨日タルタロスに行っていない筈なのに疲労状態になっていた。関係しない筈がない。

有り得ないと思う。馬鹿馬鹿しい話だ……て。……普通に考えたら信じられないに決まってる。……でも、もしかしたら、お兄ちゃんは向こうにいるんじゃないかなって考えないでもない。

だって、お兄ちゃんがいなくなった時の状況が普通じゃなかったから。

可能性があるのなら、確かめる他に術は無い。

「……影鏡、今のお兄ちゃんを映して。」

鏡が反応する。

鏡が映した場所は寮の中、二階の自販機前のソファーにさつき見た青い髪の少年がいた。

……有里湊!?

え?彼がお兄ちゃん!?

だって、ええ!お兄ちゃんだよ!?!私のお兄ちゃんだよ!?!

混乱して固まった私を無視して映像が進む。

湊が軽くため息を付き、長い前髪をかきあげた。

視線を動かせなかった私は彼の目尻の下に小さく00と黒い印が浮かんでるのを見た。

「……お兄ちゃんだ……。」

記憶の中のお兄ちゃんはこんなに暗そうな人じゃないけど、そこにその印を持っているのを私はお兄ちゃんしか知らない。

自然と涙が溢れてきた。

「……お兄ちゃん……生きてた……。生きてた……!」

堪える事なんか出来なかった。

涙で前が見えないまま誓う。

絶対にお兄ちゃんに会ってみせるわ!

マイクを使って思いつきり叫んだ。

ブリーステス（後書き）

次も主人公はあまり出ません。

刻、少し遡りて

一人の少女が去った後のベルベットルーム。

テオドアは少し乱れた服を着替えに私室へ戻り、イゴールも席を外している。エリザベスは部屋のいつもの場所に立っていた。

一人の来客を迎えるために。

それはお客人の座る椅子の後ろ、背もたれの上に組んだ腕を乗せて体重を掛けるような態勢で現れる。

《久しぶり。》

彼の挨拶に、エリザベスは冷たい目を向けた。

「どのようなご用件でしょうか？」

《定型文なんかいららない。俺はあいつじゃないからね。》

「同じでしょうか？」

“彼”は道化じみた動きで右手を頬に添える。

《我は汝：汝は我：？》そして笑みを浮かべる。

《俺はあいつであいつは俺だけど、俺とあいつは同義じゃない。：ああ、“有里湊を構成するモノ”という点では同じかな？何にしても自由に動けるようにしたのはリジーだよ？》

わざとらしい台詞にエリザベスは目を細める。

「私が自由を与えたのは一部のみでございます。：何故、あの時召喚に応じなかったのですか？」

驚いたのか一度目を見開いたオルフェウスは声を出して笑う。

「：召喚を拒絶はできない筈ですか？」

《：召喚器を使つての召喚については拒絶も何も無いね。“俺”が介入出来る余地なんて全くないし。でもあの時は召喚器じゃ無かつた。唯のエアガン。》

ばーん、と銃の形にした左手をエリザベスに向けて撃つ。

《それなら、俺は拒絶することが出来る。あんな物で喚ばれたくは

ないかな。》

エリザベスは溜息を一つついた。

「…それはそうと、湊様の下にいらなくて良いのですか？オルフェウス。」

オルフェウスは軽く頭を掻いた。

《うーん…そう言われてもな…。あいつ今死んでるから暇なんだよ。》

エリザベスが軽く目を見開く。

ベルベットルームに来たお客人が契約を果たすことなく亡くなる時はイゴールがこの部屋に呼ぶ。当然横にはエリザベスも控えるのだ。今回はそのような事は一切していない。

何よりオルフェウスも消滅するはずなのだ。

それなのに亡くなったとはどういう事なのか。

「…亡くなられた、とは？」

《ん？ああ、心配せんでもある程度すれば復活するから大丈夫。》
何でもないかのように答えるオルフェウスを見たエリザベスは手にしていた本をにぎりしめる。

人間は、いや、生きているもの全てにおいて、一度死んだものが生き返る等は有り得ない。

だからエリザベスは純粹に問う。

「どういう意味でございますか？」

オルフェウスは見せ付けるようにゆっくりと左手をこめかみ付近まで持ち上げる。左手は銃を形作り、じわりと黒く染まっっていく。

《大型シャドウ戦、最後のモノレールを止めるとき。リジーも知っているよね？》

エリザベスは肯定も否定もしない。ただ、オルフェウスが次に出る行動を静かに観察する。

《BANG!》

オルフェウスはゆっくりと頭を撃ち抜く仕種をした。

《頭を撃ったから死んだのさ。》

さも当然と答えるオルフェウスにエリザベスは顔をしかめる。そんなエリザベスを見たオルフェウスはカラカラと笑った。

《十年前から繰り返してきた儀式めいた死。》
左手を頭上に掲げる。

《この力、授かった時から度々起こる“現象”。この力によってもたらされた死であれば時間に差はあれど必ず生き返る。》

でたらめすぎるよねー、と言いながら左手をくるくると回す。手は元の白色に戻った。

「十年前、といいますと……」

考える仕種をしたエリザベスを見ながら、あげていた手を下げ、豎琴に見える背もたれ部分の弦を優しく撫でる。

《不完全なる死の降臨。全ては偶然にして必然。複数の意志と一つの計算が擦れ違い、故に一つが潰れただけの話さ。》

オルフェウスは軽い溜息をついた。

《全く迷惑な話だよ。そつちでどうにかすればいいのにわざわざ巻き込むなんてさ。》

いやだいやだ、と笑いながら呟いた。

「……貴方は知っていますのですか？オルフェウス。」

《ん、何の話？》

エリザベスの真剣な問いを、オルフェウスは本気とは思えないほどに軽い態度でに答える。

音のしない豎琴を弾き続けるオルフェウスにエリザベスは嫌悪をあらわにした。

「いい加減にしなさい。ただのペルソナに戻すわよ。」

《それは勘弁。》

オルフェウスは再び腕を組み、その上に頭を乗せて追憶するように虚空を眺める。

《フム……そうだね。湊が経験した事については全て覚えているよ。例えばあいつが覚えてなくてもね。》

オルフェウスがエリザベスを見る。今までの人をからかうような冗

談半分の目ではなく、真剣みの帯びた目だった。

《…リジー。俺はあいつ自身を殺す為に生まれたペルソナだ。生きる意志があったが為に得てしまった力が、あいつを苦しめる。…俺の豎琴じゃあ、あいつに音が届かないんだ。》
ゆっくりとエリザベスに向けて手を伸ばす。

《リジー。出来る限りでいい。君は彼の味方であってほしい。》

エリザベスはゆっくりとオルフェウスに近づく。

オルフェウスの伸ばした手を掴み、そのまま捻り上げた。

《痛い痛い。》

大して痛くないようにしか聞こえない声で言いながらオルフェウスが椅子を叩く。

「貴方に言われなくても。私達は湊様のお手伝いをするためにいるのですから当然です。」

つんとした態度で言い切ったエリザベスにオルフェウスは軽く笑った。

運動部入部

程よく温い湯舟から強引に引き上げられるような感覚。

幾度となく体験したその感覚は目覚めの前兆。

まだまどろみの中にいたいという思いを無視して意識は表面へと浮上していった。

昨日は昼まで死んでいた。

目が覚めたら病室 ということもなく、自室のベッドの上できちんと掛け布団が掛かっていた。

目覚めてすぐは体が怠く、頭は鈍い痛みと靄がかかり、まともな思考が全く期待出来ない。全身が鉛で構築されているようだった。

倒れた後、恐らく順平辺りが運んだんだろう。

…真田先輩は骨がイツてるし、寮にいたからな。
気が向いたらお礼でも言ってみるか。

校門前

大型シャドウ戦が挟まると学校が凄く久しぶりに感じる気がする。音楽を聴きながらぼーっと歩いていると、順平が話しかけて来た。

…もしかして同じモノレールに乗っていたのか？

「オーッス。今日も眠いよなー…。」

眠気が移りそうだからこっちに来るな。

「しっかし、おとといは凄かったよなー。」

順平はまだ勝利の余韻に浸っているらしい。

「あの時は助かった。運んだのはテレットだろ？」

「テレット言うな。けど、あんだだけのスリルって今まで味わったことなかったよな。なんか、面白くなってきたと思わねえ？」

「…思わない。」

命を懸けた戦いを面白いつて言うのは戦闘狂じゃないのか？

「バツ力だなー、あんなことできるのも力が覚醒したおかげだろー？」

おかげ？覚醒したせいで戦わされているんじゃないか。馬鹿はどっちだよ？

「…それに実際、勝っちゃって、事故の被害を防いだわけだし？」
代わりに俺が一回死んだがな。

「…すげーよな、オレ達！」

半ば叫ぶような音量で言う順平。

…順平、辺りの視線に気付け。イタイ目で見られてるから。

授業中、嫌味田ならぬ江古田先生に来週の月曜から中間試験だと知らされた。

タルタロスを少し減らして勉強させるか？

余り上手くいきそうにないな。特に順平。

何かやる気を出させるための何かを考えて置くべきかもしれない。

…何で他人の勉強の事まで考えているんだ俺は。

順平が赤点でも俺には何の影響もないのに。

放課後

神社にいるあの子と遊びに行こう、等と考えながら帰り支度をすませて帰ろうとした時、順平、岳羽さん兩名に腕を掴まれて拉致されました。

ケーサツ呼ぶぞこのやろつ。

たどり着いたのは体育館。ただ今剣道部が練習中だ。

「宮本君！」

「みやー!!」

岳羽さんと順平が叫ぶと、剣道部員の一人が駆け寄って来た。…部員少ないな。

「宮本君、はい!」

岳羽さん達は「はい!」の掛け声と共に俺を差し出す。

「…どうも。」

「新しい剣道部員、連れて来た。」

…予測はしていたけど強引過ぎるよー。せめて説明して下さい。

「流石だな!」

あーあ、相手に乗っちゃった。

「…俺、剣道したことないけど。」

二人の視線が刺さった。

「…嘘だろ。」

「…嘘だね。」

オイ!

「…というわけでよろしく!」

…無視なのね。

やるしかないのか?

「よし、じゃあ早速顧問に…!」

宮本が伸ばしてきた手を弾く。

「…だから、やるって言うてないし。…何よりも、説明しろ。」

宮本はぼかんとした表情をした。

岳羽さんが口を挟む。

「有里君も知ってるでしょ?運動部の追加募集。」

頷く。何かあったな。

「…で、剣道部は人が本っ当に足らなくて、このままだと大会の団体戦にも出られないんだって。」

別に個人戦オンリーでいけばいいいだろ俺を巻き込むな。

「運動部繋がりで相談されて、剣道なら…ってね?」

可愛く言えば言いつてもものじゃない。

「…これは？」

これと指差された順平はすぐにその手を叩いた。

「これじゃねえよ！」

「これに礼儀なんて出来るわけないでしょ！」

「ちよつ、ゆかりつちまで…」

一人軽く傷ついた順平を放置する。

「…面倒だな。」

溜息をついた。

「…さつきも言ったが、俺は剣道なんかした事も無い素人だ。」

「嘘だろ？あんなに振り回してた癖に。」

タルタロス内部での事を言っているのだと即座に判断し、順平の額に手刀を叩き込む。

「…あれは我流。型とか知らない。」

「何かしていたのか！？それならなおの事入ってくれ！」

彼の輝く瞳にたじろぐ。

「…俺は何も悪いことしていないのに。」

「いや…えつと…。俺、ルールとか知らないし…？」

「安心しろ！剣道初心者でもしっかり教えてやる！」

うん、もう分かんない。

「ハア…どうでもいい。」

それを聞いた宮本は俺を掴んで走っていった。

…剣道部に入ったからといって多分マイナスに働く事はないだろう。

コミュが発生してペルソナも育ちやすくなるだろうし、多少なりと身体的に鍛える事も出来る。

…大丈夫。何とか出来る筈だ。

そう自分に言い聞かせた。

「と、言うわけで、今日から我が剣道部に入部する、有里湊だ。」

顧問である物理の竹ノ塚先生が俺を紹介する。

「こいつはマネージャーの西脇。」

先生は近くにいた唯一の女子を見て言った。

少し短い黒髪を片側に一つに結び、外を走り回るのか肌も少し黒い彼女はタフな印象を受けた。

潰れそうなこんな部活でもマネージャーはいるのか…。

「西脇結子、よろしく。二年でしょ？タメなんだし、“結子”って呼んでくれていいから。」

結子の自己紹介を聞き、軽く頷く。

タメって何だ。

「あと…おい！宮本！」竹ノ塚が宮本を呼ぶ。

「うっす！」

「うちの部の次期主将最有力候補だ。大会で結果出してる。腕は信じていい。お前、同じクラスなんだろ？面倒みてやれ。後学も兼ねてな。」

「いいっすよ。」

竹ノ塚の言葉に宮本が軽く返事をする。

意外と強かったのかこいつ。

宮本がこっちに向き直る。

「転校早々、岳羽をオトしたって…お前だろ？プチ有名人。さつき会ったが宮本一志だ。教室が一緒なんだ、顔くらいは知ってんだろ？」

やはり噂は流れていたらしい。

しかし、オトしたとは…。何もしてないんだが…。

「いや全く。」

…ってか同じクラスだったのか。

「お前なあ、軽くプライドが傷ついたぜ。けっこ顔さされるタイプだったのによ。」

つまり顔が濃いと…？

後プライド小さ…？

「途中入部だからって甘く見ないぜ。ビシビシいくから、そのつもりでな！」

宮本はやる気をだしている。…だから俺はルールすら知らないぞ？ まあでも一応剣道部に入り、部員達と知り合いになった。

頭の中で例の声が響く。

…ほう、戦車コミュか。

硬くて熱そうだな。

剣道部員が練習に戻っていく中、結子が声を掛けてくる。

「初日なんだし、今日は適当に見学して帰りなよ。活動日は月・火・木・金ね。試験前は数日は活動停止になるから覚えておいて。それじゃ、次来る時までには胴着用意しとくからさ。」
すらすらと言われた事を半分聞き流し、軽く頷く。

こちらにその気が無くてもコミュニケーションが発生する。

発生した以上はコミュを進めていくつもりだが、こんな仮面をつけて築いたコミュに何の価値があるのだろうか。

何より俺はコミュに堪えられるのか…？

この不安が消えることは無いような気がした。

提案

巖戸台商店街

巖戸台商店街はさして長さは無いが、その分高さがある。

一階にはタコ焼き屋オクトパシーや本の虫、二階には鍋島ラーメン・はがくれ、三階には漫画喫茶といった様々な店があるのだ。

今日は大型戦前に荒垣さんと半ば強引に取り付けた約束を果たすため、はがくれ前で待っていた。

部活をしてからなので空は陽が落ちてもう暗い。

通路端の鉄柵に体重を掛けながら天井を見ていると、螺旋階段の方からいつも通りニット帽にコート姿の荒垣さんがやってきた。

「悪い、遅れた。」

「…大丈夫です。」

「…行くぞ。」

二人ではがくれに入った。

二人でカウンター席に陣取り、特製を二つ頼んだ。
ラーメンを待つ間に荒垣さんがこの前話した事について質問してくる。

「その後はどうだ？」

「…小康状態です。」

「…そうか。」

聞いてきた割にはさほど興味の無かったような返事が返ってきた。
あまり待たないうちに注文した特製ラーメンが出て来る。

二人揃って麺を啜った。

「…うん、相変わらずうまひ。」

「…ガキさん暑くないんですか？」

コート着たままラーメンを食べるとか…。

「…つるせえ。」
すみません。」

会話出来なかつたので無言でラーメンを啜る。
…うまひ。

会計を済ませて店を出る。

荒垣さんは後輩に奢らせてたまるか、と二人分払っていた。
いや、確かに予想はしてたけどさ…もういいや、うん。

「…ごちそうさまでした。」

「気にするな。…少し歩くか？」

頷き、荒垣さんの少し後ろを歩く。

…何だこのデートっぽいやり取り。

数分歩くと多かつた人通りも少なくなり、人っ子一人いなくなる。
やがて着いたのは長鳴神社だった。鳥居を潜り石段を登る。境内には遊具も複数あるが、流石に暗くなると子供も家に帰ったのかここには誰も居ない。

荒垣さんは参拝した後に近くのベンチに座る。

俺はその隣に座った。

靴を脱いで両足をベンチの上に持ってきた時、荒垣さんが口を開いた。

「…どういっつもりだ？」

「…何がですか？」

体育座りをして膝の上に頭をのせながら荒垣さんを見る。
とても真剣な目をしていた。

最近そういう目ばかりを見ている気がする。

「…何か話があって呼んだんじゃないのか？」

「…話して欲しいんですか？」

「…いや、いい。」

荒垣さんは顔をさっと背ける。俺も荒垣さんから視線を逸らす。俺は荒垣さんの言葉を無視して話を続けた。

「…実は日曜日にはがくれ誘うつもりだったんです。」
ベンチを手で叩く。

「…その日は死んでいたので出来ませんでしたけど。」

荒垣さんの視線がこつちを向いたのを感じた。

瞬間、くらつと意識が揺らぐ。酒にでも酔ったかのような眩暈。膝に頭を埋めた。

「…ガキさんは匂いが強すぎる。」

「…あ？」

荒垣さんの明らかな不快感を感じ取る。

眩暈がして平行感覚がおかしくなり、そのまま荒垣さんとは反対の方向に横になる。

「おい、大丈夫か？」

心配してか、先輩の伸ばして来た手を弾く。

「…先輩、あまり死を求めない方がいい。」

荒垣さんが目を見開く。

「…の力が誘発しかねない。」

「…ペルソナ…か。」

微かに首を振る。さらに眩暈が酷くなる。

「…違う。」

「違うないだろ。俺のは…。」

荒垣さんがチツと舌打ちをして顔を背けた。

「…渴くん。先輩が死を求めれば求めるだけ…死の匂いが強くて…殺してしまいたくなる。」

「…お前…。」

驚いた顔をした荒垣さんの視線の先は仮面を持つ俺の左手だった。それで初めて自分が仮面を持っている事に気付く。

顔の上半分を隠す仮面には左側の頬に涙の描かれていた。
道化者の仮面。

軽く手を振るとそれは煙のように消えた。

ゆっくりと意識が平常に戻ってくる。

「…何でも無いです。」

ゆっくりと起き上がる。

訳の分からない眩暈は完全に消えていた。

「…一体何だったんだ？」

下に置いていた靴を履く。

「…お前は一体…」

「…ガキさん、ラーメン美味しかったです。ありがとうございました。」

一礼し、荒垣さんが口を開く前にその場を後にした。

気がつくくと、掌にうつすらと汗をかき、微かだが震えていた。
久しぶりに感じた恐怖だった。

有里が饒舌になってから、様子がおかしいとは思っていた。

殺したいと口にした辺りではもはや正気の沙汰とは思えなかった。

…狂ってる。

その形容が一番しっくりときた。

同時にかつて自分もいたあの寮にいるであろうあいつの仲間が心配
になった。

こんな狂気と一緒にいて大丈夫なのか、と。

あいつは、有里は掴みどころがない。

何を考えているのか分からない。

表情も殆ど動かない。

それが殺したいと言ったあの時、顔は髪やら腕やらで少ししか見えなかったがああ、瞳、表情：純粹なる殺意と、歡喜が満ちていた。

あんな酷い表情は初めて見た。

…殺される、本気でそう思ったのは初めてだな。

拳を作って立ち上がる。

俺はあいつに殺されてやるわけにはいかない。

有里は危険だ。

警戒しておいて絶対に損はしない。

ラウンジ

寮に帰って来るとラウンジには寮生全員が集まっていた。

「ういっす、お帰りー。なあ…勉強かつたるいから、後でタルタロスいかな？」

俺が帰ってきた事に気付いた順平が早速タルタロスに行こうと誘ってきた。

予想通りといえば予想通りな展開。

…その事で話がある。」

全員が座るソファの二つに座る。

「…来週の月曜から中間試験だ。だから、テスト終了日まで探索する回数を減らす。」

「えー！」

真っ先に反対したのは勿論順平だった。

「…何でだよ！？鍛えねえとまたいつデカイのが来るかわカラネーじゃん！」

「私は賛成だ。伊織、いくら探索をしているからといって、成績を

落とすのは感心しないな。」

「全くだ。大体、勉強は学生の本分だろ。」

「ってか、順平はこれ以上落ちるとこないでしょ？」

桐条先輩が賛成し、真田先輩、岳羽さんがそれぞれ口を挟む。

「ひつでー！オレツチ、湊より出来る自信あつかんなー！」

順平にビシツと指さされた。

人を指差すなよ…。

「んー、まあ…分かるけど…。」

岳羽さんが同情するような目で見えてきた。

「…有里君、ノート貸そうか？」

「…大丈夫。」

俺は何だと思われているんだ…？

そりゃ…授業は度々…いや少しだけうたた寝しているが。

「…一応、反対意見が出ることを予想して、一つ案がある。」

「…聞こう。」

キラリ、と先輩方の目が光る。

「…テストの結果が発表された時、順位に応じてその日の夕食を値

引きする。俺と同じか上を採れたなら、メニューの希望も聞く。…

ただし、下位二人は手伝い。」

岳羽さんがすぐさま手を挙げる。

「はい！この場合、先輩達が有利じゃないの！？」

…ただ単に勉強嫌なだけでは？

でも幾らなんでも学年内でトップクラスに入れてのも酷な話か。

「…じゃあ、クラスの平均点をこえたらデザート付ける。」

「乗ったわ。」

「…良いだろう。」

「有里何ぞに負けん！」

岳羽さん、桐条先輩、真田先輩が同意した。

「…ちよつと待って！それってオレツチ一番不利！？」

「日頃の行いだろ…。テレットには…じゃあ一教科でも俺のテスト

の点数を抜いたら現場リーダーをくれてやる。」

「よっしゃー！燃えてきたぜー！！」

立ち上がって両の拳を上突き上げる順平。

皆揃って現金だな。

「ちよつ、大丈夫なの！？それ！？」

「…当たり前だ。」

順平なんかには負けねえよ。

「それで、今日のタルタロスはどうする？」

桐条先輩の質問に数秒考える。

「…勉強にやる気を出しているようなので今日は止めます。」

「分かった。」

話が終わった事を確認し、鞆を持って立ち上がる。

岳羽さんが何かに気付いたようでサツと顔をあげた。

「有里君ちよつとストップ！」

岳羽さんに呼び止められてそのまま固まった。

「…このままだと、有里君が一番損しない？」

俺の事に気付いた事に軽く驚く。

いつも忘れられるのに何でこんな時は気付くんだ？

「…どうでもいい。」

「よくないったら。全く…君はいつもそうだよ。たまには自己主

張も大事だよ？」

呆れる岳羽さんの横で真田先輩が何か閃いたらしくさつと俺を見る。

「そうだプロ」却下だ。「…まだ言ってないぞ！」

恐らく「プロテインをやるっ」と言おうとしたのだろう。即座に桐

条先輩に切り捨てられていた。

「…ふむ。今気付いたが私達は君の事をよく知らないな。君は何か

欲しいものはないのか？」

「…別にいい。要らない。」

そんなもの無くても勉強はする。

階段の方を向く。

「おい、待てよ湊！」

順平の伸ばしてきた手を素早く避けて自室に引っ込んだ。

順平は掴みそこなった状態で数秒固まっていたが、やがてゆっくりと手を降ろした。

「…何であいつ、あんなして逃げんだ？…あいつに欲ってもんはねーのか？」

「知らないわよ。だって有里君って自分の事何も話さないんだもん。分かるわけないでしょ？」

ゆかりはため息をつきながら背もたれに体を預ける。

他の人もそれぞれに楽な態勢をとる。

「…あー、気になってベンキョーできねー。」

順平がさもやる気なさ気に言った。

「だからと言って、赤点はとるなよ？順平。」

明彦がボソツと呟く。

「…処刑されるぞ。」

サツと明彦が青くなる。しかし順平は処刑がいまいち理解できないようだった。

「明彦、何か言ったか？」

「いや、なんでもない。」

美鶴の鋭い視線から逃れるように顔を背けた。

「…要は、有里の事を知ればいいのだろう？では明日辺りに、勉強会でもすればいいのでは？ついでに聞けばいいだろう？」

美鶴の言葉に全員がハツとした表情をした。

「それだ！」

順平が叫んだ。

「…よし、じゃあ明日は勉強会だ。岳羽、伊織。有里に伝えておけよ。」

「よ。」

「はい！」

「任して下さい！」

二人は元気よく返事をし、その場は解散となった。

勉強会

放課後

ゆかりと順平は一つの作戦を決行しようとしていた。

そう、今日は先輩も交えて寮生全員で勉強会を開く日だ。

しかしリーダーである有里湊にはまだこの件を伝えていない。

二人は彼にその事を伝え、勉強会に引つ張り出すという使命があった。

授業が終わってすぐ、ゆかりと順平は湊の席を見る。

湊は二人の行動をちらつと見るとそのまま荷物をまとめ始めた。

「あ…有里君、あのね？」

ゆかりは名前だけの勉強会を伝える後ろめたさからか、恥ずかしそうに話す。その姿を見た湊は首を傾げる。

「…告白？」

反射的に湊の頬を叩く。

バチンツという音が響いた。

放課後でざわついていた教室内がしん…と静まる。

湊は時間が止まったような空間の中で特に気にする事なく鞆を閉め、

イヤホンを耳に付けてミュージックプレイヤーを弄る。

「…ゆ、ゆかりっ子。」

「お、思わず手が出ちゃったのよ！」

順平とゆかりの小声の会話の間に痴話喧嘩か…等と囁くクラスメートの声が聞こえる。

「…で、何？」

湊の声は何時もと変わらず平静そのままだった。

その声にはつと気付いた順平が返事をする。

「…お、おう。…えつと…何だっけ？」

しかしまだ混乱した頭は正常に働いていないらしく、言うことを忘

れていた。

「…今日、寮生みんなで勉強会する事になったから。寮に帰って来たらラウンジに集合よ。」

ゆかりはぶすつとした表情で淡々と説明した。

「…ん。」

湊は簡単に返事をし、鞆を左に抱える。

「…悪かった。」

ゆかりの横を通るときにボソリ、と呟いて行った。

作戦 とりあえず成功

古本屋・本の虫でコミュを深め、ついでに欲しい本まで手に入れる事が出来た。

ほくほくとした気持ちで寮の扉をくぐる。

「…ういっす、おかえりー。」

ラウンジには全員が揃っていた。

…あ、勉強会するんだっけ。

正直に言つと面倒臭いと思う。それぞれが勝手に勉強すればいい。

…まあ、どうせ強制参加だろうけど。

自室で着替えを済ませ、道具を持ってラウンジに行く。

いつものソファではなく、食事をするときを使う椅子に座る。邪魔な椅子は外して部屋の端に置いた。

順に左から真田先輩、空席、桐条先輩、向かい側に岳羽さん、俺、順平。

…最後に来たから文句は言えないにしても何だこの席順…。全員が椅子に座ったのを確認した後、桐条先輩が口を開く。

「では今から勉強会を始める。各々勉強を始めてくれ。」

「はい。」

「うーっす。」

「ああ。」

上から岳羽さん、順平、真田先輩が返事をして教科書やノートを開く。

俺はルーズリーフとシャーペンを準備し、さっき買ってきた本を開いた。

…五分経過

横から唸り声がある。

順平うるさい邪魔するな。

…十分経過

「…だあーっ！こんな問題分かるかあー！！」

順平が叫び、頭から煙を噴き出して撃沈した。

「…順平うるさい。」

岳羽さんの一言に順平が立ち上がる。

「だって読めねえし！こんなことして意味あんのか！？つか湊は何してんだ！明らかに勉強ちげーだろ！！」

視線が刺さるのを無視してページをめくり、ルーズリーフにメモをする。

「…え、何してんの？」

「…読書？」

本から目を離す事なく返事をする。

「駄目っしょ！？一人だけ何してんガフウ！？」
うるさい順平の鳩尾に肘を打つ。

順平が変な声と共にテーブルに伏した。

口から出ているあれがエクソプラズムとかいうやつか。

…今更だが先輩達はスルーですか…。

勉強 再開

それから一時間程経った頃、桐条先輩がシャーペンを置いた。

「…そろそろ一休憩としないか？」

桐条先輩の一言に真田先輩、岳羽さんがノートから目をあげる。順平も口から出ていたモノを戻してもそつと起き上がった。

順平が自販機からジュースを買ってくる。

勉強道具が片付けられてテーブルの真ん中にポテトチップス等のお菓子が置かれた。

成る程お前ら勉強する気ないな。…俺もか。

プシツと缶を開け、一口飲む。

「…たまには全員でこうするのもいいな。」

桐条先輩がしみじみと言った。

何時も夕食は食べる時間はばらばらだ。それは俺が作った時も例外ではない。

こうして全員で困んだ事は本当に少なかった。

それぞれがお菓子をかじりながらジュースを飲む。

俺はただ剛健美茶を啜るだけだ。

「…食べないの？」

「…別にいい。」

岳羽さんの問いに簡素に答える。

「…そういえば、有里君って誕生日いつ？」

「…何で？」

岳羽さんの唐突な質問に思わず聞き返していた。

「いや何でって…。」

「…まあ、詰まるよね。そんな風に返されたら。」

「別にいいじゃん、パリパリ誕生日くらいサ。バリボリあ、オレは一月十六日な。」

ポテトチップスを口に詰め込みながら言う順平。

話すか食うかどっちかにしろ。

「順平には聞いて無いつつの。…私は十月十九日だよ。」

「それぞれの誕生日を言っていくのか？俺は九月二十二日だ。」

「私は五月八日だな。」

何故か誕生日を言い合っている。

何だこれももうどう訂正しようもない。

しかも桐条先輩の誕生日この前だし。

「…で？」

全員の視線が俺に集まる。

絶対に答えないといけないらしい。

…答えると言われてもな。

「…知らん。」

剛健美茶を啜る。

「…いやいやいやそれは無いっしょ。なー別にいいじゃんよー。」

順平が俺の肩に腕を回してしっこく聞いてくる。…うるさいな。

「…十一月二十五日。」

「へえー。」

順平が体重をかけてくる。…重い。

強引に引き剥がす。

「…嘘だけど。」

「え。」

「…どうせ信じないだろう？」

空になった剛健美茶の缶を親指と中指で持ってぶらぶらと左右に振る。

「…勉強会という割には教えるわけではなく、一時間ですぐ休憩。

本当の目的は俺について知ること？」

全員の表情が強張る。

「あ、有里、これは…。」

桐条先輩が何とか説明をほころみる。

「…別に責めるつもりは無いですが、聞くだけ無駄です。」
肘について欠伸を一つした。

「…俺は貴方方の問いを解する事ができない。」

「…どういう事だ？」

「…生年月日、年齢、血液型…諸々俺は知りません。」
気がつけば誰もがお菓子に手を伸ばさなくなっていた。

「…どうでもいい。」

閉じた本とルーズリーフ、シャーペンに空き缶を手に席を立つ。

「…じゃあ、勉強頑張ってください。」

空き缶を洗ってからごみ箱に捨て、自室に引っ込んだ。

さて、静かなところで続きを読むかの。

勉強会（後書き）

うちの湊の誕生日は（本人は知りませんが）二月十九日です。

警告

朝

校門前で真田先輩に話し掛けられた。

…何でみんな校門前で話をするんだ？

「よお、有里。試験も今日で最終日だな。」

先輩は爽やかな笑顔だ。

…爽やかすぎて近寄りたくない。朝なんか嫌いだ。

「俺は今日医者からOKが出れば、ようやくの復帰だよ。」

ああ、爽やかなわけだ。

OKが出ると確信をどこかに持っているんだろうな。

「…そこで頼みがあるんだ。今までお前に任せていたタルタロスの探索日や探索時の先導。」

先輩がしてくれるのか？

「これをこの後も、お前に任せようと思う。見る限り、なんとか大丈夫そうだからな。その分、俺は力の上達に専念出来る。いいだろ？」

あー、そういう事か。先導等の厄介事は後輩に押し付けて自分のしたいことをする、と？

…文句言うのも面倒だし、好きにすれば？

「…別に。」

「美鶴にも話してある。じゃあ、頼んだぞ。」

真田先輩はそのまま校内へ走って行った。

結論…どうでもいい。

放課後

テストが終わり、一つ伸びをする。

今回のテストは楽なものだった。

…隣の順平は死んでいるが。
自業自得といえれば自業自得なんだが、今からそれだとやばくないか？
まだ一学期の中間だぞ。…これからどうするつもりなんだか。

ベルベツトルーム

結局、試験前はあまりタルタロスに行かなかった為、ベルベツトルームに来る回数も減っていた。
だから久々に来るベルベツトルームは少しだけ楽しみにしていた。

…していた…んだが…。

ベルベツトルームに入ると、いつもの場所に目を閉じたイゴールと不機嫌そうなベス、そして何故か床掃除をするエプロン姿のオルフェウスがいた。

…俺のペルソナ何してんだよ…。

「ようこそベルベツトルームへ。どのようなご用件でしょうか？」
嫌の混じった少しぶっきらぼうな言い方だった。

「…えーっと、とりあえず、現状の説明が欲しい、です。」

何故か敬語のようになってしまった。今のベスには逆らわない方がいい気がする。

イゴールも無言を貫いている。…寝てないよな？

「…オルフェウス、紅茶を入れて来なさい。」

ベスが一言いうとオルフェウスは敬礼して素早く掃除道具を片付け、ベルベツトルーム内に複数あるドアの一つから退室していった。

…完全に飼い馴らされている。

目の前で起こった事が信じられず、思考停止になりかける俺を見たベスは少し申し訳なさそうな顔をした。

「…湊様、実はお話しておかなければならない事がございます。」

「…あれ？」

オルフェウスの出ていったドアを指差す。

「はい。…オルフェウスは本来、アプサラスやピクシーといった他のモノ達と同じくただのペルソナでございます。」

確かに最初はオルフェウスも他のペルソナと同じく呼べば必ず応じ、勝手に出てきたり、話す事も無かった。…召喚の拒絶もだ。

「私は勝手ながらオルフェウスに自我とある程度の自由を与えました。」

「…そんな事が出来るのか。」

「ペルソナを一つの人格に昇華しただけです。力を管理する私だからこそ出来る事でございます。」

つまりペルソナの合体を主とするイゴールには出来ない芸当というわけだ。

「ただ、問題があるのです。」

「…何だ？」

「先程、ある程度の自由と言いましたが、実はここからここまで、といった具体的なものではなく、だいたいこの程度、といった曖昧なものなのです。そこに何が含まれているのかはオルフェウスには分かりません。」

オルフェウスが紅茶を運んで来た。

紅茶を俺の前に置くと、俺の後ろから腕を回し、頭を俺の頭の上に乗せて来た。ええい鬱陶しい。

「…だいたい分かった。これは俺のペルソナだが俺とは違う何かという事だろ。」

《基本的に別の存在だと思っていた方がいいよ？俺は俺の自由に動くからね。》

オルフェウスが話すたびに頭の頂点に顎が刺さって痛い。

「でも召喚器での召喚はいつでも可能でございます。」

「…で、ベスは何でオルフェウスを自由に？」

《俺が頼んだのさ。自由にして下さいってね。》

視線を伏せたベスの代わりにオルフェウスが答える。
軽く答えたオルフェウスに少しイラツとした。

《湊はリジーが俺に盗られたようで悔しい?》

頭上にいるオルフェウスの表情は見えないが、笑っている気がした。

「…何故?」

何故俺が悔しががる?

《アハハハハッ!》

一瞬驚いたように硬直したオルフェウスは大声で笑い、俺から離れる。

振り返るとオルフェウスは右腕で目を隠して笑っていた。

《否定しないんだね。理解しているのかな?それとも無意識?》

オルフェウスの言っている事を理解しないようにしながらオルフェウスから視線を外す。

《気をつけなよ?》

耳元でオルフェウスの声が響く。

オルフェウスの右手が俺の首に触れる。

《ペルソナとシャドウは本質的に同じモノ。自我を持ったペルソナはシャドウと成るのも容易。…俺がシャドウとなってお前を殺してしまうかもね。》

真綿で絞めるようにゆっくりと力の込められた手を弾いて振り向くと、オルフェウスが嗤っていた。

ゾワリ、と神経が侵されるような危機感。

視線が合った瞬間、体を何かが貫いていった。

今、俺はコイツをどう思った?

…コイツに、どう思った?

俺の内側で溢れる不安感と疑問を無視してオルフェウスはただの笑みに戻る。

《先に帰るよ?この前のエアガンじゃ無い限りは召喚に応じるかもね。じゃ。》

シユオン、という音と共にオルフェウスが消えた。

…とりあえず、前に置かれている紅茶に手を伸ばす。
今まで黙っていたイゴールが俺を見て口を開く。

「エリザベスの勝手な行動にはお詫び申し上げます。しかし一度こうなってしまうば元のオルフェウスには戻せません。ご容赦下さい。エリザベスにも悪気はないのです。」

イゴールとエリザベスが深々と礼をした。
目を閉じ、深呼吸する。

「…別に、どうでもいい。それよりベス、依頼の携帯ゲーム機。鞆から携帯ゲーム機を出して渡し、報酬にトウハンドソードを貰ってベルベツトルームを後にした。」

「…主、私は余計な事をしたのでしょうか？」
イゴールはエリザベスを見ずに答える。

「全ては必然。これもお客人に必要なだったのでしよう。気にしすぎぬように。」

「…はい。」

寮のラウンジ

寮の扉をくぐると、真田先輩はすでに病院から帰って来ていた。キッチンに続くドア付近のカウンターにいる先輩は晴れやかな顔をしている。

「帰ってきたか。」

「先輩、全快したそうですね。」

「おめでとうッス。」

俺が帰ってきた事に気付いた真田先輩が一言声をかけてきた。

そして先輩の近くにいた岳羽さんと順平がそれぞれ先輩に祝いの言

葉を言う。

大方今朝言っていた医者からのOKが出たのだろう。

「復帰メニユーが山積みだ。まるひと月サボってたワケだからな。」

真田先輩の言葉で一月いかなかった事に気付く。

相変わらず頭の中は鍛える事しかないんだな。

「急に無理すると、また折れちゃいませんか？」

岳羽さんがズバツと切り込む。

「そうも言ってもらえない。新たなペルソナ使いも見つかったしな。」

分かった。先輩はまた一月程トレーニング放棄したいんだそうだろう？

「おおっ！？新戦力って事スか！もしかして女子とか…！？」

順平は新たなペルソナ使いに気が向いているようだ。表情が明るく

目も今までないほどに輝いている。

「女子だ。ウチの高等部二年のな。“山岸風花”…三人とも知って

るか？」

ヤマギシフウカ、やまぎしふうか…山岸風花？

環境に良さそうなエコなこの名前はどこかで…。

……カツアゲ？

「山岸…？ああ、確かE組の…。なんか、体が弱いとかで、学校で

はあんま見ないような…。」

岳羽さんは一応名前だけ聞いた事がある、という程度のようだ。

「俺たちの居た病院へ来てたらしい。それで適性が見つかった。し

かし、素養があっても体がそれじゃ、戦いは無理かもな。召喚器も

用意したんだがな…。」

先輩がとても残念そうに言った。

…先輩はもっと多くの人に命を賭けて欲しいのか。

「えっ、もう諦めちゃうんスか！？せっかくオレが、手取り足取り、

個人レッスンとか…。」

…これもだった。

調子に乗っていた順平が要らない事まで口走る。

それを見た岳羽さんはため息をついた。

「ナニ？そのかわいそうな動物を見るような目は。」
生暖かい視線に順平はたじろぐ。いつの間にか真田先輩も同じ目をしていた。

「……。」

数秒間の沈黙。

先に堪えられなくなったのは順平の方だった。

「見んなよ……。オレを見んなよ……。」

順平の台詞を無視して二人は見続けていた。

その後先輩の復帰祝いにタルタロスへ突撃した。

先輩はとても生き生きとシャドウに突っ込んでいった。

さらに余談だが、オルフェウスを召喚したらエプロンを装備したままだった。

……だから止めるよ……。

結果 ケツカ

結果

「おい、試験の結果、貼られたぞー。」

男子生徒の声に教室内の生徒が反応する。

岳羽さんと順平は息を呑んだ。

俺としては人込みの中に飛び込む行為は出来るだけ避けたい。

…まあ、どんな風に行動しようとするにせよいつものように連行されていくだけだが。

今日も今日とて岳羽さんに掴まれ引きずられる。

慣れればこれも快適に…はならないなあ。

職員室前、前後のドアに挟まれた掲示板にそれは貼り出されていた。多くの学生がいると思われたそこは、ほんの数人しかいなかった。既に確認し終えたのか人が多いたろうと敢えて見に来ていないのか、どちらにしても空いていることには変わらない。

岳羽さんから解放されて掲示板を見る。

…。

結果から言おう！

二年生

湊、学年トップ

ゆかり、平均ライン

順平、下位の方

三年生

美鶴、学年トップ
明彦、上位

…ある意味では予想通り。

俺と桐条先輩は満点一位、真田先輩は少し下だが二十位までには入っている。岳羽さんは平均程だがクラスの平均点は越しているだろう。

…順平は超低空飛行。それでよく落ちないな。

岳羽さんと順平は信じられないようで何度か紙を見直したり目を擦ったりしている。

「…え、なに？書き間違いとかじゃないの？」

「…カンニングはいけねーんだぞ？」

してねえよ！

そこに桐条先輩と真田先輩が来る。

二人は掲示板を見ると、バツと音がしそうな勢いで俺を向く。

…俺は無実だぞ？

「ブリリアント！流石有里だな。」

「グツジョブ！次もその調子だ。」

岳羽さん達のようにカンニングとか言われるかと思っただが、予想に反して二人は褒めてきた。

「…え、え！？これって何かの間違いとかじゃないんですか？」

「…か、カンニングしたとか…？」

先輩の反応に慌てて確認する二人。

…手伝いが嫌だからってそこまで言うのは酷くないか？

しかし流石は先輩と言うべきか、それを華麗に避ける。

「ああ、そういえば知らなかったな。有里は転入試験で満点を叩き出す程の実力がある。この間も試しに出したセンター試験の問題を時間内に全て正解していたしな。満点がとれたところで今更驚かんぞ。」

桐条先輩の答えに二人の目が点になった。

…驚き過ぎやしないか？

「…うっそだー。」

順平が漸く一言だけ呟く。

「…先輩、今日は何が食べたいですか？」

順平達を無視して話を進める。

「…ふむ、そうだな…。」

桐条先輩は数秒間考える。

時間が経つにつれて先輩が赤くなっていく。

…何故？

「…し、庶民的なもの、と言つのもおかしいが…ふむ…。」

…庶民的…。流石はお嬢様。

「…シエフお任せコースで頼む。」

ワオ最終的にこつちに丸投げですカ。

別にいいけどね。楽だし。

「…じゃあ岳羽さん、テレットは放課後買い物の手伝いということ
で。」

軽く手を振ってその場を後にする。

さて、真田先輩にメールを打つか。

放課後

高速離脱しようとした順平を捕まえて強引に誘拐し、岳羽さんと買
い物に行く。

「…でー？どこ行くんだよ。」

やる気ゼロな順平に面倒だが返事を返す。

「…ポロニアンモールとスーパー。」

「…つつかオレの意味あんのか？」

「…荷物持ちでしょ？」

その通り。

会話もあまり弾まないままポロニアンモールにつく。

「…岳羽さんは桐条先輩宛の贈り物を選んで。金額は…一万まで。」

「え、なんでプレゼントなんか？」

明らかに嫌そうな顔をした岳羽さん。

「…誕生日は祝うものなんだろう？なるべく早く。真田先輩の足止めがいつまで続くか分からない。」

「…分かったわよ。」

真田先輩にはあらかじめメールで桐条先輩と仲良くゆっくり帰って来るようにと伝えてある。

期待は皆無だがメールをしないよりはましだろう。

財布から一万円札を出して岳羽さんに渡す。

「オレはー？」

「…スーパーに行くぞ。」

岳羽さんに軽く手を振り、順平を連れて移動した。

「なあー、湊ー。」

順平がうるさい。

スーパーへ行く道中、さつきからこの調子だ。

「無視することないじゃんかー。なあー。」

「…何だ？」

あまりのしつこさに負けて返事をする。

「…何で湊はリーダーをやったんだ？頼まれただけって訳でもねーんだろ？」

足を止めて順平を見る。

「…やめた方がいい。」

「何でだよ。」

納得出来ないという表情。…こいつは何でもストレートだな。

「…雑用が多い上に責任も重い。全員の命を預からないといけなからな。失敗は赦されない。」

「そんなことぐらい分かってる！」
分かってない。頭で理解しているだけでは、いざという時に意味が無い。
死んでから気付くのでは遅過ぎる。
しかし…こればかりは実戦で感じるしか無いのかもしれない。…どうしたものかね。
視線を前方に向け、ガリガリと頭を掻きながら歩き出す。
「…じゃあ、いつかリーダーを頼むかもな。」
どれだけ先の話になるかは知らないが。

夜

色々と考えたが、夕食はオムライスにコンボタージュースープとサラダを作った。
料理は俺一人で受け持ち、二人にはケーキの購入と部屋の簡単な飾りつけを頼んだ。
料理を手伝わせると余計な時間を食いそうだったからな…。
そして全ての準備が調った頃、先輩二人が帰って来た。
真田先輩が疲れているところを見ると、相当苦労したのだろう。
「あ、お帰りなさい。」
岳羽さんと順平がそれぞれ桐条先輩の左右に立ち、クラッカーを鳴らした。
「先輩、誕生日おめでとうございます！」
「誕生日おめでとうございます！」
「誕生日おめでとうございます！」
パン！と鳴り響いたクラッカーに桐条先輩はぼかんとしていた。
「…おめでとうございます。」
「…おめでとうございます。」
「どついう事だ？有里。」
未だに納得がいかないといった顔をしていた桐条先輩が俺に聞いてくる。

「…別に。誕生日は祝うものらしいのでこの機会を利用しただけで

す。」

「もーそんなのいいじゃないっすか！食べましょーよ！オレもう腹ぺこっす。」

先輩は荷物をソファアに置き、手を洗って椅子に座る。今日は主賓の桐条先輩を真ん中にして座る。

「お、オムライスか。」

テーブルには既に料理を並べておいた。

さつき出来たばかりの料理はまだ温かく、湯気を上げている。

それぞれが手を合わせる。

「いただきます。」

全員が自然と声を揃えて言い、即座にスプーンを手に取り料理を口に運ぶ。

…今日はコミュをせずにすぐに準備を始めたから比較的楽だったな。

「…相変わらずうまいな。」

口にオムライスをいれたままモゴモゴと真田先輩が話す。

「明彦、汚いぞ。食べてから話せ。」

真田先輩はプロテインを料理にかける事こそ桐条先輩に止められてしなかったが、牛乳に大量のプロテインを溶かした飲み物を飲んでいた。

…味も分からなくなりそうだな。

「しかし、本当に有里の料理はうまいな。」

桐条先輩もとても美味しそうに食べている。

…お嬢様というだけあって無駄に優雅だが。食べているのがフランス料理ならまだしもオムライスだからギャップが激し過ぎて笑えてくる。

…笑ったら処刑かな？

順平が一番に食べ終わり、次に真田先輩、岳羽さんに桐条先輩と続く。

男ども、早食いは体に良くないぞ？

俺も遅れながらご飯を食べ終える。

食器を全て流しに運び、冷蔵庫から岳羽さんと順平が買って来たケーキを持って戻る。

一体どんなケーキを買って来たんだか。

テーブルの上に箱を置く。

順平がすぐに箱を開けてケーキを出した。

中には五つの小さなケーキが入っていた。

ショート、ティラミス、チーズ、チョコ、そして…プリン。

…一個ケーキ違うし。

最初に桐条先輩がティラミスを選び、真田先輩がショート、岳羽さんがチーズに順平がチョコ。…必然的に俺がプリン。

…別にいいけどね。

ケーキ（プリン）を三分の二食べ終わる頃に俺は岳羽さんに目配せをした。

岳羽さんはそれに気付いてくれた。

「桐条先輩。」

「ん？どうかしたのか？」

岳羽さんが、買ってきてくれていたプレゼントを渡す。

「これは？」

「誕生日プレゼントっすよ！」

「開けてもいいか？」

「…どうぞ。」

桐条先輩が丁寧に包装紙を解いていく。中には白い羽根に紅い石で飾られたストラップが入っていた。

「…それは岳羽さんを選んで貰いました。」

「岳羽、大切にさせてもらおう。」

とても嬉しそうな桐条先輩を見ながらプリンを食べ終えた。

…ん、手作り感たっぷりなプリンはやっぱりおいしいな。…ごちそうさまです。

「…有里。ちょっといいか？」

桐条先輩に呼ばれ、そっちを向く。

桐条先輩はソファアールに行き、自分の鞆から何かを取り出した。

よく分からず首を傾げる俺の前に立ち、手にしていた何かを俺の方に差し出した。

「…君はいつも文句一つ言わずに全てを引き受けてくれる。今回も自ら得のない役を引き受けた。これはその感謝の気持ちだ。…受け取ってくれないか？」

桐条先輩とプレゼントらしき物を交互に見る。

…俺宛のプレゼント？

有り得ないと思う。何か罨でも仕掛けられているのではないか。

しかし俺を見る桐条先輩の目は真剣そのもの。

ゆっくりと手を伸ばして恐る恐る受け取る。

「開けてみるよ。」

順平の言葉を聞き、ゆっくりと開ける。

中に入っていたのは首に掛けるためのストラップだった。

…俺の携帯音楽プレイヤーを吊しているものと同じような色をしたもの。

「君はいつもその音楽プレイヤーを首から掛けているが、気付いているか？プレイヤーには小さいがいくつもの傷が付き紐は随分とぼろぼろになって所々ほつれているぞ。」

首から下げているプレイヤーを指先でなぞる。

タルタロスにも下げて行くこれには確かに細かな傷が入り、紐も随分とほつれていた。

「音楽プレイヤーをプレゼントしてもよかったんだが、タルタロスにも持って行く程だ。大切な物なのだろう？」

大切…なのだろうか。

「だから、せめて紐だけでもと思ってな。」

「…ありがとうございます。」
頭を下げた。

「…でも、すみません。今は、まだ…。」

「気が向いたら使ってくれる程度で構わない。どうするかは買った者の自由だからな。」

「…はい。」

顔を上げるとそのタイミングで順平が横から手を斜めに上げてきた。

「はい、はい！オレツチの分とかないんつか！！」

「あるぞ。」

桐条先輩の言葉によっしゃー！と順平が声を上げる。

…先輩方は俺にもこう反応して欲しいと期待していただろうか？

……うわ、ないわー。

桐条先輩はとも悩んだんだが…と呟きながら紙袋を持ってくる。

喜々として袋を開けていた順平だが、中身を見た途端、まるでブフでも食らったかのように固まった。

ゆっくりと震える手で中身を出す順平。

よく見るとそれは問題集だった。

それも全科目揃っている。

「今回のテストの結果が悪かったからな。これで少しでも順位をあげるといい。」

ムンクの叫びのような顔になった順平がごとり、とテーブルに頭を打っていた。

「岳羽もいるなら今度買ってくるが…。」

「あ、いえ…大丈夫です。」

岳羽さんはさりげなく拒否した。

そのまま自然に解散となり、各々自分がしたい事に走る。

俺は手にしていたプレゼントをテーブルの上に置き、皿を洗いに行った。

ケツカ

男子生徒の声を聞いて確認に行く。

結果は中の上だった。

ゆかりより上だからいつか。

何気なく順位を目で追う。

…。

ちよっと一回目を逸らそうか。きっと見間違いだよ。

……。

有里湊、満点一位。

ばか野郎ー！！！！

虐め（前書き）

綾時ととても楽しそうに話すクマ。

それを偶然見かけた湊は嫉妬し綾時に酷い言葉を投げ捨てて走り去る。（綾時と楽しそうにするクマに嫉妬です。）

逃げ込んだトイレで不良に絡まれる湊。

「ボス、お願いしやす!」

「ん?何、呼んだ?」

不良の呼び声に答えたのはジョーこと秋江譲（デビサバ2）だった。

…という夢。

幸せといえば幸せ…いや、でもっ…何でジョー…。

虐め

月光館学園 渡り廊下

ゆかりは体を軽く伸ばしながら歩いていった。

「はあ、つつかれた。一年生にちゃんと片付け教えなきゃ。」

今日は一年生が用具を間違えて片付けたため、今までやり直していた。

きちんと教えていなかったこちらが悪いのだが、まさかこんな二度手間になるとは思ってもみなかった。

「キャハハハハ！」

「ん？」

不意に上がった笑い声に立ち止まり、声のした方を見ると数人の女子生徒が大きな声で話をしていた。

彼女達はゆかりに気付かずには話を進める。

「で、ケータイでさ、写真撮ったっばくアピールしたワケ。たらさー、あの子超ビビッてさ、半ベソとか通り越してんの。弱み握られちゃった、みたいなの？なんつの、マジ世界の終わりって顔？だって声とか出なくなってるんだもん。」

ある意味絶滅危惧種（危惧する人がいるかは別として）である茶髪のギャル風な女子生徒は楽しそうに自慢する。

「わ、ダセー！」

女子生徒の連れである黒髪をツインテールにした化粧が厚い女子がまた笑いながら言った。

「つか、ビビッて泣いてる顔とか見んの、超ウケるよね。」

茶髪の台詞で思い出したのか、全員で爆笑する。

「キャハハハハ！」

物陰から冷めた目で見ていたゆかりはため息をついた。部活での疲れがどつと溢れた気がした。

「いわゆる、イジメ…？ヒマねえ…。」

笑いも一段落した頃、連れの女子の様子がおかしくなった。

「え、なに…この声…あたしを…呼んでる…？」

「は…声？なんも聴こえないけど？」

ぼうつとした女子の言葉に周りが耳を澄ませるが何も聴こえない。

そのまま女子はその声に集中したのか、黙り込んでしまった。

「ちよっ、マキ…どうしたワケ？つか、聞いてる？ねえ！マキってば！」

茶髪は急に黙り込んだ連れに半ば叫ぶように話し掛ける。

「……えっ。」

女子は自分の名前を呼ばれたからなのか、はっと正気に戻る。

「アンタ、だいじょぶ！？」

「ゴ、ゴメン…えと、何だっけ？」

彼女達はそのまま話しながらその場を後にした。

一部始終を見たゆかりは彼女達がなくなった後、嫌悪感を露にする。

「…行っちゃった。なあんか、ヤな感じだな、ああいつの…。」

さっさと忘れよう、とその場を後にした。

体育館

現在の状況。

山岸風花なる女子と一緒に体育館倉庫の中。

…はい、すっかり閉じ込められました。

遡ること数時間前になるだろうか。

…別にやましいことはしてないぞ。

運動部コミュを上げる為に部活に出ると、いきなり仕合をすることになってしまった。…負けた者は片付けと戸締まりをするという条件つきで。

結果は…まあ、俺が最下位。

剣道は思った以上に難しい、という事で。

部活が終わり帰宅し始める頃、宮本は膝に違和感を覚えていた。

そのままだとどうなるか簡単に予想出来たが、本人が気にしてないようだったので俺も何も言わなかった。

取り敢えず無理されて宮本を背負わなければならなくなるのも面倒だったので結子と先に帰ってもらった。

片付けも簡単なもので、後は戸締まりして帰るだけだったんだが…。

人が来る気配がして、咄嗟に体育館倉庫の中に隠れる。

…後で思えば別に隠れる必要は無かった訳で。しかし今となっては出ていくタイミングが見つからない。

そうしているうちに体育館の扉が開く。

声と気配からして数人の女子がいるらしい。

といっても声はくぐもっていてよく聞こえないので何を言っているかまでは分からないのだが。

…これはもしかして、朝にどこかの女子が話していた「イジメ」の現場に居合わせたか…？

イジメに関しては俺も受けていた為にいい思い出など存在しないが…まあ、どうでもいい。

イジメられる辛さを知っているから助けるなんて事もしない。…面倒だし。

傍観もイジメの一つ？だから何だよ。

卑下た笑い声が響く中に歩く音が混じる。
まさかこっちに来るのか!？。
急いで物陰に隠れた。

引き戸が開けられ、数人の女子が現れる。
早く出ていってくれよ…。

彼女達は一人の女子を強く押し、彼女はマットの上に倒れる。

彼女が起き上がる前に引き戸は閉められる。

「風花が悪いんだかねー。一日そこで反省してな。」

彼女が声を発する前に力チャカチャと軽い鍵の掛かる音が響いた。
女子のイジメはこんな事もするのか…。

……ん、鍵？

…俺も閉じ込められっ…。

体育館倉庫内は小さな窓が一つしかなく、部屋全体が暗い。その上換気も十分にされておらず、独特の臭いが充満していた。本来ならば鍵など存在しない倉庫だが、用意周到というべきか、鍵をしっかりと準備していたらしい。取っ手の部分がUの字になっているため、やるうと思えば自転車の鍵で事足りる。内側にいる俺は外からしか開けられない鍵に対しては何もできない。
取り敢えず、どうしようもなく扉の前に立ち尽くす彼女に話し掛ける事にした。

「…あの。」

「ひゃあっ!!」

本気で驚いたのだろう、腰を抜かしたようだった。

「…あ、有里君…。」

よく見るといつぞやの山岸風花だった。

「…大丈夫？」

うわ、何か最低な台詞を吐いた気がする。

「…ふああーん！」

声を聞いて安心したのか、山岸さんの目から涙がポロポロと零れて来た。

ちよ、俺にどうしろってのよ…。

泣いている山岸さんが落ち着くまでどうにかして外に出る事が出来ないかと試行錯誤してみたが無駄に終わった。

くっそ、倉庫の外から鍵かけるとかありえねえだろ。せめて体育館にしるよ脱出してやるから。

着替えようにも荷物や着替えは体育館の中だ。鞆の中には携帯も入ってるのに。

ため息とともに近くにあったマットの上に寝転がる。

…あと使える手は一つだけか。

できれば使いたくない手だが…と考えていた時、視界に緑が入って来た。山岸さんだ。

大分落ち着いたらしく、もう泣いてはいなかった。

「…大丈夫？」

あ、さつきも言ったなこれ。

「だ、大丈夫です。…えっと、有里君は何でここに？」

誰かと話していた方が安心する、ということか？

俺は着ていた胴着を指差す。

「…部活。」

「あ、そっか今日は金曜日だから…。」

運動部の活動日は月・火・木・金だ。

だから宮本に声を掛けたんだがまさかこんな事になるとは。

…ため息の一つも零したくなるってものだ。

ふと時間を確認しようとして時計が無いことに気付く。

…腹が減ったな。

「…山岸さん、携帯持ってる？」

「え、うん…。」

「…ごめん、借りる。」

山岸さんに携帯を借り、ついでに電話をしようとして番号を入力…しようとして、寮生の電話番号を覚えていない事に気付く。勿論寮の番号も知らない。

…咄嗟に思い出せるのが総司の番号だけとか…かけても無意味だし。つかよく見たら圏外じゃん。…阿呆らしい。

…時間を確認した後、無言で携帯を帰した。

「…えつと…あの…。」

困惑したような山岸さん。

まあ、何もせずに返せばそうなるよね。

「…助けを呼ぼうと思ったけど無理。」

警備員の人気が付くような大声で叫ぶとか？…無理。ぼーっと天井を見る。

…もう随分と暗いな…。

「…ありがとう。」

「…あ？」

いきなり御礼を言ってきた山岸さん。

…何故？

「…こんなところに一人だったら、多分堪えられなかったから。」

「…そうか。」

「うん。」

欠伸が出る。急に眠気が襲ってきた。

「…悪い、もう限界…。」

「え！？な、何がなの？」

俺の近くでオロオロとする山岸さんが遠い。

「…おやすみ。」
それだけ呟くと、眠気に抗うのを諦めた。

寮

テールにはファッション雑誌を読むゆかり、カップ麺を食べる順平がいた。

一方、ソファーには読書をする美鶴、グローブを磨く明彦がいる。

「…有里君、遅いね。」

ゆかりの一言に全員が顔をあげる。

「おふあふえへ、ひょうははっふへんふあへ。」

「食べながら話すなっつーの！何言ってるのか分かんないし。」

「しかし、確かに遅いな。夜間外出する時でも一度は帰って来るんだが…。」

寮の扉を見るが開く気配は一切無い。

明彦が時間を確認する。

「…もうすぐ影時間だぞ。」

美鶴は腕を組んで少し考える。

「…念のため、タルタロスに行ってみよう。岳羽、その旨、有里にメールをしておいてくれ。」

「はい。」

岳羽は携帯を出し、順平はカップ麺を啜る。

それぞれに準備を開始した。

体育館倉庫

影時間が近付き、はっと目が覚める。眼前に緑の女子の寝顔があった。

ガバッと起き上がると彼女はマットから落ちた。

…そういえば一緒に閉じ込められてたな。

山岸さんは落ちた衝撃で目が覚めたらしい。

目を擦りながら辺りを見渡す。

まだ寝ぼけている彼女を強引に抱きしめる。

何が起こっているのか分からない山岸さんは抵抗してくるが無理矢理押さえ込んだ。

…影時間に堕ちる。

轟音とともに床から地震と言つには激し過ぎる揺れが起こり、起き上がる事が出来なくなる。

「キヤアアアア!!」

山岸さんの悲鳴もあまりよく聞こえない。

地面に体が押し付けられるような感覚と共に意識も刈り取られていった。

気がつくと、知らない階層にいた。

今まで見たことの無い景色。

嫌な予感がした。

しっかりと抱いていたお陰で山岸さんと離れる事は無かった。

離れなければ守りながらエントランスまで…行かないとな。

ここは危険だ。何としてでもエントランスまでたどり着かなければならない。

軽く揺ると山岸さんも目を覚ました。

…そういえば彼女も象徴化してないな。タルタロス内ではしないのか?それともやっぱり適性?…どうでもいいけど。

山岸さんは辺りを見渡してぼつりと呟く。

「…ここは…？」

「…詳しい説明をしている暇が無い。…走れる？」

「え、うん。」

山岸さんの肯定を聞き、手を掴んで立ち上がらせる。

「…行くぞ。」

そして二人で走り出した。

ナビゲーションのないタルタロスはまさに混沌とした迷路だった。頭の中でマッピングしながら進んでいるのだが、どうしてもあわないのだ。

既に通った場所に通じた筈が、道の分かれる数が違う。通って来た筈の道が壁に阻まれる。

途中で強力な弓を見つけたので装備はしたが、弓はそう何度も使った事のあるものではない。

つまり当てる自信なんかないって事だ。

タルタロスはこんなにきついものだったとは…。

「…あ、有里君…ちょっと、待って…。」

流石に山岸さんには辛かったらしい。

息切れも激しく苦しそうだった。

「…もう少し頑張つて。せめて、階段まで。」

苦しそうながらもこくりと頷いた山岸さんは健気というか意外と粘り強いというか…。

…どちらにしても、あまり無理はさせられない。

彼女がタルタロスの中に入ったのは今回が初めてなのだ。

長時間動き回することは出来ない。

しかし階段も転移装置も見つけることが出来ずについに限界がきた。山岸さんが咳込みながら座り込む。

休憩しなければ動けそうにない。

「…大丈夫？」

「…ごめ…」

「…無理するな。きついときは言え。」

…言ったのに強引に連れ回したのは俺か。

「…ありがと…」

まだ呼吸の落ち着かない山岸さんの前にマツスルドリンコを置く。

…たまたま拾ったんだほっとけ。

今いる場所はタルタロス内でも所々にある少し広い空間の角だ。

この部屋の対角線上の二カ所の角に道が繋がっている。片方からシヤドウが来ても一応は逃げられるはずだ。後は俺次第か。

弦に軽く指を掛け、いつでもすぐに戦闘体制をとれるようにする。

今までは走って逃げて来たが、山岸さんが動けない今は応戦するしかない。

…まったく、何で俺がこんな事…。

《優しい優しい湊は放っておけないからじゃないかな？》

ずしつと肩から頭にかけて重みが増したと思うと、オルフェウスの声が出た。

誰が優しい湊だ。

「…重い。」

だがオルフェウスは話を聞かない。

《やつほー！君が山岸風花？俺はオルフェウス。よろしくね。》

俺の上に乗った状態のまま山岸さんに手を振った。オルフェウスの重みで体がグラグラする。

山岸さんは驚いた顔で固まってしまった。

《さて、いちやつくのも程々にしないとやばいよ？》

どこをどうすればそう見えるんだよ。

オルフェウスは左手をアンテナのように立て、その手に集中する。

《あ、刈り取る者出た。》

ジャラリ…

あまりの軽い言葉に思考が一時停止したが、続いてした冷たい硬質な音が響く事で即座に理解する。

これはやばい。会ったら即死する…気がする。

「オルフェウス、死神と転送装置の位置分かるか？」

《んー？じゃあ急ごうか。》

「…悪い。」

「え、な、何なの！？」

「説明してる暇は無い。怖かったら叫ぶなりしがみつくなり噛み付くなり好きにしろ。」

オルフェウスのゆっくりとした声を聞きながら混乱した山岸さんを抱える。山岸さんは俺の胴着を掴んで顔を伏せた。

右手を膝の裏に、左手を背中に回したために持てなくなった弓をその場に捨てる。どうせヤツに攻撃は通用しないだろ。

オルフェウスが後ろでヒューと口笛を吹いたが無視する。そんなものに構ってられるか。

つかオルフェウスは自分で飛ぶか走るかしやがれ！

ジャラリ、ジャラリという音が急かしてくる。

《あっちだよー？》

オルフェウスが指差した方へ向かって走り出した。

右へ左へ曲がるが死神はしっかりと付いてくるのが分かる。

しかもだんだん近付いて来ている気がする。

出口の見えない迷宮で死神に追いつけられるのは辛すぎる！！

《次を…えーつと…右だね？》

聞くな！

右に曲がる。

ジャラリ…

前方に死神の姿を捉えた。

《あ、ごめん。間違っちゃった。》

馬鹿野郎！

死神・刈り取る者の頭部は潰れ、血で濡れたコートを羽織り、体には鎖を巻いてあった。音の正体はこの鎖が擦れる音か。両手には銃身の長いリボルバーを二丁持っている。銃口がこつちを向いた。

《逃っげろー！》

楽しそうなオルフェウスの言葉と共に来た道を引き返す。射撃音がして背後を銃弾が通り過ぎる。

《えーつと……あ、これかな？突き当たりを…左？》
また疑問型…。

しかし他に信じるものも無い為、仕方なく従って走る。

両手がだんだん痺れてきたが相手は休む暇を与えてくれない。

早く出口に着いてくれ！

背後から今まで体験したことのない程の冷気を感じた。

必死に足を動かす。

後ろを振り向く余裕も無い。

《マハブフダイン》

広範囲上級氷結スキルが発動し、道が背後から凍って行くのがわかる。

《マハラギ》

オルフェウスが広範囲火炎スキルで応戦するが威力が天と地程も差があり全く効かない。

《凍る！俺凍って来てる！！》

オルフェウスの背中を凍らせた時点で氷の侵攻が止まる。

「ぎいつ…！」

掠っただけなのだが元々の威力が高いスキルだ。持って行かれた体力も多い。

背中が鋭い痛みを発するが足は止められない。

漸く緑に光る転移装置が視界に入る。

オルフェウスが素早く飛び、起動の準備を行う。

《マハガルダイン》

見えない疾風の刃が迫る。

氷よりも遙かに速い風はすぐに俺に追い付き、足や背中を切り裂いていく。

最後はオルフェウスの力を借りて転移装置に飛び込んだ。

タルタロス エントランス

タルタロスに来る事を決めた時間が既に遅かった為、影時間も随分と経った頃に着いた。

エントランスに入るが湊の姿は無い。

美鶴はすぐに機械を操作し、探知を開始する。

「街には反応無かったですよね、有里君。」

「ああ、らしい。もつとも、美鶴の索敵範囲は広くはないからな。

街の全てを調べるのは無理だ。」

ゆかりの問いに明彦が答える。

「意外と、女子とデートしてたりして？」

少しおどけて言った順平に美鶴が返事をする。

「安心しろ。その場合はたっぷり処刑してやる。」

明彦がサツと青くなる。

「ん…これは有里…か？」

「見つかったんですか!？」

ゆかりが聞くが美鶴は眉間にシワを寄せるだけだ。

「しかし随分と遠い…。範囲ギリギリだな。……誰かと一緒らしい。

「本当にギリギリなのだろう。」

美鶴は少しでも多くの情報を得ようとさらに集中する。

「…なっ！？まさか、死神に追われているのか！？」

「なんだと！？」

美鶴の言葉に明彦が真っ先に反応する。

「場所はどこだ！」

「助けにいかなきゃ！」

「そ、そうっスー！！」

三人の様子を見た美鶴は、ゆっくりと首を振った。

「無理だ。どうも下から行ける限界を超えた場所にいるらしい。」

「ここからは助けに行けない。」

「そんな…。」

全員でタルタロスの迷宮に通じる扉を見る。

「くそっ！」

明彦は悔しそうに拳を握りしめる。

美鶴も唇を噛み、それでも様子を探り続ける。

突然転移装置が光を放った。

そして女子を抱えた湊が転がり出て来る。

彼は全身に切り傷をつくっていた。

腕の中に抱いていた彼女は気絶しているだけで無傷だった。

「有里君！」

「有里！」

「有里！」

「湊！」

それぞれ名前を呼んで駆け寄るが、彼の傷は深くあつという間に血だまりが出来ていく。呼吸も浅く、一目で死にかけているのが分かる。

「岳羽！明彦！回復させろ！伊織は彼女の様子を確認しろ！」

即座に全員が動き出す。

ゆかり、明彦、美鶴はそれぞれのペルソナを呼び出して一斉にディアを掛ける。

順平はその間に風花を邪魔にならない場所に運んで軽く様子を見ながら横に寝かせる。

「どうしよう、血が止まらない!!」

「続ける!回復し続けるんだ!!」

焦るゆかりに美鶴が叱責するが彼女も改善しない状況に焦りが募る。さらにディアを掛け続ける。

唐突に声が響いた。

「申し訳ございませんが、少々離れて頂けますか?」
凜と響いた声に全員が顔を上げる。

青いエレベーターガール、エリザベスだった。

エリザベスは手にしていたペルソナ全書を開いてピクシーを呼び出す。

「ディアラハンでございます。」

驚く皆の前でピクシーは上級の回復スキルを掛ける。

湊の傷が目に見えて癒えていくが、何故か効きが悪く本来なら全回復するはずなのだが傷は塞がらない。

エリザベスがさらに数回ディアラハンをかける事で漸く完治した。

「…貴女は一体…?」

美鶴の呟きに、エリザベスは優雅に笑むだけだった。

目が覚めてすぐは意識がはっきりとせず視界もぼやけていた。

思考という思考もしないままぐるぐると回る感覚。

目眩が治まり、視界がクリアとなってきた、エントランスの高い天

井と皆の顔が見えた。

「…あ…？」

全員の顔が明るくなったのが見えた。

…何でベスがいるんだろう…？

体を起こそうとしたが体に力が入らない。

近くにいた真田先輩が体を起こしてくれた。一瞬手を止めたのは俺の体が微かに震えていたからか。

顔を上げるとベスと目が合う。

ベスは言葉を発する前にペルソナ全書を俺の頭部に向かって振り下ろす。

ドスッ。

鈍い音がした。…痛い。

「…湊様は先程まで死にかけていました。」

「あー……うん…。」

何とか記憶を手繰り寄せる。

そういえばすぐ切られた気がする。

じゃあこれは血が足らなくて頭が回らないのか…。

「…無理をし過ぎでございます。」

「……悪い。」

ベスはまだ何か言いたそうな顔をしていたが、結局口を一度閉じることで飲み込んだようだった。

ベスはどこからともなく…と見せ掛けてベルベットルームから何かを取り出した。

それを俺の口元に持ってくる。

「…薬でございます。お飲み下さい。」

……薬？…て、え？

「待って下さい、薬とは…。」

「たいした物ではございません。」

薬について問おうとした桐条先輩をベスは一言で切り捨てた。

ベスは飲もうとしない俺に疑問を持ったのか、軽く首を傾げる。

薬と俺を見て、何かに気付く。

「ああ。」

ベスは躊躇う事なく薬を自分の口に入れ、そのまま俺に口移しで薬を飲ませた。

…。

…。

……………ゴクッ。

薬を飲むとベスは素早く離れる。

……………今、キ…！

一気に体が熱くなったのを自覚した。

「…では失礼します、湊様。」

そしてベスはベルベットルームに帰って行った。

時の止まったようなエントランスでぎこちないながらも美鶴が一番に動き出す。

「と、とりあえず話は後だ。今日のところは戻るぞ。一旦二人を休ませなければ。」

「そ、そうっスね。じ、じゃあオレはこの子背負っていくっスから、先輩、湊をお願いしまっス！」

「あ、ああ。分かった。」

順平は声が裏返りながらも何とか動き、明彦もやっとな動き出す。

ゆかりは冷めた目でエリザベスの消えた場所を睨んでいたが、すぐに順平を手伝う。

湊は目を見開き、耳まで紅く染めて固まったままだった。ただでさえ足りていない血がさらに足らなくなったのか、彼の全身の震えは酷くなっていたが。

明彦は美鶴の手を借りて湊を背負う。

そしてタルタロスを後にした。

虐め（後書き）

ベスは湊が気絶している間に他の人達に圧力をかけて湊との会話中に話さないように釘さしています。

オルフェウスはアナライズモドキが出来ます。アナライズといっても美鶴さんよりもさらに精度は落ち、敵の弱点も分かりません。ぼんやりと地形と転がるアイテムや敵の位置が分かる程度です。

今回はもう少し早く更新したいと思います。

怨霊（前書き）

うっかり風邪を引きました。
こたつには気をつけて下さい。

怨霊

今日は朝から校内全体が騒がしかった。

以下校門付近で聞こえて来た会話。

「ねえ、聞いた…？二年の…。」

「聞いた聞いた！今朝、ここに倒れてたんでしょ？家出とかだったらいいんだけど、ちょっとヤバイ匂いするよねー。」

「テレビとか 来るかもねー。面倒くさいなー。」

俺としてはお前ら女子の噂の回る速さの方がヤバイと思うが。

今朝の情報が既に校門にいる段階で知ってるのか…。

予鈴がなった。

午前

教室全体がざわざわと落ち着かない。

「知ってる？E組の話…。」

「なんか、すごい噂じゃん。原因よく分かんないって…。」

「らしいよね！でさ…。」

皆何かの噂で持ち切りのようだ。…校門で聞いたヤツだろうけど。

正直俺はどうでもいい。

それよりも山岸さんはどうしたのかが気になる。

昨日は空いていた寮の一室で休んでもらった。今朝は先に学校へ行ったのか姿を見なかった。

…一応守ると決めたのだ。今日の様子を確認するくらいは必要だろう。

誰か寮生は…と思った時、ちょうどいいタイミングで順平が入ってきた。

「すげえな…もうこんな広まってんのか。どいつもヒマだな、まっ

たく。」

順平は独り言っぽく呟きながらこっちにくる。お前に言われたらおしまいだよ。

「お前、もう聞いた？」

「興味ない。」

即答してやった。心底どうでもいい。

「おい、オマエはアレか。大都会の冷たい大人か。」

…えー…。

「事が事だし、知ってたほうがいいつつの。隣のE組の女子が、昨日の晩から夜通し行方知れずでさ。それが今朝んなって、校門の前でぶっ倒れてたんだと！事情は、目下ナゾで、噂じゃ、意識も戻ってねえらしい。」

やっぱりお前も十二分に暇じゃないか。

しかしE組か…。確か山岸さんもE組だったな。

「…おはよ。」

元気なさ気な岳羽さんが教室に入って来た。

部活の朝練で早く来ているにしては遅い到着だな。いつもは俺より先に席に着いているのに。

「よう、ゆかりツチ。今回の難事件…正直、このオレもお手上げ侍だワ。」

順平が両手をあげて真剣そうに言った。

…バカだ。

「お手上げ侍？」

岳羽さんはわざわざ順平の馬鹿話に返事するのも面倒らしい。

「…バカじゃないの？」

目を閉じてため息を一つついた。

「てか、バカじゃないの？」

「二回言うな！」

…いつもの風景だな。

「って、そう言や朝から見なかったけど、どしたん？」

順平が岳羽さんに聞く。

順平も見えていないのか。…ん？俺は順平より遅くきたのか？

「先生に、ちよつと話してきたの。今朝倒れてたつて子…実は私、きのう部活の帰りに見たのよ。その時は別に普通だったんだけど…。」

「へえ…。サスペンスだな、それ…。」

意味分かって使ってるのか？

「…ところで山岸さん分かる…？」

「「は？」」

二人揃ってこっちを見てきた。何と言うシンクロナ率。

二人はいきなり何の話？とでも言いたそうな顔をしていた。

「山岸さんって、確か前先輩が言っていた適性持つてるつて子でしょ？彼女がどうしたの？」

岳羽さんが返してきた返事に一瞬思考が停止する。もしかしたら俺は不測の事態にあまり強くないのかもしれない。

…念のため、確認しよう。

「…昨日の影時間、二人は何をしてた？」

「何って、昨日はタルタロスを探索に行ったじゃん。…湊、大丈夫か？」

順平にまで心配されたら終わりだろうがそんな事に気を配る余裕がない。

会話の違和感。頭の中で想像していたものと違う返事。

…一体どういう事だ？

「…昨日の影時間、タルタロスで…山岸さんを保護しただろ？」
恐る恐る聞いてみる。

二人は記憶を辿るような動作一つしなかった。

「ちよつと、ホントに大丈夫？まだ寝ぼけてんの？」

「やっぱり昨日無理すぎたんじゃねえ？熱とかねーか？」

岳羽さんが俺の顔を覗き込み、順平が額に手を当てて来る。

「…んー、熱は無いつばいな。夢でも見たんじゃねーの？」

「……夢。」

「そーそー。つつかオマエ山岸さんの事が好きだったりしてな？夢にまで出てくるとかこりゃソートーだぜ？」

チャイムと共に先生が教室に入って来たので二人は自分の席に戻る。

…夢であるはずがない。

あの痛み、焦り、恐怖…。死神に追い掛けられた時の事は鮮明に思い出せる。

夢であるならば痛みを伴う筈がない。

彼女に触れた時の温かさを覚えている筈がない。

…ベスの唇の柔らかさですら思い出せるのに。

説明こそ後回しにしたが、寮生全員が彼女と会っている筈なのだ。

…では、何故彼等は知らない？

放課後

噂のE組の女子について聞きたくなくとも耳に勝手に入ってくる。

倒れた子は無気力症なのとか、一人で倒れてたのだとか…。

恐らく見つけた人がいいふらし、さらに尾鰭がついたんだらう。

…どうでもいい。

イヤホンをして外界との繋がりを断つ。

俺には関係ない。

どうセイジメの加害者の一人が昨日閉じ込めた筈の山岸さんを自分勝手な理由から鍵を開けに行き、ついでにシャドウにでも食われたとかそんなオチだろ。

完全に自業自得だ。

コミュをする気にもなれず、ぼんやりとしながらベルベットルームのドアをくぐった。
いつもと変わらない二人がそこにいる。

挨拶もそこそこに本題へ入った。

「…二人は、昨日を覚えてる？」

ベスとイゴールは同時に首を傾げた。

「…昨日、とはどういう事ですか？」

二人に話すべきなのだろうか。

聞き返してきたイゴールを見て迷う。

「…昨日の、影時間。」

それ以上は口が動かなかった。

「…ふむ。」

イゴールは組んだ手の上に鼻をのせ、一度目を閉じる。

「…昨日の影時間では“何か”があったようだな。」

「…イゴールは何か知っているのか？にしては曖昧な…。」

「その時間帯に奇妙な揺らぎを感じ、エリザベスに調べさせたのですが…。」

「…何もございませんでした。」

「…ベスは…。」

改めてベスを見るとどうしても思い出して顔が熱くなる。

「…少し冷たくて、でもとても柔らかかったな。」

「…昨日、俺に何かした？」

「…いいえ。…昨日は会っておりませんが？」

平然と即答したベスを見る限り本当らしい。

「…やはり俺がおかしいんだろう。あのキ…は俺の妄想とか、そういうった何かが爆発でもした結果の産物か。」

考えるのが馬鹿らしくなった。

「…やっぱり疲れてるのかもな。今日はいいや。帰って寝る。」
返事もろくに聞かずにベルベツトルームを後にした。

翌日 夜

先日の件は気のせいで納得は出来ないが納得した事にして考える事を放棄した。

そして気を紛らわせる様に料理を作る。味見したがよく分からなかった。

今日は何故か全員揃っての食事だ。

真田先輩が料理にプロテインを大量に投下しても何も言う気がしなかった。

黙々と食べていると順平が堪えられなくなったのか岳羽さんに向かって話し出す。

順平にとっては一番話しかけやすい相手なのだろうか。…疾風弱点の癖に。

「そういや、ゆかりツチさ。学生用のネット板とか、見てる？先週、E組の子が校門で倒れてんのが見つかったっしょ？あれ、怪談に出てくるオンリヨウの仕業じゃねーかってサ。」

…何故片仮名。

「オンリヨウとか、マジやめてよ…ウソくさい！」

まあ、嘘だろうし。

「その怪談というのは、どんな話だ？」

あーあ。

順平の話に食いついたのは桐条先輩だった。

「ちよっ！？どうせ、作り話に決まってるし、き、聞かなくていいと思いますか！」

岳羽さんは怖いのか、お化け。

否定の仕方があからさまにおかしいぞ。

…いや、俺も幽霊はあまり得意じゃないが。

「興味ある。話してみる。」

「う…。」

流石に先輩二人に言われてしまえば反論は出来ない。ある種の反則技だな…。

順平が身を乗り出して語り始めた。

いつの間に用意したのか、懐中電灯まで持ち出している。

部屋の明かりを消し、順平は自分の顔を懐中電灯で下から照らした。

…暗くて食えない。

「どうも、こんばんわ。伊織順平アワーのお時間です。」

何だそのノリ。

「世の中には、どーも不思議なことって、あるようなんですよ…。ご存知ですか？遅くまで学校にいます…死んだはずの生徒が現れて、食われるよ、って怪談…。」

へー、過去に死んだ生徒がいるのか。

…ん？何か固いの噛んだ。…ごぼう？

「私の知り合いに、まあ、仮にAとしておきましょうか。Aがね、言うんです。“伊織さあ、オレ、変なものみちゃった”って。あんまり真剣なもんだから、“なにが？”って、私聞きました、彼に。」

あ、歯茎に骨刺さった。地味に痛い。

「彼、首傾げながらね、“実は例のE組の子なんだけどね…事件の前の晩、学校来るとこ見たよ”って言うんです！“うそだ”、そんなんあるかい、うそだ”って、私、彼に言ってやりましたよ。E組の子、夜遊びするような人間じゃない。」

ハッ！どうだか。

…あ、骨抜けた。

「でも、彼、真っ青なんだ、顔。確かに見たって、ガタガタガタガタ震えてる…。私、考えましたよ。そうなんだ、倒れていたE組

の彼女お？…食われたんですよ、死んだはずの生徒に！夜中に学校にいたから食われて、だから倒れていたんだ！…って。」
夜中ねえ…。デザートは冷蔵庫の中か。ちよつととつてこようかな、みかんゼリー。」

冷蔵庫に取りに行く。

「私、ぞくーつとしました。ドゥーーつと、冷や汗が溢れ出ました…。世の中には、どーも不思議な事って、あるようなんですよ…。…まあ、全部私の推測なんですがね。」
「どうでもいい。」

時々急に食べたくなるんだよな…みかんゼリー。

順平は懐中電灯を頼りに明かりをつける。

「どう思う…明彦？」

「あら…？オレが熱演した件はスルー…？」

順平は全員で総無視します。みかん甘い。

「オンリヨウかはともかく、調べる価値はありそうだな。」

順平は岳羽さんを見てにやりと笑う。

「しっかし、ゆかりツチさ。お化けがニガテとは、チヨイ情けないよな。」

「な！？情けないって言った！？い、いーわよ、順平。だったら、調べよーじゃないの！」

…そこで意地を張ると、ろくな事ないぞ？

「お互い、これから一週間、色んな人からテッテーテキに話を聞いて回るワケ。怪談なんて、ゼツタイ嘘に決まってるし！」

…最後強調し過ぎだろ。不得手にも程がある。

それを聞いた先輩二人が反応した。

「それは助かる。気味の悪い話だからな。」

「えっ…」

「じゃ、宜しくな。あー怖い怖い。」

全然怖くないな真田先輩。

「ええっ…」

ようやく墓穴を掘った事に気付いた岳羽さんはがっくりと肩を落とした。

影時間

今日もタルタロスには行けずに自室のベッドの中でただ天井を見ていた。

久しぶりに気配を感じ、横を見るとやはりいつかのシマシマ幽霊少年がいた。

「こんばんは。約束通り、また会いに来たよ。調子はどう？」

「君か……」

何となく、少年はいつも笑っているような印象があった。

「覚えててくれて嬉しいよ。」

「……君は知ってる？一昨日の影時間の事。」

ふと少年にも聞きたくなった。

俺はどうしても納得のいく答えが欲しいらしい。

少年は微かに目を見開き、目を伏せた。

「君が彼女を助けた時だね。」

ひゅっつと息を呑んだ。

「……でも、僕は多分、君が満足出来る答えを持ってない。……ごめん

ね。」

「……あれは夢や幻じゃないんだな。」

どうしても確認したかったモノの一つ。

微かだが、確かに少年は頷いた。

それだけで気持ち少し楽になる。

勿論疑問が無くなった訳では無いし納得もしていない。

山岸さんは行方不明だし順平達との記憶の違いも分からない。

でも確信した。あれは夢じゃ無い。

現実だ。

「…君が体験した時間、彼等が体験した時間。その差が何かは分からない。ただ一つ、僕は君をずっと見てる。それは君の現実だよ。」
少年は一度目を閉じ、ふわっと微笑む。

「さて…後一週間でまた月が満ちる。そしたら次の試練がやってくるよ…。気をつけて。…また、会いに来るよ。」
シユオオ…

少年は消えてしまった。

俺にとっての現実。

彼等にとっての現実。

その間にあるモノは一体何なのか。

《彼等にとってはあれが普通。俺らこそが異端であり蛇足。》

頭の中にオルフェウスの声が響く。

顕現しなくても会話は可能のようだ。

「…どういう意味だ。」

ふっと笑ったのが分かる。

《謎の答えは君の中。時間が勝手に解決してくれるさ。》

暴走（前書き）

湊の通常装備

今更ですがとりあえず。

投擲用ナイフ 十六本

エアガン 一丁（鞆の中）

折りたたみ式ナイフ 一本

他、靴の中に鉄板が仕込んであったり。

素手でも戦うので多いと言う程多くもないです。…と、思います。

これは日常の装備なのでタルタロスは片手剣だったり何だっったりに召喚器が追加されます。

他にも増えるかもしれません。

…全ての装備を使う…予定です。

暴走

何故か俺まで巻き込まれて、オンリヨウについて調べなければならなかった。三年組はこっちに丸投げしやがったから。仕方なく校内で話を聞いて回る。

曰く、無気力症になった学生は合計で三人いる。彼女達はクラスや学年、部活等は違うが、よく家出をしていたという共通点が存在する。ポートアイランド裏にある溜まり場と呼ばれる場所で不良グループとつるんでいたらしい。程度が知れるってもんだ。

噂話を集めただけなので真偽の程は定かではないが確認のしようもない。

何せ当の本人達は無気力症だ。あーうーしか言わない人間から情報を聞き出すってのは無理な話だ。

とりあえず、荒垣さんに『怪談についての情報を下さい』とメールしておいた。

荒垣さんは見た目が不良だから他の不良どもも警戒心が薄れてくれないかな、とか思わないでもなかったり。

そんなこんなですぐに週末が来た。

「…という訳で、約束の週末ね。どう？二人とも、ちゃんと色んな人に話聞いた？」

「あれ、今日って何かの日だっけ？」

まあ、順平にとってはそんなものだろう。

「はあ!？」

ドスの効いた声で聞き返す岳羽さん。

頑張って調べていたようなので分からないでもないが。

「じよ、冗談だって！覚えてるっつもの。すぐ、怒んだから…。」

最後の方はボソツと岳羽さんに聞こえない位の小さな声でつぶやく。怒らせているのはお前だ。

「とにかく。今日は寮に戻ったらラウンジに集合。忘れないでよ。」

「へーい。」

順平はやる気のない声で返事をした。

これは行けるところまで行くんだろっつな。

ひそかにため息をついた。

夜 ラウンジ

椅子に座って二年生三人でテーブルを囲む。

ちなみに先輩達はソファで寛ぎ中だ。

「ハイ、では月曜に約束した通り、集めた情報の確認会をしますッ。」

「

岳羽さんはえらく気合いが入っている。

「おー、ノリ気じゃん。」

「当然。私的には、バツチり色々掴んで来たから。例の噂は、やっぱりオンリヨウの仕業なんかじゃないよ。」

「あ、そこ重要なんだ…。」

岳羽さんだからな。

「まず、この怪談騒ぎの、そもそもの発端からだけど…校門で倒れてた例の子の話は、確かにちょっと怪談の話と似てる。でも、一人がそういう目に遭っただけでこんな騒ぎになったのは、何故でしょう？」

…まさかの問題形式。俺らが調べたのかという確認か？

「…実は被害者が既に三人いた。」

「ハイ、正解！と言うか、驚いたよ！最初の事件のすぐ後に、実は

二度も同じ事が連発してたんだから！怪談と同じシチュエーションで、三人も病院送りじゃ、そりゃ騒がれる訳です。」

推理小説とかの再現か、これ。謎解く辺りがこんな感じだよな。

「えー、では次。被害に遭った三人はクラスがバラバラで、一見、何の関係も無いみたいに思えます。でも実は、水面下に共通点があったの。その意外な共通点とは何でしょう？」

順平はこのノリに堪えられなくなってきたらしい。

「何なんだよ、このノリ。誰のマネなんだよ？つかオマエ答えるよ。被害に遭った三人の共通点だってさ……。」

少し苛ついているのか、強い言い方だった。

調べもしてねえ貴様は黙ってる。

「…よく家出していた。」

「おっと、家出で正解です！それも結構ちよくちよく出てみたい。幾つかワルいグループと関わってて、路上オールとかしてる時に知り合ったみたい。三人とも同じ状況で見つかったんだから、この繋がりはゼツタイ何かあると思う。」

そこしか繋がりが無いしな。

「よって、更なる真相に近づくべく、現場取材を決行することにしたから。」

「は？現場取材？」

順平は一体どこに？と疑問を浮かべているようだ。現場といえばあそこしかない。

「被害者の三人が決まって夜明かししてた溜まり場ってのがあらしいの。」

「やっぱり。」

瞬時に順平が青くなる。

「お、おいそれ、もしかして、ポートアイランド駅前の、裏入ったところ……。」

「なんだ、知ってたの？」

「ってことは岳羽さんは知らないのか。」

「あそこヤバいって！あそこ、駅のすぐ裏だけど、マジ超いろんなヤバい噂あんだぜ？」

…本当に噂が好きだなこいつ。

「そーなの？なら、尚更みんなで行かなきゃ。」

俺らは身代わりの盾か？

岳羽さんはこつちを見る。

「ねえ、一緒に来るでしょ？」

当然、といった言い方に聞こえる。

「…どうでもいい。」

まあ、別に不良程度ならどうとでもなるし。

「それ、拒否しないって事だよな？」

「オレ、行きたくねーな…。あそこ、マジ、マンガみたいに荒れてんだよ。つか、そこまでする必要あんの、実際！？」
「啖きが段々大きくなっていった。」

正直、うるさい。

「だって、今まで私たち、先輩に言われたまんま動いてきたでしょ？このままでいいのかなって、そういう風に思わない？」

「や、そうかも知れないけどさあ…そこで真顔かよ、ズリいなー。ええー、行かなきゃ駄目？」

真顔が聞いたのか、順平は嫌々ながらも行くようだ。

「決まりね。明日の夜に出発予定だから、そのつもりで宜しく。」

明日の夜に、溜まり場へ向かう事になった。

…さて、どうするかな。

「あそこってさ、月に何回か集会が開かれんだ…。で、近隣のワルというワルが一堂に会し、さながら監獄みたいな光景が…。つーかあの集会って、話だとモロ明日だったような気が…。うわ、ヤベエ…。いやホント、マジでヤベエって…。」

ぶつぶつと呟く順平。

どうでもいいのでそのまま放置した。

翌日 夜 ラウンジ

投擲用ナイフ等隠し持っている武器を全て自室に残し、手袋を指先から第一関節までが金属で覆われている黒のものに変えた。

…一応準備だけ、な？

「…という訳で、昨日の約束通り、出かけるよ。」

岳羽さんは凄く気合いが入っている。

怨霊じゃないと分かったからか？

対照的に順平は行きたくないオーラ全開だ。…多分あれがそのオーラ。

「すげー、ノリ気だ…。ヤベエと思うなあ、のこのこ行くの。なんでもオンリヨーは駄目でこういうのはアリ何だか…。」

「駄目と言わない。見えないものは誰だって気味悪いでしょ。」

…否定はしないけど、見えるものにも多少は恐怖しなよ。

いくらタルタロスを探索しているとはいえ、シャドウと人間は違う。シャドウも人間から生まれたものらしいが人間の方が遥かに陰険で面倒だ。

「見える方が怖いだろうがっ！バットとか光りモンとかさ！」

…順平はもう少し怯えないようにしようか。普段からシャドウの攻撃食らってる癖に。

「もう…フリーヨーの溜まり場くらい何よ？ほらほら急いだ。先手必勝なんだから。」

岳羽さんは扉を開けて出て行った。

「必勝…？」

順平はポカンとしていた。

まあ、何か間違ってるよな。

「…頑張れ。」

「こんな時だけオレリーダー！？」

「…いざとなったら、岳羽さんを連れて逃げろ。」

「お、おおう！」
順平の返事を聞いて寮を出た。

辰巳ポートアイランド 裏路地

昼と夜では景色の顔が変わると言うが、ここも例外ではない。実は昼間に一度来たことがあるのだが、今程危険な空気はなかった。…とはいっても俺にとってはタルタロスの何分の一程度だと思うが、今日がワルの集まる集会の日だからだろうか？

進んでいくと、家が一軒建ちそうな不自然な空間に数人の男女がたむろしていた。

その内の一人、常連らしき茶髪オールバック、ピアス三つに変な柄のシャツを来た奴がこっちに気付く。

「うわー…雑魚っぽい。」

「…んだ、あれ？」

真ん中分け茶髪、オレンジ服の色白な常連の仲間がそれに返事をする。

「つか、あの服…月高じゃん。」

「ヤベエ。想像してたよりずっとヤベエ。」

順平うるさい。

「ちつと、オマエらさ。遊ぶとこ間違えてんじゃねえの？」

英語の発音で日本語を話したような変な発音。

「かつこいいわけあるかばけえ。」

岳羽さんの腕を掴んで順平より後ろまで下がらせる。必然的に順平が一番前。

「あ…いや、別に…。」

怯える順平を見た常連は鬱陶しいと顔に書いてあった。

「フウ…オマエらみたいなの来っとシラけんだろ…。帰れよ、ヒゲ男くん。」

「ヒ、ヒゲ男くん？」

ここにヒゲがあんのはお前だけだ順平。

びびって思考停止してんじゃねえよ。

「あ、あー、オレの事っスね…。」

「ここ来るのに、何であんたの許可が要るワケ？」

せつかく順平が揉め事を起こさないように対応していたのに横から

岳羽さんが余計な口を開いた。

俺はもつとやればいいと思う。

「ちよっ、おまつ、バカかよ！オマエあれか！？空気詠み人知らずか！？」

「なにそれ…って言うか、こんな連中にビビらないでよっ！」

「ああ？」

常連さんは岳羽さんの言葉の中に怒る要素があったらしい。

何と言うか…プライドちっさ。

端に居た少女…にしては化粧が濃くておばさんっぽい茶髪ロン毛の赤く胸元が開いてる服を着た彼女が口を開く。

この女子はおばさんしかいないらしい。

「こんな連中つつつたよ、そのコ。つか、写メとか撮って流しちゃ

おーか！パパとかが気を失うよーなセクスイーポーズなやつ！」

少女たちは自分達の言葉に爆笑する。

ばばあの思い付きは最高だな。底辺過ぎて障りたくなる。

「きゃははははっ！！やべ、ちよーウケるっ！！」

耳障りな笑い声だ。

「こいつら、サイッター…。」

岳羽さんは小さい声に明らかな嫌悪感をたっぷりと込めて呟く。

耳はいいのか、常連はそれをはつきりと聞き取った。

「あちゃー、彼女今、サイテーとか言ったよね。ヒゲ男くんも大変だ。こんなアグレッシブなコと一緒にだ…サ！」

常連は顔に笑顔を張り付かせて話しながら順平の腹を目掛けて拳を突き出してきた。

即座に順平を掴んで後ろへ引き、順平の前に半歩出る。

「でっ…」

順平は引つ張られた勢いそのまま尻餅をつく。
拳は俺の腹を捉えた。

「有里君…！」

この程度、何と言う事もない。

「…逃げる。絶対に広場に入ってくるなよ。」
後ろの二人に向かって言う。

「でもっ…！」

順平はすぐさま立ち上がり、まだ言おうとする岳羽さんを掴んで強引に引き下がる。

「離してよ順平！」

「いいから下がっぞ…！」

言い合いながらも二人は狭い通路まで下がる。

…じゃあ、久しぶりに暴れようか。

「んだよテメエ、正義のヒーローのつもりか！？邪魔してんじゃねーよ…！」

俺は顔を上げて常連を真っ正面から見た。

常連達がたじろぐ。

思わず笑いが出る。雑魚が。

「正一当！防衛衛！」

握った拳を常連の腹に打つ。

「…くはっ！」

常連が腹を抱えて膝をついた。

本気はまだ出してないぞ？

常連の髪を掴んで数センチまで顔を近づける。

「ハハッ！屑二毛劣ル汚物ノ分際デデシヤバルナ、下郎。」

そのまま髪を力任せに引つ張った。

ブチブチと音を立てて髪が抜ける。

「ぎゃあああつ！」

反応が大袈裟すぎだよ。

たかが髪を数十本抜いた程度でいちいち騒ぐな。

手を軽く振って髪の毛を払う。べたついていて気持ち悪い。

悲鳴を聞いて建物からこれまた変な柄の服を来た不良が十数人湧いて出た。各々、手にはバットやら鉄パイプやらナイフなんかを持っている。

どうなってもいいらしい、と勝手に解釈する。

いいね、もっと殺ろうか。

意識をより深いところまで沈めるイメージ。

自らの奥深くに封じた力を少しだけ引きずり出す。

∴世界が一変した。

辺りの空気がすうつと冷気を運び、気温が下がったような錯覚が生まれる。夜とはまた違う闇が光を侵食してくる。

辺りを満たすのは純粹な殺気。

それは有里湊から発されるものだった。

湊は体から力を抜いて無防備な姿で立っているが不良達は空気に呑まれて誰ひとり動くことができない。

全員の視線が集まる中、湊の姿がノイズが走るようにぶれて変化する。

体を包む薄手のコートは赤黒く、まるで頭から血を被ったかのようにだ。フードは縁がまるで化け物の口のようにぎざぎざとしていた。左腕には鎖が巻き付き、地面にまで届く鎖の先には逆十字の刃がついている。腰にあるホルスターには二丁の銃が収まり、顔には道化師の仮面がはまっていた。

その場にいるもの全てが本能で理解する。

あれは、死神だ…と。

荒垣はあの三人が現れた事に気付いてからずっといつ助けに入るか見ていた。

揉め事になれば即座に追い返すつもりだった。

来た理由はだいたい予想できたが理解できない。

あいつは一体何を考えているのか。

《別に放置してればいいよ、あんなの。》

唐突に背後から声がした。

慌てて後ろを確認する。

空中で足を組んで肘をつくペルソナがいた。

《や、はじめまして。有里湊のペルソナのオルフェウスだよ。》

オルフェウスと名乗ったそのペルソナはおどけた口調とは裏腹に真剣な表情をして前方を見ていた。

「…影時間じゃないのに出てこれんのか。」

《そりゃ喚べば出るさ。でも俺は特別だからね。湊は俺を喚んでないし俺が出る事に気付いてない。ああ、だからって暴走とは違うから安心していいよ。》

真っ先に頭に思い浮かんだペルソナの暴走という可能性を潰される。《それより問題は貴方だ。湊は限定的だけど力を解放する。本人は自覚しているのか知らないけど、その気になってる。そうしたら一番貴方が危ない。》

荒垣は眉間に皺を寄せた。

それでも荒垣はここらの普通の人間より強いと自覚している。

一番危ないとはどういう意味か。

《まあ、俺が逃げろって言っても貴方は逃げないよね?》

「当たり前だ。」

するとオルフェウスは大袈裟にため息をついた。

《…なるべく動かないでよ。護りきる自信なんてないんだから。うつかり死んだからって、文句は言わないでよ。》

「…あ?そりゃ、どういう…。」

荒垣が聞こうとした時、溜まり場の空気が異質なものと変容した。目を見開いて驚く荒垣を余所にオルフェウスはいつの間にか黒く染まっていた背の豎琴を振り下ろす。

タン、と地面に触れると透明な何かが地面を走り、荒垣に絡み付くように辺りを漂って消える。

《ふう。仕事終了ー!》

かいてもいない汗を拭うオルフェウス。

「…何をした。」

荒垣の声にオルフェウスが初めて荒垣を見る。

「あれは、何だ?」

《何って、有里湊だよ?内包する死を表にちよろつと出した感じ?》

「う、うわあああつ!」

不良の一人が恐怖に耐え切れずに叫びながら湊に襲い掛かる。

《あーあ、馬鹿だねえ。逃げればいいのに。》

他の不良も武器を振りかざして向かっていった。

《下手したら死ぬね、あれ。》

「お前っ!」

《だって、ほら。》

オルフェウスが指差した先では湊が鎖を振り回し、銃を乱射していた。

《一応、実弾じゃあ無いんだけどねー。なまじ威力が高いから当たる場所によっては逝きかねないかなー?》

オルフェウスが全て言い切る前に荒垣は走り出していた。

《やっぱいい人だね。後は全て俺次第…。フフツ…警告はしたからね?》

オルフェウスは音を立てずに消えた。

不良が鉄パイプを振りかざす。それを何の感慨もなく見つめた。

恐怖から繰り出された攻撃は腰が引けていて当たっても無傷で済みそうだった。

だからといってくらくらってやるつもりも無い。

腰のホルスターから銃を抜き、鉄パイプを受け止める。

から空きになった胴に蹴りを入れた。

後から駆けてくる不良どもを視界に入れ、左手で勢いをつけて体を回転させ、鎖で牽制すると共に銃を乱射した。

面倒だがとりあえず頭だけは狙わない。

弾をくらって呻きながら膝をついた不良どもにとどめをさす為に拳を握る。

一番近い奴からやろうとしたとき、“何か”が乱入した。

“それ”の容姿は確認できる。コートにニット帽、目付きの悪いこの人は荒垣さんだ。

それは分かる。

なのに分からない。

見えて認識しているが理解できない。

俺は“何と”対峙している?

荒垣さんの動きは速かった。

一気に距離を詰めて腹を殴りに来た。

「がはっ……！」

まともに入る。衝撃が突き抜け体がくの字に曲がり、肺の空気が全て出た。

綺麗に鳩尾を捉えていたようで息が吸えない。

その一撃は俺の中の“それ”を決壊させるのには十分だった。

空気が確かな重みを持った。

地面に押し付けられるような威圧感。

明らかに体の動きが鈍る。

この場は“何か”に支配された。

順平達は狭い通路まで下がり、様子を見ていた。

最初こそ助けに行こうとしていたゆかりも今はただ呆然と見るだけだった。

床にうづくまつた湊が黒い闇のような霧を身に纏っている。それはシャドウが消える際になるもののように、今にも爆発してしまいそうだった。

荒垣さんに殴られた事が嘘のようにスムーズに立つ。

服装が変化した時点から表情が一切消え失せた顔は今や虚ろとなり、意識があるのかもはっきりしない。

辺りにいた不良達は耐えられなかったのか、既に気絶していた。

一番近い場所に居る荒垣は歯を食いしばって耐えているが、今にも膝をついてしまいそうだった。

額には冷や汗が浮かび、微かに体が震える。

湊がゆっくりと首を動かす、荒垣を見る。

湊の目が微かに細くなり、黒い霧がざわりと動いた時、二人の間にオルフェウスが現れた。

《はいはい、ちゃっちゃと殺ろうかー？》

オルフェウスは素早く湊の首を掴んで地面に押し倒す。

《勝手にリミッター外してんじゃないよー？天誅ー！！》

オルフェウスは左手を湊の額に押し付ける。

左手が白から黒へと変化した途端、湊の表情も一変した。

「あああああー！！！」

男とも女とも、若者とも老人ともとれる、とても人から発されるものとは思えない悲鳴がほとばしる。

虚ろだった表情も今は目を見開きぎりぎりまで口を開けている。

半狂乱、とでも表現すべきか。

四肢をばたつかせて暴れる湊をオルフェウスはたやすく押さえ込む。

《はいはい、痛い痛い痛い飛んでいけー。》

黒い霧は幾つもの塊となって空に打ち上がり、シャドウのようにすうっと溶ける。

それに併せて湊の姿が二つにぶれる。

全ての霧が抜けきると、姿の戻った湊はぐったりと脱力した。

湊の暴走が一段落ついてもその場に居る者は動くことが出来なかった。

既に辺りを包んでいた殺気も消え、時間相応の暗さで満ちている。

順平、ゆかり、荒垣はただ湊を警戒して見つめていた。

…彼がどう動くのか。

危機が完全に去ったかどうか確認する術を持たない彼等はただ、次の動きを待つことしかできない。

そんな彼等の心情を知ってか知らずか、オルフェウスが湊から手を離す。

《…大ー丈ー夫？暴走は終わったよ？》

オルフェウスは肩を回し、腰を伸ばす。

《…っあー、っつかれたー。残業終ー了ー…。湊ってば本気で暴れ

るんだもん。》

オルフェウスの体にジジツとノイズが走る。

《…アラ？予想以上のダメーイジ？これはこれは…。》

「…さっきのは何だ。」

荒垣の問いで離れていた順平達も警戒心は抜けていなかったがとりあえず近づいて来た。

《えー…説明しなきゃダメ？…んー…無理！》

オルフェウスは少し上を見て考えるそぶりをしたがすぐに笑って返事をする。

《何が無理って、時間が無いんだよねー。》

オルフェウスは順平とゆかりに向き直る。

《…謎だらけは不気味で不安だと思っけどね。湊だって人間だよ。

…忘れないでね。》

それだけ言い残すとオルフェウスは消えた。

荒垣はオルフェウスが消えた後、漸く順平達をまともに見た。

「その顔…お前ら、アキの病室に居た…。」

ボソツと呟いた声は小さかったが二人までしつかりと届いた。

「…バカ野郎が！帰れ。お前らの来るトコじゃねえ。」

「ごめんなさい…でも私たち、知りたい事があって来たんです！」

空気に吞まれていたゆかりは荒垣の言葉を聞いて本来の目的を思い出す。

「…アキに言われて来たのか？」

「…え？」

「…フン。」

何故そこで明彦の名前が出て来るのかわからなかった二人を見てそうでない事を悟る。

荒垣は近くのひっくり返したビール箱に座った。順平とゆかりも近くに移動する。

湊はそのまま放置した。

「知りたい話つてのは何だ。例の怪談とやらか？」

「そうですね…え、なんで分かったんですか？」

予想が当たり、軽く舌打ちをした。

「…怪談について知っていることは全てメールであいつに伝えただかな。」

「え、あ…彼は何も言っませんでしたけど…。」

ゆかりは“有里君”と言おうとして迷い、“彼”と言い直した。

そこには湊に対する恐怖や、その他様々な思いが入っていた。

荒垣はうんざりとした表情で湊を見た後、説明を始めた。

「ウワサだ。病院送りになった女どもが、その辺にタム口って毎日話してた。山岸って同級生を色々イジってるってな。」

「山岸って…E組の山岸風花？あいつ、イジメに遭ってたのか…。」

「おかげで騒がれてるぜ…。犯人は、その山岸の怨霊だ、とかな。」

「山岸さんの怨霊って…え！？それ、どういう事ですか？」

荒垣の言葉にゆかりが驚き、それに対して荒垣が驚く。

「お前ら…知らねえのか？その山岸ってやつ、死んでるかもって。」

もう一週間かそこら、家にも戻ってねえって話だ。

「どうなってんだ？山岸って、確か、病気だって…。つか、行方不明って事じゃねえか！」

「これ、もう怪談じゃないよ…。E組の担任って江古田でしょ？アイツ、この事知ってるのかな…。」

予想の斜め上を突き抜けた現状に二人は苦い顔をした。

「そうか、アキのやつ…あの日出来なかった事の代わりってか？…たく…過去をきれねえのはどっちだってんだ…。」

「…？」

荒垣のぼそぼそと話す声に内容まで聞き取れなかったゆかりが怪訝な顔でみる。

「なんでもねえ…。知ってるのは、そんだけだ。…もういいか？」

「あ、はいっ！お世話になったッス！」

「あの、ありがとございました。話も聞けたし…。…優しいんですね。」

「あ?」

「あ、ごめんなさい…。」

「…もう来んな。」

荒垣はあからさまに疲れた声で言った。

順平達が頭を下げたとき、後ろから微かな呻き声が出た。

即座に全員が振り返るとそこにはゆっくりと体を起こす湊がいた。

三人は咄嗟に構える。

オルフェウスは“大丈夫”と言ったが疑問形だった。

三人ともオルフェウスの言う事が曖昧だろうとなかろうと信じられないのだが。

そんな三人の様子を見た湊は微かに笑う。

「…欲しい情報は聞けた?」

何を話すべきか悩むゆかりと順平を見た荒垣が口を開く。

「知っていることは話した。…お前はなんでこいつらをここに連れて来た。お前ならどうとでもできただろうが。」

湊はぼかんとした顔で首を傾げる。

僅かながら暴走前より表情が豊かになっているようだ。

「…本人から聞いた方が信憑性が高いから。ここにガキさんがいるかどうかは分からなかったけど、だから何って事でもない。」

淡々と話す湊に荒垣がつかつかと近付き、胸倉を掴んで揺すった。

「お前は自分の仲間を危険な場所に送りこんだんだぞ。分かってんのか!」

「…っはっはっはっは!仲間…ねえ。くっくっくっ!」

軽く荒垣の手をはらう。

「…実験だよ。ちよつと大きなものを賭けた実験。」

「仲間を賭けたのか。」

荒垣の声はいつも以上に低くなっていた。

「…仲間?なんでわざわざそんなものを賭けないといけないんだ。」

湊は立ち上がったがまだふらふらとしていた。

「…荒垣先輩、ありがとうございます。今日はもう帰ります。」
湊はそのまま背を向けて溜まり場を後にする。

荒垣はまだ言いたい事は山ほどあったが心の内に止める。

「…お前らも帰れ。」

「…あ、はい。」

「う、ウツス。」

荒垣の言葉で漸く回復した二人は何とか返事をする。

「…先輩は、怖くないんですか…？」

怖ず怖ずと聞いてきたゆかりに荒垣は少し間を置いて口を開いた。

「…さあな。いいから帰れ。そいつらが起きると面倒だ。」

「あ、はい。ありがとうございます。」

「失礼しまっス！」

そして遅れながらも順平とゆかりはその場を後にした。

暴走（後書き）

湊の死神バージョンの格好は刈り取る者とタナトスとメサイアとオルフェウスから出来てます。

コートと銃は刈り取る者、手袋とフードのぎざぎざはタナトス、左に巻いている鎖はメサイアで仮面がオルフェウスのつもりです。

一応、コート内に匕首も仕込んであります。（タナトスの剣）。

侵入（前書き）

湊の使った力はデスの封印を緩めて出したのではないです。
デスの封印自体は湊にどうこうできません。

侵入

ベルベットルーム

パアン！

静かな曲の流れるだけの、イゴールもエリザベスもない空間に音が響いた。

《…何で叩かれたか、分かるよね。》

叩かれた湊に叩いた本人であるオルフェウスが声を低くして言う。

《やり過ぎだよ、湊。あの程度、解かなくても十分相手に出来たはずだよね。》

湊は叩かれた格好のまま頬に手をあてる事すらしない。

《…何が分かるわけでもないのに実験だとか言っつて、本当はそんな気ない癖に。》

オルフェウスの体にノイズが走る。

その音にも湊は反応しなかった。

《…湊、このままだと君はずっと独り。それでいいの？》

湊は全く返事をしない。

オルフェウスはため息をついた。

《…俺は何とかして暴走した湊を止めただけだけど、そのかわり受けたダメージが大きいからもうペルソナとして顕現する力もない。

湊はオルフェウスという仮面を被ることが出来ない。》

湊の視線が初めてオルフェウスを向く。

《俺が回復するまで、湊はもう全てから目を背ける事は出来ない。今までの様に曖昧な返事で話を切つて逃げる事は出来ないんだ。》

「…どうでもいい。」

《…そう。…じゃあ俺はもう休むよ。バイバイ。》

そしてオルフェウスが消え、湊が残される。

「…あ、消えた。」
自らの中のオルフェウスが消えた事を、感慨なくどこか他人事のように呟いた。

朝

唐突に目が覚める。

瞬きをしただけのような感覚。

寝ていた筈なのにずっと起きていたような違和感。

相当眠りが浅かったのだろう。先日の疲れは全く抜けていない。

体が怠く、動くのも億劫だった。

携帯で時間を確認する。

時計は既に八時過ぎを指している。さらによく見ると月曜日だ。急がなければ遅刻する。

仕方なく起き上がった時に携帯が鳴った。

画面に総司の名前が表示される。電話だった。

「…何？」

挨拶も入れずに直接用件を聞く。

時間が無いので準備をしがら電話する。

「やつと繋がった。兄さん、大丈夫？」

「…何が。」

少し苛立った声になっていた。

電話をスピーカー状態にして制服に着替える。

そういえば六月から制服が夏服となった。俺は夏服の下に通気性のよい黒の薄い長袖を着る。

「…この前から嫌な予感がするから電話してみただけ。湊兄さんまた何か変な事してないよね？」

「関係ない。放って置け。」

「…またそこらの不良と喧嘩した？」

着替えを終え、かばんと携帯を持って部屋を出る。

「…だったら何だよ？」

『いい加減止めなよ湊兄さん。そっちでも孤立してどうするの？』
オルフェウスに言われた事を思い出す。

「…同じ事を言うんだな。」

小声でボソリと言った声は総司までは届かなかった。

『そんなだといざという時に頼る相手が無くて困るのは兄さんだからね。』

「…どうでもいい。」

『よくないから言ってるんだ！いつまでもそうやって自分を殺し続けることなんかできないんだよ？』

「うるさい！！」

怒鳴ると同時に階段を踏み外す。あ…と思ったのもつかの間、一番下まで落ちた。

体のあちこちを打ち付けて全身が痛む。

踏み外した時に携帯も落とし、微かに心配する声が洩れていた。

その場に座り直し、携帯を拾う。

『兄さん？湊兄さん大丈夫！？』

「…悪い。今、ちょっと混乱してる。…落ち着いたら、またかけるから…。」

『…分かった。…じゃあ、また。』

「…じゃ。」

電話が切れて顔を上げると、ラウンジには順平がいた。

「…おはよう。」

「お、おう！おはよー。」

順平は拳動不審ながらも挨拶を返してきた。

「えっと…大丈夫か？」

「…何が？」

「いや、ならいーんだ。ハハッ。」

順平は早足で寮を出て行った。

一人になったラウンジを見渡す。窓から光が入っては来るが全体的に暗い室内。どこか寒気を感じた。全身の痛みがだいぶ引いてくる。扉に足を向け、そのまま寮を出る。朝食はどうでもよくなった。

教室に入ると順平と岳羽さんがいたが二人ともどこかよそよそしかった。

…自業自得、と思うべきなのだろう。

昼休み

前に時価ネットで買ったツカレトレールを一気飲みした後、山岸風花が行方不明になっている件を江古田先生に聞きく為に三人で職員室へ来た。

…三人でと言っても俺は数歩後ろをただついていくだけだったが。職員室のドアを開ける。

江古田先生の席には桐条先輩と、茶髪の女子生徒がいた。

「あれ、桐条先輩、どうしてここに？」

「君らと同じさ。」

桐条先輩は一度こちらを見ると、再び江古田先生に向き直った。

「先生、事情を伺いに参りました。“山岸風花”という生徒について…。」

「違うのっ!! 違うのよ…! こんな…! こんな事になるなんて、思わなかった…。風花…。」

江古田先生に向かって言っていたが茶髪の彼女が話に割り込んでくる。

彼女も関係者だったらしい。そういえば聞き覚えのある声のような気がする。

岳羽さんは彼女に見覚えがあったようだ。

「あれ：あなた、確か、前に…。」

「山岸をどうしたんだ？」

先輩にしては優しい口調だったと思うが、江古田先生はそう思わなかったようで、彼女を庇う。

「おいおい、桐条君、そんな言い方ないだろう？森山も困っているじゃないかね。なあ、森山。話したくなくないんだぞ。お前が余計な事を言っつて山岸が変に思われてもいかんよ。」

訂正。先生には言われたら困る事が絶対にある。

江古田先生の言葉を聞いて逆に話す気になったのか、森山さんがぼつりぼつりと話し出す。

「風花つてさ…ちょっと突っついただけで、いつも世界の終わりみたいな顔すんだ…。すぐ分かったよ…。コイツ優等生のクセに、根っこ、アタシらと同じだって。どこ踏んずけときゃ立てないか…？アタシには丸分かりだった。…だから！あの日もほんの遊びのつもりだったの！五月二十九日…風花を体育館につれてつて…外から鍵かけて…。」

「ちよっ、おまつ、閉じ込めたっつー事かよ！？」

順平をはじめ先輩や岳羽さんも驚いている。

五月のあの日、山岸さんが閉じ込められていた事は彼らにとっても現実か。

つまり消えたのは俺がその場にいたという事、彼女がその日の影時間内に救助されたという事実のみというわけだ。

森山さんの話は続く。

「夜中になつて、自殺とかされるとマズいからって、マキが一人で学校行つたんだ…。でも、マキ帰って来なくて、翌朝…。」

「校門で倒れているのが見つかった、か…。」
語る声は恐怖からか、淡々とした声に段々と感情がのり、大きくなっていく。

「風花を出さなきゃって体育館行ったら、まだ鍵掛かったまんまで…ヤバいって、すぐ開けたんだけど、そしたら風花、消えちゃって

て…。アタシら、みんなビビって、次の晩から夜な夜なあの子を探しに行ったの…。でもその度、行った子が帰って来なくて…。みんな次々、マキみたいに…！」

ホラーの映画や小説でよくあるネタだな。

「なるほどな…。ところで、連日の山岸風花の欠席を、先生は“病欠”と届けていらつしやる。だが実際は行方不明で、先生はそれをご存知だった筈だ。…どういいうおつもりです？」

先輩の正面からの威圧に江古田先生は気圧されるが、何とか言葉を発する。

「何を言ってる。生徒のためにした事だよ。みんな色々、将来の為に都合があるんだ。子供の君らには分からんだろうがね。」

明らかに生徒を、いや若者を馬鹿にした発言に先輩は冷たい視線を浴びせる。

あの視線の前で隠し事はできなそうだ。

「失踪して警察ざたになる問題児など、ご自分の組には居ないという事ですか。」

「ほ、本人の為だ。こんな事で学歴に傷がついてはいかんだろ？親御さんも、そういう話で納得してんだよ！」

本人の為と言う建前の自身の為の病欠か。

「…先輩、知っていますか？」

俺を見た先輩は一瞬眉をひそめたがすぐに元の顔に戻る。

「五月二十九日の山岸さん失踪日。担任ともあるう江古田先生は早引きをしています。」

その場に居る者全てが頭上に？を浮かべている。

「それがどうした？」

「実はその日に江古田先生の授業が入っていたのですが代わりに江戸川先生が来ました。江戸川先生によると特に体調不良には見えなかつたそうです。授業を放棄してまでするべき用事とは、一体何でしょうね？」

江古田先生を見ると全く目を合わせようとしなかつた。

なのでついでもうひとつ。

「岳羽さんがあの日に聞いた会話はイジメについてだった？」

「え、う、うん。」

「接点が無いに等しい彼女ですら知っている話です。先生の下までその情報は入っていたんじゃないやありませんか？別に生徒からの密告じやなくても、イジメの噂は随分と広がっていたようですから知っていてもおかしくないですよ？保身の為にイジメをする側を擁護するってのは先生としてどうなんでしょう？」

聞いていた先輩は江古田先生をばっさり切り捨てた。

「保身の為には教職の本分すらも捨てるか。下衆め……！」

「ゲっ……いや……。そんなふうに……言わなくてさあ……。」

さすがに下衆は効いたようで先生が明らかに小さくなった。

先輩は既に江古田先生と話す気は無いらしく、森山さんに向かって口を開く。

「病院に運ばれた君の友人について、なにか、気付いた事は無いか？どんな細かな事でもいい。」

「……。」

森山はひとしきり考え、気付いた共通点を上げ始めた。

「“声”だ……。自分と呼ぶ“声”……。そうだ……。みんな病院送りになる前の晩……。そういえば同じ事言ってた……。気味のワルい“呼び声”を聞いたって……。」

「声……？」

順平は分からないようだったが、岳羽さんはすぐにある可能性に気付いた。

本来ならばありえないと思うのだろうが、そのありえないものが既に日常である今、嘘だと切り捨てられない。

「先輩……もしかして、今回の事件って……！」

「間違いない……ヤツらの仕業だ。誰が影時間に落ちるかを事前に知る方法は無いとされてきたが……なるほど、“声”か。つまり影時間

へは“落ちる”のではなく、ヤツらによって“落とされる”という事だな。実際の被害を目の前にすると思ひ知る…。ヤツらは確かに人間を“狙っている”んだ。シャドウ…紛れも無く人類の敵だ。」
半ば独り言のように呟く。端から見たらただのイタイ人だろう。
「今夜は私達の寮に泊まるがいい。それが一番安全なはずだ。もしも“声”を聞いてしまったら、直ぐに教えるんだ。何かに呼ばれたように感じても、決して部屋から出るな。これさえ守れば、君は助かるだろう。…そしておそらくは“山岸風花”もな。」
「風花：。」

美鶴はこちらを見る。

「有里。それから伊織、岳羽。放課後、生徒会室に集合だ。そこで今回の作戦について説明する。」

「こ、今夜ツスカ!?」

「今夜、山岸風花を救出する。おそらく彼女はまだ、この学園から出ていない。」

「わ…分かりましたっ!」

職員室という公共の場でしていい話ではない気がするが本人達が気にしないならば別にいいと思った。

その場は燃え尽きたような江古田先生を残して解散となった。

放課後

ドアに“本日生徒会中止”と書かれている生徒会室に来る。

全員が揃った段階でドアに鍵が掛けられる。

集まった仲間達は、それぞれ思いつめた顔をしていた。彼らから少し離れた場所に座る。

桐条先輩が室内を一通り見た後、口を開いた。

「今夜、この学園への潜入作戦を行う。目的は山岸風花の救出だ。」

「あの、イマイチ分かんないんですけど、山岸って、ガッコの中に居

るんすか？」

「しかも、なんで夜に？零時になっちゃったら、学園は…。」
順平、岳羽さんの問いに桐条先輩が答える。

「その通り。山岸もそうやって、タルタロスに迷い込んだんだ。」

「じゃ、まさか山岸さんって、体育館に閉じ込められてからずっと…。」

「…そうだ。」
嫌な予想が頭に過ぎる。

脳内で手を合わせた。

「そんな！十日も前の話じゃないツスか！それ…どう考えても…。」
辺りに漂いだしたネガティブな空気を払拭したのは真田先輩だった。
「いや、悲観するのはまだ早い。タルタロスは影時間の間にしか現れない。なら山岸風花は、日中は何処に居ると思う？」

「言われてみれば…」

「こいつは仮説だが、恐らく山岸はあの時からずっと影時間に居るんだ。つまり十日と言っても、山岸にとっては影時間を足し合わせた分しか時間が過ぎていない。生存の可能性はある。」

「おおっ、マジッスか！？」
それを聞いた順平の表情が明るくなる。

僅かな可能性でもあればそこに希望を見いだせる、といったところだろうか。

「あ…でも影時間って、慣れたオレらでも、居るだけで結構バテるじゃないスか。あれを十日分ぶつ通しつてのは…。」

誰も体験した事はないがその辛さは容易に想像できた。

「そついえば、そうね…。それに、たとえ見つかったても、場所によつては辿り着けるかどうか…。」

「なら、このまま見殺しにするのかっ！…方法はある。山岸と全く同じ方法で中に入るんだ。同じ場所へ行つて、零時を待つ。そうすれば短時間で辿り着ける。」

自信を込めて真田先輩が言うがあまり賛成する雰囲気ではない。

「その方法、大丈夫なんですか…？」
ゆかりの問いに美鶴が答えた。

「正直に言えば、私はこの作戦には諸手を上げて賛成は出来ない。最悪、二重遭難という可能性もある。しかし…。」

「助かる可能性があるのに、放っておくなんて俺には出来ない…。」

「後悔したくないんだ。お前らが行かないなら、俺一人で行く。」

「先輩…？」

真田先輩はいつになく意地を張っているように見える。

そこに譲れない何かがあるらしい。

そんな真田先輩に桐条先輩が折れた。

「…分かった。危険は承知だが、このまま放置するわけにもいかないからな。」

「そうですね。やってみないと分からないし。」

「おし…夜の学校に侵入か！へへッ。そうと決まれば“アレ”だな

…。」

「…アレ？」

その問いに返事が返って来る前に桐条先輩が口を開く。

「…有里、作戦前に聞いておくべき事がある。」

話が終わったものとして立ち上がりかけていたが大人しく座り直す。

「本当は昨日話そうと思っていたんだが、君が部屋から出てこないからやむなく今日まで延ばした。」

軽く頭を下げる。

「…すみません。昨日は消費のし過ぎで一日寝ていました。」

本当はベルベツトルームでオルフェウスに怒られていたのだが。

説明したところで扉の見えない彼らが理解出来るとは思えない。

「…昨日の件は二人に聞き、荒垣からもメールで知らされた。…単
刀直入に言う、あの日君は何をした。」

全員の視線を感じる。

当然と言えば当然か。自分達の安全が懸かっているのだから。
左手を軽く握る。

「それに君のペルソナは…。」

「…心配しなくてもオルフェウスはもう召喚できない。暴走もしない。」

「根拠は何だ。」

聞いてきた真田先輩を見ながら答える。

「…暴走時に力の殆どを消費した。今は人を殺せるだけの威力は出ない。エネルギーが無ければ暴走もできない。…ペルソナ、オルフェウスはあれが仕様。…俺とは違う人格を持った…俺。」

「多重人格…というわけか？」

視線を逸らす。

「…分からない。けど、多分違う…はず。」

「自分の事だろ？」

「…じゃあお前は自分の事を全て理解しているのか？」

順平が言葉に詰まった。

屁理屈な問いだった。誰だってそれに自信を持って“はい”とは答えられない。

「…どれだけ説明しても結局は俺の感覚で捉えたモノを告げるだけに過ぎず、信用に値する裏付けは全くない。ここには俺を信じるか否か、その二択しかない。特に二人はあの場で体感している。」

一呼吸置いて顔を上げる。

「…だから、今回の作戦、俺は現場で指揮をとらない。」

全員の表情が目に見えて変わる。

「責任を放棄すると言うのか!？」

桐条先輩の言葉にゆっくりと首を振る。

「…今の俺に現場を纏め上げる力は無い。」

静まり返る生徒会室にただ淡々とした声が続いた。

「…今回の作戦、全員がばらばらになる。あれだけ建物が変化するんだ。同じ場所に行けると思わない方がいい。そんな状況で現場リ

「リーダーが指示してくれると期待するな。…それに、不安が消えない内は組まない方がいい。」

あの時タルタロスへと変わる校舎の中は正に天変地異だった。だが今ならば彼らでも無理しなければ対処のしようもあるはずだ。…山岸さんがあの階周辺に居れば、という前提ありきだが。

「…だが、それでも現場リーダーは必要だろう？」

「…じゃあ、リーダーをテレットとして他の二人がその補助とすればいい。」

「どうしても行かないんだな。」

桐条先輩の視線を真つ正面から受け止める。

先に折れたのは桐条先輩だった。

「…今回だけだぞ。」

「先輩！」

岳羽さんが反論しようとする。

「こうなっては仕方ない。私も出来るだけの事をしよう。」
俺は一礼して部屋を後にした。

「…肝心のあれが何だったかについては説明してくれなかったな。」

夜

既に準備を終えた全員の集まる作戦室。

美鶴は作戦室内の大きな機械を弄る。

「困ったな…。理事長に連絡が取れない。」

「まあ、いいんじゃないですか？」

「一つだけ面倒がな。理事長の口添えがないとなると、夜の学校にどう入ったものか…。」

困ったような美鶴の言葉に順平が笑顔で返事をする。

「それ、ご心配なく。その事なら仕込みが済んでマス。」

「仕込み…？爆薬か？フフ、いいだろう。今回は任せよう。」

「時間が惜しい。出るぞ。」

美鶴と明彦は外へ出ていった。

「…爆薬？」

「…盗みは犯罪だよ。」

「何を盗むんだよ!？」

順にゆかり、湊の言葉に順平が叫ぶように返事をする。

「鍵開けといたってだけなんだけど…。」

学校

特別教室の並ぶ一階の一番端にある非常口から校内に侵入する。

「すんなり入れたっしょ？オレって、なんっつーか天才？」

「自慢するほどの事？」

ドヤ顔で自慢する順平に呆れる岳羽さん。

しかし先輩方は違ったらしい。

「昼間のうちに鍵を…ブリリアント！」

「グツジョブ。時間が惜しい。行くぞ。」

二人は恐らく彼らの知っている中の最上級の褒め言葉を言うと二階に向けて走っていった。

「あの人…なんなの？」

「ブリブリとかって、なに？どういう意味？日本人は日本語使って欲しいよナ…。」

ニュアンスでの大まかな意味すら分からないのはどうなんだろう…。

校内 二階

先輩の後を追うと、2-F前で立ち止まっていた。

「伊織、ここの鍵は開けていないのか。廊下に見つかりそうなんだが…。」

「あ…すんません。」

俺はポケットからピッキングツールを出して鍵を開けた。

ドアを開け、中に入る。

「…なんつつーか、軽く犯罪じゃね？」

まず不法侵入自体が犯罪だ。今更一つや二つ罪が増えた程度では何とも思わない。

「それより電気つけましょうよ…。」

「怖がつつちゃってまー。」

「怖くないつつの！…アホか。」

「ア、アホはないっしょ？」

いつもと変わらない二人を真田先輩が諫める。

「騒ぐな。この時間は、主電源が落ちてる。それに暗いままの方が都合がいい。」

不法侵入をしているのだ。明かりを点けてばれたら校内から追い出されて作戦が台なしとなりかねない。

「なんか、コソコソしててヤだなあ…。」

桐条先輩は手早く説明を始める。

「まずは、体育館の鍵を手に入れるぞ。職員室か校務員室にあるはずだ。二年の君らは職員室をあたれ。私達は校務員室を回ろう。その後で、一階の玄関ホールに集合だ。いいな？」

「職員室のガサ入れか…。テストの問題とかあるかも？ウヒヒ…。」

「俺も職員室にするかな…。校務員室より面白そうだ。」

小声で言っているつもりらしいが辺りが物音一つしない為によく聞こえた。

「私の目の前で不正の算段か？事実なら処刑だな…。」

空気が冷気を帯びて順平と真田先輩は慌てる。

「う、嘘に決まってるじゃないスか。嫌だなー、もー。」

「誤解するな、面白いと言ったのは可能性が高そうだという…。」

「言い訳はいい。それより校務員室へ向かうぞ。…伊織、君も私と来い。」

先輩達は教室を出ていった。

教室内に岳羽さんと二人きりになる。

「じ、じゃあ、私たちも行こうか。」
俺達もドアにきちんと施錠して教室を後にした。

階段を降りて玄関ホールまで来ると、自分達とは違う、もっとゆっくりにした足音が聞こえてきた。

「…なんか、聞こえない？」

足を止めるとその足音がはっきりと聞こえる。

「な、なに…？ 私たちの他に…誰か居るの…？ とととにかく、隠れよう！」

柱の影に、二人で隠れた。

隠れた際に岳羽さんに軽く当たり、彼女が硬直したのが分かったが気付かない振りをした。

足音が段々と近くなっていく。やがて懐中電灯の明かりが見えた。その明かりは辺りを適当に照らした後、すぐに方向転換をして足音は遠ざかっていく。

「警備の人か…。おどかさないですよ…。」

「…急ごう。」

「わ、分かってるって…。」

ピロピロピロ…

「ウギヤ！ケ、ケータイ!？」

ポケットから携帯を出す。

総司からの電話だった。

「マナーモードにしときなよ…。」

「悪い。…でも怖がりすぎ。」

「……うー…もはやビビりでいいけど。」

何かを諦めたらしい岳羽さんをよそに電話にでた。

「…時間を考える。」

『どうせ兄さんは起きてるだろ?』

起きているから電話に出ているのだが…。

「…で、何の用？」
時間が無いことを思い出し、職員室に向かって歩き出す。
『今度の金曜に学校見学も兼ねてそっちに行くから案内よろしく。』
「…分かった。」
『ところで今何してんの？』
「え、不法侵入。」
『…早く捕まれ。』
職員室前につく。
「うるさい。じゃあな。」
一方的に電話を切った。

職員室

これまた鍵を強引に開けて鍵置場を二人で探した。
「体育館、体育館…。もう…暗くて字がよく見えないな。この鍵、
なんて書いてある？」
携帯の明かりで字を見る。
「…体育館。」
「どれどれ！？…ホントだ、やり！じゃあこれ、ちよつと拝借。」
体育館の鍵を手に入れた。
「さ、戻りましょ。待ち合わせ場所は玄関ホールだよ。」

玄関ホールには既に桐条先輩たちが待っていた。
「鍵はあつたか？」
「ゲットしてます。」
岳羽さんが体育館の鍵を見せた。
「途中、なーんか聞き覚えのある声でギャアとか聞こえたけどなー。」
「ちよつ…」
「えっ、テキトー言ったのに、凶星？」

「…ケンカ売ってる？」

「騒ぐな。」

いつもの二人を再び真田先輩が諫める。

真田先輩はこの作戦に並々ならぬ想いとやらがあるらしい。いつになく真剣だ。

「よし、改めてチームを二つに分ける。三人がこのままタルタロスに突入。私と有里が外でスタンバイだ。影時間に入ったら、私が位置を割り出す。」

「よっしゃー！汚名バンカイすつぜー！！」

「…汚名は返上。…はあ、不安だな。」

順平の叫びに岳羽さんがため息をついた。

「そろそろ時間だ。」

「行くぞ。」

そして各々行動を開始した。

影時間

寮内の空き部屋に森山夏紀はいた。

美鶴が割り当てた部屋には一通りの家具が揃っており、一日泊まる分には全く不自由しない。

明かりの消えた割には比較的明るい室内のベッドに腰掛け、ぼつりぼつりと言葉を紡ぐ。

「アタシ…そつか、アタシ…。」

そこで誰にでもなく話していく。

「結局、独りなんだ…。」

唐突に自覚した現実。

それとも今まで無意識の内に目を逸らしてきた事実と言っべきか。

「風花…。」

どこからともなく地を這うような気味の悪い音が響く。

「え…。」

ともすれば声とすることも出来ない事もないが、何を言っているのかまでは分からない。

「これ…イヤだッ…イヤだよッ!!」

森山は両手で耳を覆い頭を振るが再度したその声を聞いた時、その顔から表情が消えた。

「呼んでる…。そうだ…学校…学校、行かなきゃ…。」

虚ろな表情でぼつぼつと呟く森山はゆっくりと立ち上がる。

「謝らなきゃ…。風花…。」

そして彼女は操られるように部屋を出た。

侵入（後書き）

今年最後の更新です。

これからオルフェウスの出番が一時的に無くなります。

年明けて最初の更新は大型戦…ではなく風花救出の予定です。

ではよいお年を。

救出（前書き）

明けましておめでとうございませう。

今年初投稿にして湊はでできません。

救出

黒い靄を背負う無言の背中。

頼もしかった背中とは思っていた以上に小さくて。

あの小さな背中にどれほどの重荷を背負ってしまったのか、不安になった。

いつか絶対に潰れてしまう。

だから…。

…そう、だから私は…。

気がつくともタルタロスの中だった。

どうも意識を失っていたらしい。

うーん…色々と頑丈にできてる筈なんだけどな…。

軽く頭を振って意識をはっきりさせる。

周りは紫がかった暗い色の壁だった。

えー、見た事無い景色だよー…。

真田先輩や順平とはぐれてるみたいだし、美鶴先輩とは連絡も取れない。

…うん、えーっと、絶体絶命？

…え！こここれってあれかな？二重遭難とかいう…？

ええ！ちよつ、待ってよ！私こんなとこで死ぬ予定なんて無いんだけど…！

ここが何階かとか分かんないし！た、助けてお兄ちゃん…！！

『…無事…か？』

「お兄ちゃん…！！」

あ、違った。先輩じゃん…。

…ん、先輩からの通信!?

やったよ!私は生き残ったよ!!

美鶴先輩からの通信は距離が遠いせいか、かなりノイズが混じっている。

『距離…が遠…く…こちら…からの…の…サポートが…。』

…はい?

『すま…ない…。…明彦たち…と…。』

通信が途切れる。

「…もしもし?もしもし。せんぱーい。おーい、美鶴せーんーばーい!」

…。

「…美鶴ちゃん。」

…。

駄目だ通信切れてる。

さっきの通信ってあれだよ。距離が遠すぎてサポート出来ないから自力で真田先輩たちと合流してね?って…。

不利な状況変わり無し!?結局一人でどうにかしろって事かい!!

いいもん!片っ端からシャドウをぶった切ってやるもん!!

事の始まりは一週間程前。オンリヨウとか言う噂が出回った。何でも校門前で倒れていた学生がオンリヨウにやられたとか。

怖がるゆかりがとつても可愛かったんだよねえ。

動画に収めたかったわ!!

…。

…一旦それはおいておいて、二年生で情報集めて現地調査までした訳よ!

たまり場っていう場所に行ったの。

順平が言うには“漫画みたいな場所”らしいからすごく楽しみにして行ったんだ。

案の定、荒れに荒れたたまり場には不良が何人もいた。

最初こそ期待でドキドキしてたけど、見た目がいかにも遊んでますうっていう彼らに苛々した。

仲間とそれ以外で簡単に線引きし、仲間以外は受け付けない。

…ぶあつかじやなかるうか!!

自分から世界を閉じて何偉そうに。貴様らなんぞ井の中の蛙以下だ！蛙に可哀相だ謝れ!!

順平を殴ろうとした不良の臍を蹴ると素早く順平の腕を掴んで下がる。

順平はたたらをふんだが倒れる事なくついてきた。

煩く絡んでくる不良を最低半殺しにしてやろうと構えた時、唐突に、それは何の前触れもなく現れた。

…有里湊。

私の、お兄ちゃん。

気付いたら順平にたまり場の端まで連れて来られていた。

…違う。

…あれは何？

…あれは、なに？

その後、山岸風花っていう子がタルタロス内部にいるらしいという話になって、ここに来た。

一人で探索しながら考える。

あれが本当にお兄ちゃんなのか。

気付いてみればあの鏡が本当を写しているとは限らない。

エリザベスが言っただけで彼女はテオにも嘘をついていたそれにつ。

…いや、正直に言おう。

私は信じたくない。

お兄ちゃんがあんなものを背負わせられていると、信じたくないのだ。

…変わっていて、欲しくないなあ。

…ジジツ

通信機から洩れてきたノイズ音で現実に戻る。

シャドウは意識しないまま逃げて来たらしい。

『明彦…私たちは…この…階には…。』

…

“誰…？人…なの？”

…

通信が途切れる。

先輩の通信の後に、涼やかな女の子の声が出た。

……………ユーレー？

思った以上に狭い階層のようで苦もなく進んでいく。

度々通信が届くのだがこちらの声が届いているようには思えない。

そして上にいくに連れて女の子の声が強くなっていく…気がする。

…やっぱりユーレーなのかな？

会ってみたいけど…いやでも会いたくないよう。

うろつろしているうちに、二つの人影を見つけた。

「おー、ようやくお出ましたよ。心配したぜ…ったく。」
順平の言葉に軽く笑って返す。

「今後は、こういう入り方は無理だな…。」

「あ、つーかさ！ここ来る途中に“声”聞かなかった？えーと、なんつつつたらいいか…。」

「…あのユーレー？やばいよ順平！私怨まれる事いっぱいしてるから取り憑かれるよ!？」

「自覚済みかよ!？」

「…お願いしますユーレーさん！私じゃなくて順平に憑いて下さい。」

「しかも身代わり!！」

「誰…？人…なの」

「わ、わ、こ、この声!！」

咄嗟に順平の制服を掴んで後ろに隠れる。

「つか、後ろからか…？」

順平（盾）を反転させます。

「あ…。」

盾からこっさり覗くと一人の少女が、陰からこちらの様子を伺っている。

「山岸風花か？」

「は、はいっ…!！」

真田先輩の問いに答えた彼女。ユーレーじゃ無かったのか、残念。順平から離れる。

「おおっ、生きてたー!!すげー!!もう大丈夫だぜ!オレら、救助隊だからサ!」

「よかったな…俺たちと一緒に来い。」

「ありがとうございます…。私…。」

「フツ…俺の判断は正しかったな。美鶴に連絡を入れておくか。」

真田先輩は少し数歩離れて美鶴先輩と通信し始めた。

「ねえ、山岸さん。風花って読んでいい？」

山岸さんって呼びにくいよね。

「え、マジで！じゃあオレツチも「却下。」早いよ！？」

順平が話し終わる前に否定する。

こんなエロおやじは却下に決まってんでしょ。

「わ、私はいいよ？」

「じゃあ風花って呼ぶね。」

笑顔で言ってみただけ風花の浮かない顔は変わらなかった。むう…。

「ここ、一体どこなんですか？私、学校にいた筈なのに、なんでこんな…。」

「んー…その話は、ちっと長くなんな。戻ってから説明するっス。」
まあ、当然の疑問だよな。

「美鶴、聞こえるか？…。…やっぱり駄目か。ノイズが酷いな。」
真田先輩は通信を諦めたらしい。

あれだけノイズが酷かったらねえ。

「あ、ケガとか、だいじょぶか？つーかここ、化けモン出るだろ？」

「じゃあ、やっぱり…ここ、何か居るんですね…。今のところ、なんとかが見つからずに済んでますけど…。」

…はい？

「見つからずについて、一度もか？どうやって!？」

「ええと、何て言ったらいいか…居場所が、何となく分かるっていうか…。」

「分かるって…なんだそりゃ？オソナのカンってやつ？」

そつか順平は私に喧嘩売ってんだなそうだな！

女の勘で出来るんなら私だつてとつくにやってるわ!!

「美鶴と同じ力か…。いや、それ以上かもしれない。あいつのペルソナは本来は戦闘タイプだからな。」

「ペルソナ…？」

真田先輩、それ風花に通じないから…。

「これを持っていてくれ。」

真田先輩は、風花に召喚器を手渡した。

「エッ！？こ、これって、ピストル！？」

驚く風花。見た目や重さは本物っぽいもんね。

「お守りのようなものだ。弾は出ない。」

「お守り…。」

「こっやって使うの。」

パアン、と自分の召喚器で頭を撃ち、モコイを呼び出す。

「よし、急いで戻るぞ！」

心の中だけ急いでいるつもり程よいスピードで歩き出した。だって風花はもう無理できなそうだからね。

タルタロス内 見晴らしの良い通路

「月、デカツ！！明るッ！！」

順平の声に全員が足を止めて外を見た。

…デカツ！！

「ってか、こんなキラキラしてたっけかあ？」

「月の満ち欠けは、シャドウの調子に影響するって説がある。もっとも、人間も同じだがな。」

真田先輩が以外にまともな事を…！

「ゆかりツチがプリプリしてたのも、お月さんの影響さかねえ？モノレールの時も丸かったし。」

「ん？…前も丸かった？」

いきなりこつちを見てきた真田先輩に順平が驚く。

「な、なんスか！？」

「おい、四月に寮が襲撃された日、月を見たか？」

「知りませんよそんなの。」

っていうか寮って襲撃されてたの？…知らんよそんなの。

しかしそんな言葉に止まる真田先輩じゃなかった。

「今日が六月八日…モノレールで戦ったのが五月九日…。寮の襲撃は四月九日だ！…全て満月だ！」

…よく覚えていられるね。私は今日の日付だってあやふやなのに。真田先輩は通信機に向かって叫ぶ。

「美鶴、聞こえるか!？」

電波状況が比較的いいのか、辛うじて通信が繋がる。

『…明彦か…シャ…ウが…』

「おい、聞こえているのか？返事をしろ、美鶴！」

『…気おつけ…』

「美鶴!？おいッ！」

慌てたような声で通信がブツリと切れる。

それとほぼ同時に風花が顔を上げ、両手を顔の付近まで上げた。

「…なに…これ…。今までのより…ずっと大きい…しかも…人を…襲ってる…。」

…って事は下に居る美鶴先輩とゆかりが危ない！

「くそッ!！」

真田先輩も即座に理解したらしい。

「な、な、なんスかつ!？分かるように説明して下さいよっ!！」

「出たんだ!おそらく…ヤツらは満月に来るんだ!…急ぐぞっ!！」

真田先輩が走って行った。

「風花、走れる?」

「は、はいっ!」

風花の手を掴んで走り出す。

「ちょ、ちよつとーッ!！」

順平も後を追ってきた。

右に左にと曲がっていくと脱出用の転送装置を見つける。

「先輩!順平!見つけた!！」

二人が追い付く前に装置を起動し、素早く飛び込む。

エントランスに着いた瞬間、
“何か”が横を突き抜けた。

救出（後書き）

次回満月戦です。

女帝 皇帝（前書き）

満月シャドウ戦です。

女帝 皇帝

建物を出て校門前に待機する。

外に居るのは俺、桐条先輩、岳羽さん。

何故探索組であるはずの岳羽さんがここにいるのかは謎だがどうでもいい。今はただ考えたくない。

桐条先輩が学校を見ながら口を開く。

「さて、有里。話をしようか。」

…慎んで遠慮します。

そんな俺の心理を理解してか、真っ正面から俺を見てくる。

「あの力が暴走しないことは聞いた。しかしあの力自体がどういうものかまだ聞いていない。…聞かせて貰おうか。」

目を逸らそうにも桐条先輩の眼力が強くて動かせない。

…逃げられない。

逡巡するような間を置き、ゆっくりと口を開く。

「…あれはー…」

ゴゴン…

影時間に入り、タルタロスの現れる音で声が掻き消えた。

「有里？今、何と…。」

消えた言葉に揺れた桐条先輩から視線を外す。

自然と頬が緩んだ。

「…俺は一体、何なんでしょうね。」

笑みにしては弱すぎるそれでも彼女には何か思う事があるのか、一瞬目を見開いて固まっていたがすぐに自分たちのするべき事を思い出したのか、無言でタルタロスに入ってしまった。

岳羽さんは俺と桐条先輩を交互に見た後、先輩に続いてタルタロス

に入っていく。

「やあ。」

…!?

振り返るといつかのしましま幽霊少年がいた。

…そういえばこいつは幽霊だと認識していても不思議と恐怖を感じない。

「君の部屋の外で会うのは初めてだね。」

「…そうだな。」

少年は軽く瞳を伏せる。

「君はさつき、彼女らに教える気は無かったね？」

「…ああ。」

もとから教える気など全く無かった。敢えてタイミングを計り、タルタロスの出現に合わせたのだ。

他の人なら無理でも俺ならば簡単な事だ。時計もいらぬ。

「…じゃあ、何で君は声に出して言ったのかな？」

「…っ!!」

俺を見た少年は悲しそうな笑みをした。

「ごめん。意地悪だったね。今日伝えに来たのは別の事なのに。」

「…別にいい。」

少年から顔を逸らす。少年相手に文句を言う気は無い。

「…今夜、君にやってくる試練は、どうも一つじゃないみたいだ。

とにかく、急いだ方がいいよ…。“彼女”が待ってる。今の君たちには、必要な人だ。じゃ、また会えるといいね。」

少年は消えてしまった。

この力が何であるかを口にしたという事実。

もしかして、俺は自分の事を話したいのか。

…馬鹿馬鹿しい。

タルタロス エントランス

先に入ったゆかりと美鶴が待機していた。美鶴はいつもの場所で明彦たちの居場所を探る。ゆかりはその場で少しもじもじとしていたが気まずい空気に堪えられなくなったのか、美鶴に話し掛ける。

「あの…。」

しかし美鶴は通信に集中していたため、聞こえていない。

「なかなか連絡が無いな…。通信の感度は最大なんだが…。」

ゆかりは一度ため息をつき、わざとらしい程の明るい声で話題を振る。

「そ、そういえば、あの森山って子…寮に一人きりで、大丈夫ですかね。」

この問いには美鶴も返事を返した。

「正直を言えば、影時間に絶対安全な場所など無い。だが、ここへ連れてくる訳にも、彼女の為だけに一人割く訳にもいかないだろ。」

「そうなんですか…。」

美鶴が操作に集中し、会話が終わる。

ちょうど湊がエントランスに入ってきた。

ゆかりは何とか話を続けようとする。

「…でも、山岸さんの救出には、こうして全員で…。」

『美鶴、聞こえるか?』しかし明彦からの通信が邪魔をした。

通信はノイズが混じり、所々聞き取りづらい。

「私だ。いま、そちらの位置を確認した。思ったより上だな…通信がギリギリだ。それより、三人とも無事か?」

『…だ、わ…らな…。』

「明彦!おい!」

美鶴の叫びも虚しく通信が途切れる。

「…通信圏外とかですか?なんか、心配ですね…。」
ゆかりがぼつりと呟いた。

エントランスに入るとちょうど探索組と連絡が取れたようだった。上へ続く階段の途中に座り、背中を預けて上を見る。

背中に当たる段差がちょうどいい場所に当たって気持ちいい。

桐条先輩は何度も通信を試しているが届いているかどうかは定かじやない。

「…そういうば先輩、知ってますかあ？」

顔を上に向けている為、自然と語尾が伸びる。

二人の視線が自分の方を見たのが分かった。

召喚器を抜いて天井に銃口を向ける。

カチン、と間抜けな音がした。

「例の大型シャドウ、満月の度に現れるんですよ？」

空気が固まった音が、確かにした。

「…有里。いきなり何を言ってるんだ。」

「上の彼等を急がせて下さい。今日は月が真円を描く。」

外に通じるドアが轟音とともに軋んだ。

何かが、外からドアを叩く。

召喚器を一度戻して矢を二本つがえた弓を水平に構える。

「…満月だ。」

ドアが乱暴に開かれた。

入ってきたのは二体の大型シャドウ。

あの少年の忠告通り。

片方は背が高く、所々に赤が入っている。手には俺の身長を裕に越える長さの剣を携えていた。

もう一体は身体が横に大きく、所々水色が入っている。背にはマン

トを、手には杖を持っていた。

エンペラーとエンプレスだ。

どちらも胴体部分に鎧のような物を巻いていて物理系統は通じそうにない。

シャドウ全てが見た目通りとは限らないのだが。

扉が開き、二体が入って来たタイミングで矢を放つ。

矢の行き先を確認せずに弓を捨てて大剣を抜いた。

「先輩は通信に集中。余裕があるならアナライズ頼みます！岳羽さん、上が戻って来るまで二人で抑える！」

階段を飛び降り、勢いをつけて大剣を振り下ろす。

ガンという音と共に弾かれ、両手が痺れた。

「っあっ…！」

シャドウの周りを疾風が駆け抜ける。

岳羽さんの全体疾風魔法、マハガルだった。

その間に態勢を整える。

どちらのシャドウも攻撃が効いた様子がなく、スムーズな動きで俺と岳羽さんにそれぞれ斬撃と打撃を放って来た。

俺は何とか回避したが岳羽さんはまともに食らった。

岳羽さんが態勢を崩す。

「なっ…気をつけるっ！攻撃が通らないっ！」

アナライズが終わったのか、桐条先輩が叫ぶ。

「ええっ！それじゃあ倒せないよ！！どうすんの!？」

岳羽さんの言う通り、攻撃が通らない相手はこっちが不利過ぎる。単なるなぶり殺しだ。

エンプレスが先程岳羽さんが放ったものと同じマハガルを放つ。

身体に複数の切り傷が生まれる。

態勢を崩していた岳羽さんは疾風に対して耐性を持っているためダメージが少ない。

だからと言っていつまでもこうしてはいられない。

こちら側が圧倒的に不利なのだ。
せめて相手の攻撃を抑えられたら…。

防御する姿勢をとりながら時間を稼ぐ方法を考える。
再び降り注ぐ打撃と斬撃。

耐え切ったとき、一つの案が浮かんだ。

…随分と運に頼った案だったがこの際気にしてもらえない。

召喚器を素早く抜き、瞬時に集中する。

今まで一度も使ったことの無い技。

しかし躊躇う事無く引き金を引いた。

「ジャックブライザー！」

銃を撃つと実際は弾は出ないのだが銃とは反対の方向へ頭が弾かれる。

硝子の碎けるような音と共に少し身体を丸め、両手で抱いた光を一気に開放すると二体のペルソナがドロンと顕現する。

一体はジャックフロスト。雪だるまに手足が生えた青い帽子を被っているペルソナ。

もう一体はジャックランタン。ハロウィンのカボチャに魔女の帽子とマントを纏い、ランプを持ったペルソナ。

「嘘！？二体も呼べるの！？」

岳羽さんの驚きをよそに二体のペルソナは間にマイクを置き、ヒホヒホ、と何かを話し出す。

恐らく漫才をしているのだろうが俺達には何を言っているのか分からない。

フロストとランタンが同時にポーズを決め、紙吹雪が舞うと運よく二体とも態勢を崩す。

「よし、総攻撃チャンス！」

「却下。」

突撃しようとした岳羽さんを止める。

態勢を崩した相手は次の攻撃を放つまで多少のタイムラグが生じる。それだけこちらが受けるダメージが減るのだ。

どうせ攻撃が効かないのならば総攻撃は余計な体力を消費するだけだ。

シャドウが動けない間にプリンシパリティで回復魔法を掛ける。攻撃が効かない相手ってのは実にもどかしい。こうしてちまちま時間を稼ぐしかないのか…？

立て直したエンプレスは岳羽さんにデビルタッチを仕掛ける。

「ひっ…！」

恐怖状態に陥った岳羽さんが全身を震わせながら弓を下ろす。目の焦点が合っていない。

「岳羽さん！」

恐怖で固まる岳羽さんをエンペラーが掴みに来た。

咄嗟に岳羽さんを庇い、エンペラーにわしづかみにされる。三メートルを越える高さまで持ち上げられた。

「きゃあっ！」

下に残された岳羽さんに打撃と斬撃が降り注ぐ。

身体はぐいぐいと締め付けられてギシギシと悲鳴を上げる。

それでも何とか声を発した。

「岳羽、ガル！」

その叫びに反応したのか、岳羽さんがペルソナを呼び疾風攻撃を発動する前にエンペラーは俺を床に叩きつけた。

「があっ…！！！」

「有里君…！！！」

恐怖の解けた岳羽さんの悲鳴が響く。

受け身も何も取れなかった。

身体は一度床でバウンドし、バキイ、と嫌な音が体内で響いた。確実にどこかの骨が逝った。

全身が痛み、どこがどうなっているのか分からない。

それでもこのまま寝ているわけにも行かない。

それこそ簡単に潰される。

まだ戦闘は続いているのだ。

「…っあああっ！」

声を出して痛みには堪え、身体を起こす。

まだ、まだ動く！

岳羽さんを攻撃していたエンペラー・エンプレスと、目があった気がした。

…やばい。

危険を察知出来ても身体はついてこず。

エンプレスのガルで吹き飛ばされ、壁に背中を打ち付けたところにエンペラーの大剣が突き抜けた。

「かはっ…！」

喀血する。

大剣は胸骨のすぐ下を貫通していた。

大剣を投げ付けた態勢のエンペラーが見える。

身体に力が入らない。

指先から段々と冷えていくのに傷口だけは焼けるような熱を放っていた。

…死ぬな…。

段々と黒く染まっていく意識の中、ただぼんやりと思った。

湊がやられた事で固まったゆかりと美鶴に対してシャドウは容赦無く襲い掛かる。

「うっくっ…！」

美鶴がダメージを負い、バイクが転倒する。ガシャンと音が響き、

確実に何かが壊れた。

ゆかりがメディアを掛け、傷が少しだけ回復する。

シユオオオン

風の鳴くような音と共に風花、明彦、順平が転送装置上に現れた。

「美鶴！」

「これは…！？」

現状に言葉を失いかける三人だが、順平は素早く状況を把握する。

「真田サン！シャドウの気い逸らさないと！」

「分かっている！…貴様らの相手はこっちだ！」

シャドウの気を引く為に声を発した明彦に対して美鶴が警告をする。

「明彦、気をつける…。こいつら…普通の攻撃が効かない。」

エンペラーは長い腕をさらに伸ばし、湊ごと大剣を引き抜く。

エンペラーが大剣を構えると、自重で先に刺さる湊が根元までずり落ちてきた。その身体には全く力が入っておらず、意識を失っているのが分かる。

ゆかりが悲鳴をあげ、美鶴が唇を噛み、順平、明彦はシャドウに突っ込む。

風花は目を見開いて両手で口を被った。

順平と明彦を振り払うかのようにエンペラーが剣を真横に振った。

遠心力によって湊の身体から剣が抜け、そのまま壁に叩きつけられる。

湊は、全く動かなかった。

一番回復技に長けているゆかりがすぐに駆け寄り、回復スキルを使う。

「嘘っ！何で…何で効かないの…！？」

焦るゆかりの手を、別の手が掴んだ。

ガシャン

唐突に響いた音は、タルタロスの外から誰かが入って来た音だった。

「ふ…風花…」

虚ろな表情で呟いた彼女は森山夏紀だった。

「馬鹿なっ、何故…来た!？」

「まさか…森山さん!？逃げてっ!!ここは危ないからっ!!」

美鶴と風花の叫びに森山が顔をあげ、風花で焦点が合う。

「あ…あたし、あ、あんたに、謝らなきゃって…」

笑ってるような泣きかけているような震える声で風花に伝えようと必死な彼女には、周りの状況が全くといい程見えていない。

その背後でエンペラーが大剣を振り上げる。

「おい!危ねえ!!」

順平が叫ぶが、エンプレスの相手をしていてエンペラーまで手が回らない。

「森山さんッ!私が…守らなきゃ!」

風花は森山に駆け寄る。

森山とエンペラーの間、ちょうど斬撃がくる場所に立ち、風花は自らのこめかみに持っていた召喚器をあてがった。

ガァン…

大きな音と共にペルソナが召喚される。

「山岸さん…!？」

「ペルソナ…?」

薄い茶色の長い髪を漂わせたペルソナは赤い顔の上部に包帯を巻き、ピンクのドレスを纏っていた。本来ならば足があるであろう場所には透明な球体が目玉のような装飾とともにあり、風花はその内部にいた。

順平が疑問系で呟いたのは普通のペルソナは呼び出した人の後ろに顕現するためだろう。

エンペラーの大剣は風花のペルソナ・ルキアによって受け止められ

ていた。

『私…見える…。私…あの怪物達の弱いところ…何となくだけど、見えます…。』

風花の言葉に明彦が自信たっぷりの笑みを浮かべた。

「…思った通りだ。美鶴。バックアップは、彼女が代わる。こいつらは俺たちで片付ける!!」

『指示して下さい。私が…敵の弱点を調べてみます。』

「じゃあさっさとするよ。」

明彦が構えた時、シャドウの背後から湊の声がした。

全員の視線がシャドウの背後に集まる。

彼は右でナイフをくるくると回して逆手に持ち、左で髪を掻き上げていた。頭を振る。

「緑の彼女はエンプレスをアナライズ、赤ベスト、髭帽子は攪乱、ピンクは回復優先、嬢は彼女ら二人の護衛ね。」

彼は素早く指示を放ち、床を蹴る。

エンプレスの側頭部を踵が捉えた。

エンプレスを再び蹴り、シャドウの前に立った彼は手を二回叩く。

「ほらほら、動く動く! 処分されなくなったら行動、行動!」

湊らしくない言動に固まっていた者もやっと動き出す。

『えっと、エンプレスは、普通の攻撃が効きません。風、火、雷、氷が弱点です。』

「次、エンペラーをアナライズ。三人はエンプレスの弱点を突け。」

『は、はいっ!』

それぞれがペルソナを召喚し、明彦がジオ、ゆかりがガル、順平がアギを放った。

雷撃、疾風、火炎と弱点を突かれたエンプレスが態勢を崩す。

確実にダメージが入っていた。

「その調子だ、もう一度食らわせてやれ。嬢もう少し下がれ、剣先が当たる。」

エンペラーの大剣をナイフで捌きながらそれぞれに指示を出す。

美鶴は二人と共に下がり、三人は再び同じ技を繰り出す。

『エ、エンペラー、普通の攻撃が弱点です。風、雷、氷、火は効きません!』

「次の指示まで待機。エンペラーに物理攻撃を叩き込め!」

明彦が素早く近付いて拳を叩き込み、順平がヘルメスを呼び出して貫通技・二連牙を繰り出し、ゆかりが矢を放つ。

その間に彼はエンペラーの背後から跳び上がり、逆手持ちにしたナイフで首を掻き切る。

エンペラーも耐え切れずに態勢を崩した。

「よっしゃー! やつてやるぜー!」

順平の雄叫びと共に四人で突撃する。

幾度と無く拳で殴り、矢で射、剣で断ち、ナイフで捌いた。

『あ、何だか弱ってきたみたいです。』

相当量ダメージを与えた筈だがまだ二体とも倒れない。

《パラダイムシフト》

エンプレス、エンペラーが何かを使用した。

『えっ…ええっ! そこにいるよ!?! どうして?』

風花が急に慌て出した。

「敵に何かあつたのか!？」

『えっと…いえ、そうじゃなくて…いやあの、でも…。』

「敵に関係ないなら話は後! それからアナライズ、エンプレス! …落ち着いてやれ。」

『はいっ!』

「他は敵の攻撃に備えろ。」

全員が防御の姿勢をとるとエンプレスがマガルを発動した。疾風弱点の順平はあらかじめ構えていた為に倒れなかった。

他も多少傷ついていても動くには邪魔にならない。

『火が弱点です! 他は効きません!』

「やってやんぜー!」

順平がエンプレスにアギを放つ。

ほぼ同時に投げたマハラギジェムが発動して二体が火炎に吞まれた。

「よし、総攻撃チャンス！」

ダウンしたシャドウに再度の総攻撃を仕掛けた。

大型シャドウ二体でも流石に総攻撃二回は辛かったらしい。

ジュワアアと蒸発するような音と共にシャドウが黒い霧と化して消滅した。

女帝 皇帝（後書き）

すみません。瀬田の総司君ですが、名前を鳴神悠に変更したいと思います。

理由は湊がひたすら悠君と呼ぶ図しか思い浮かばないから…要するに作者の能力不足です。

総司君ごめんなさい！

読者の皆様もすみません。名前の変更は彼だけになると思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4517u/>

境振背鳴の救世主

2012年1月12日01時03分発行